

博士学位論文

現代日本の若者の自然会話における性差
—フィラー、応答詞、接続詞、ぼかし表現の使用実態を中心に—

令和6年5月

王凱男

75D21118

岡山大学大学院

社会文化科学研究科

社会文化学専攻

目次

第1章 序論.....	1
1.1 はじめに.....	1
1.2 本研究の目的と構成.....	2
第2章 先行研究.....	3
2.1 基本概念.....	3
2.1.1 ジェンダー.....	4
2.1.2 コミュニケーションスタイル.....	4
2.1.3 社会的性役割期待.....	5
2.1.4 基本概念のまとめと本研究の位置付け.....	6
2.2 先行研究.....	6
2.2.1 言語とジェンダー研究.....	6
2.2.1.1 文末表現.....	7
2.2.1.2 人称詞.....	8
2.2.1.3 敬語（丁寧さ）.....	10
2.2.2 男女のコミュニケーションスタイルの研究.....	11
2.2.3 社会的性役割期待の研究.....	12
2.2.3.1 家庭における性役割期待.....	14
2.2.3.2 学校における性役割期待.....	15
2.2.3.3 メディアにおける性役割期待.....	16
2.3 まとめ.....	17
第3章 調査データと研究方法.....	18
3.1 分析対象とするデータ.....	18
3.2 基本的な文字化の原則.....	20
3.2.1 発話文の認定.....	20
3.2.2 表記方法と記号.....	22
3.3 研究方法.....	24
第4章 フィラーにおける性差の実態.....	24
4.1 はじめに.....	24

4.2 先行研究.....	25
4.3 調査概要.....	26
4.3.1 調査目的.....	26
4.3.2 調査データ.....	26
4.3.3 調査対象.....	26
4.3.4 調査結果と分析.....	27
4.3.4.1 男女どちらがフィラーを多く使うか.....	27
4.3.4.2 それぞれの性別でよく使用するフィラーの種類は何か.....	28
4.3.4.3 聞き手の性別が話し手のフィラーの使用に影響を与えるか.....	30
4.4 男女差の要因についての考察.....	31
4.4.1 男性が女性より多くフィラーを使用する要因.....	31
4.4.2 男女がよく使用するフィラーの種類が異なっている要因.....	34
4.4.2.1 女性より男性がマー類を頻繁に使う要因.....	34
4.4.2.2 ナンカ類が男女ともにほぼ同じ頻度で用いられる傾向がある要因.....	36
4.5 まとめ.....	37
第5章 応答詞における性差の実態.....	38
5.1 はじめに.....	38
5.2 先行研究.....	39
5.3 調査概要.....	40
5.3.1 調査目的.....	40
5.3.2 調査データ.....	40
5.3.3 調査対象.....	40
5.3.4 調査結果と分析.....	40
5.3.4.1 話し手の性別は応答詞の使用に影響を与えるか.....	40
5.3.4.2 聞き手の性別が話し手の応答詞の使用に影響を与えるか.....	43
5.4 男女差の要因についての考察.....	45
5.4.1 男女がよく使用する応答詞の種類が異なる要因.....	45
5.4.2 聞き手の性別によって男女の応答詞の使用変化が異なる要因.....	47
5.5 まとめ.....	50
第6章 接続詞における性差の実態.....	50

6.1 はじめに.....	51
6.2 先行研究.....	51
6.3 調査概要.....	52
6.3.1 調査目的.....	52
6.3.2 調査データ.....	52
6.3.3 調査対象.....	53
6.3.4 調査結果と分析.....	53
6.3.4.1 男女では、話し言葉においてどちらが接続詞を多く使うか.....	53
6.3.4.2 それぞれの性別で頻繁に使用される接続詞の種類は何か.....	54
6.3.4.3 聞き手の性別が、話し手の接続詞の使用に影響を与えるか.....	55
6.4 男女差の要因についての考察.....	57
6.4.1 男性が同列と対比の接続詞をより多く使う原因.....	57
6.4.2 女性が逆接の接続詞をより多く使う原因.....	60
6.5 まとめ.....	62
第7章 ぼかし表現における性差の実態.....	62
7.1 はじめに.....	62
7.2 先行研究.....	62
7.3 調査概要.....	63
7.3.1 調査目的.....	63
7.3.2 調査データ.....	63
7.3.3 調査対象.....	64
7.3.4 調査結果と分析.....	64
7.3.4.1 男女のどちらがぼかし表現を多く使用するか.....	64
7.3.4.2 各性別で頻繁に用いられるぼかし表現の種類は何か.....	65
7.3.4.3 聞き手の性別が話し手のぼかし表現の使用にどのような影響を与えるか.....	66
7.4 男女差の要因についての考察.....	67
7.5 まとめ.....	72
第8章 コミュニケーションスタイルにおける性差.....	72
8.1 はじめに.....	72
8.2 用語の定義.....	73

8.3 先行研究.....	74
8.4 調査概要.....	75
8.4.1 調査目的.....	75
8.4.2 調査データ.....	75
8.4.3 調査結果と分析.....	75
8.4.3.1 発話の長さにおいて、性差があるか.....	75
8.4.3.2 話題転換において、性差があるか.....	76
8.4.3.3 割り込みにおいて、性差があるか.....	76
8.5 男女差の要因についての考察.....	77
8.5.1 男性が女性よりも発話の長さが長い理由.....	77
8.5.2 男性の話題転換が女性よりも多い傾向にある原因.....	80
8.6 まとめ.....	82
第9章 終章.....	82
9.1 まとめ.....	83
9.2 結論.....	84
9.3 問題点と今後の展望.....	85
参考文献.....	86

序論

1.1 はじめに

言語は、社会の鏡として、その使い方は時代、文化、社会的地位、ジェンダーによって変化する。この多様性は、言語を通じて社会的アイデンティティと役割が構築される過程を理解する手がかりを提供する。特に、ジェンダーに関する研究は、言語教育においても重要な位置を占めている。日本語教育において、ジェンダーに関する研究をいかに導入すべきか等の取り扱いについては、定まった見解がまだないが、男女の話しことばの相違を教室で取り上げ、学習者に把握させることが必要である（小川、2006）。

これまでの言語学研究では、主に書き言葉におけるジェンダーに関連する表現が分析の対象とされている。作文、小説、テレビドラマの台詞など、特定の文脈での使用が主な対象である（井出、1979；中田、1989；小川、1996；黒須、2008 など）。しかし、日常の自然会話（話し言葉）においては、フィラー、応答詞、接続詞、ぼかし表現といった、まだ十分に研究されていない言語現象が数多く存在する。これらの要素は、話し手の思考や感情の表出、社会的関係の構築に重要な役割を果たす。特に、これらの要素は、話し手の性別に応じた使用パターンを示すことが多く、ジェンダーによる言語行動の違いを理解する鍵となりうる。

例えば、フィラーの使用は次の発言を考える際に時間を稼ぐために用いられるが、男女でその頻度や種類が異なることが示されている（わいのるず秋葉、2001；渡辺・外山、2017）。また、応答詞は会話の流れをスムーズにするだけでなく、相互作用の中で相手に対する敬意、同意、共感を示す手段としても機能し、性別による違いが確認されている（野口、2018）。接続詞やぼかし表現も、話し手の意図を伝える役割を担いながらジェンダーによるコミュニケーションスタイルの違いを示す（佐久間、1979；陳、2005）。

これらの先行研究は、主に 1990 年代や 2000 年代のデータに基づいて行われた研究である。最新の調査データを用いて現代の若者が自然会話で示す性差を解明することは、言語学だけでなく社会学的にも重要である。時代の変化とともに、言語使用のジェンダー差も変化し続けている。テクノロジーの進化、ソーシャルメディアの普及、文化的変化は若者のコミュニケーションスタイルに影響を与えており、必ずしも過去の研究結果が現代にも適用できるとは限らない。新しいデータで変化を捉えることは、現代の言語使用の実態を明らかにするのに有用である。

さらに、近年の社会言語学の研究では、会話は単なる言語行為の集まりではなく、参加者間の心理的および社会的な相互作用の場として捉えられている(定延、2000; 石黒、2008)。この観点から、会話中の言語選択は、話し手の社会的アイデンティティや心理状態に影響されるだけでなく、聞き手の性別、年齢、社会的地位などの要因によっても形成される複雑なプロセスと理解されるべきである。

本研究では、現代の日本人の若者を対象に、自然会話中におけるフィラー、応答詞、接続詞、ぼかし表現など、これまであまり注目されていなかった言語現象の使用実態と性別との関連を詳細に調査する。この分析にあたり、話し手および聞き手の性別が言語選択にどのように影響を与えるかを具体的に検討する。

言語の性差を考察することは、単に言語の表面的な違いや特徴を捉えること以上の意義を持つと言える。言語形式の違いは、性別による社会的役割や期待、権力関係、個人のアイデンティティの表現など、より広範な社会文化的な文脈を反映している。例えば、女性がより礼儀正しく、間接的な表現を用いる傾向があるのに対し、男性は直接的で断定的な言い回しを使うことが多いとされる(Lakoff, 1990; Tannen, 1990)。これらの男女差は、単なる言語的特性を超えて、ジェンダーに基づく社会的な役割や期待に基づいていることが多いのである。また、このような研究は、教育、心理学、社会学など他の学問領域においても重要な影響を与え、ジェンダー平等やコミュニケーションの改善に向けた実用的なアプローチを提供する可能性を持っている。

そこで、本研究では、言語使用における性別の影響を包括的に捉え、現代日本における若者の言語行動の実態と、その背後にある社会的性役割期待および文化的要因を明らかにすることを目的とする。本研究は、教育や社会政策の分野で、より公平で包摂的なコミュニケーション環境を実現するための示唆を提供することが期待される。また、日本語教育においても、ジェンダーに基づく言語行動の違いを理解し、多様なコミュニケーションスタイルに対する認識を深めることで、学習者のコミュニケーションスキル向上や教材開発への新たな指針を提供する可能性がある。

1.2 本研究の目的と構成

本研究は、現代の日本人の若者の自然会話におけるフィラー、応答詞、接続詞、ぼかし表現、発話の長さ、話題転換、割り込みの使用に関する性別の影響を考察することを目的とする。話し手と聞き手の性別がこれらの言語要素にどのように影響を与えるかを分析し、男性

と女性、それぞれの性別ごとの言語表現とコミュニケーションスタイルの特徴を明らかにする。また、文法的機能と社会的性役割期待の視点から、性差が生じる原因を考察する。

本研究の構成は以下の通りである。

第1章では、序論として、本研究の目的を明示し、論文全体の構成を概説する。

第2章では、本研究を読み進めていくために必要最小限の各概念および本研究の立場を明示する。また、先行研究において言語の性差を考察する研究を概観し、明らかにされた知見と未解決の課題を明確にする。

第3章では、残された課題を解決するために実施した調査の概要、データの特徴、そして研究方法を詳細に紹介する。

第4章から第7章までは、現代の若者の自然会話において、フィラー、応答詞、接続詞、ぼかし表現の使用に性差が存在するかについて考察する。また、性差が生じる原因を考察する。

第8章では、発話の長さ、話題転換、割り込みに見られる性差を調査し、会話全体の構造と男女のコミュニケーションスタイルの違いを考察する。

第9章では、各章の要点をまとめ、本研究の意義と今後の課題について論じる。

第2章 先行研究

第2章では、本研究の理論的基盤となる主要な概念と先行研究を詳しく検討する。これらの概念と研究成果に基づき、現代の若者の自然会話における性差の具体的な現れ方を解析するための理論的枠組みを構築する。第2章の構成は以下のようになる。2.1節では、本研究を理解するために必要な各概念と、本研究との関連および位置づけを説明する。2.2節では、先行研究のレビューを通じて研究課題に対する理解を深め、未解決の問題点を明らかにする。最後の2.3節では、本章をまとめる。この章での検討を基に、第4章以降で展開される実証的分析へとつなげる。

2.1 基本概念

本節では、本研究において中心的な役割を果たす概念を明示し、本研究の目的との関連を論述する。本節で取り上げる概念以外にも、本研究に関連する多くの概念があるが、それらは適宜議論の中で検討し、ここでは本研究の理解に必要な基本的な概念に焦点を当てる。

2.1.1 ジェンダー

ジェンダーは言語行動や社会的役割と密接に関連しており、本研究の理解を深めるために不可欠な概念である。本節では、ジェンダーに関する基本的な概念を説明する。

ジェンダーという概念は、1960年代に性科学者ジョン・マナーによって導入され、性の社会的側面が強調された。1970年代にはフェミニスト理論家たちによってさらに発展され、性別差別の社会構造を解明するために活用された。

ジェンダーとは、社会的な性別に関連する役割、行動、期待、アイデンティティを指す概念である。これは生物学的な性別（セックス）とは異なり、文化や社会により期待される役割が変わるものである（West & Zimmerman, 1987）。West & Zimmerman (1987) は、ジェンダーは生得的な属性ではなく、社会的な状況において「行われる」（doing）ものだと提唱した。ジェンダーは個人が日常生活で演じる役割であり、ジェンダーに従った行動を演じることで社会的な性別区分が再生産されると論じている。

この理論は、ジェンダーが一連の社会的プロセスであり、個々の行動や相互作用の中でどのように形成・維持されるかを探求するものである。したがって、ジェンダーは単なる個人の特性ではなく、社会的な相互作用を通じて絶えず生み出され強化されるものと理解される。この視点は、後のジェンダー研究に大きな影響を与え、文化的・社会的要因によるジェンダー形成の理解に寄与した。

本研究では、現代の若者の自然会話におけるジェンダー表現（性差）を探究し、フィラー、応答詞、接続詞、ぼかし表現などの言語要素がジェンダーによってどのように異なるかを分析する。West & Zimmerman の理論は、これらの言語要素が個人の選択だけでなく、社会的性役割期待に応じてどのように形成されるかを理解するための理論的枠組みを提供する。

2.1.2 コミュニケーションスタイル

コミュニケーションスタイルは、個人が情報を伝える特定の方法や行動パターンであり、その形成には文化的背景、教育、そして社会的状況によって影響される。この概念は、メッセージの伝達だけでなく、社会的アイデンティティや関係性の構築とも深く関連している（Tannen, 1990）。

初期の研究は主に異文化間コミュニケーションの文脈で進められていたが、ジェンダー研究の進展により、男女間のコミュニケーションスタイルの違いも重要な研究テーマとなった。当初、男女間のコミュニケーションスタイルの違いは生物学的要因によるものと考えられて

いたが、最近の研究では、これが文化的・社会的な学習プロセスの結果として形成されるという視点が提唱されている (Tannen、1990 ; Butler、1999) 。

Tannen (1990) は、日常の対話の観察を通じて男女のコミュニケーションスタイルの違いを「異文化の対話」と見なし、性別の社会的構築のプロセスを通じてコミュニケーションスタイルが形成されると論じた。この理論では、男性は地位の競争を重視し、情報交換や問題解決に重点を置く一方で、女性是对人関係と共感の表現を重視する。例えば、女性は相槌やフィードバックを使い、会話に積極的に参加しながら関係を築く傾向がある一方、男性は情報提供を重視し、自立性や専門性を強調する。この理論の重要な点は、コミュニケーションスタイルが単なる個人の選択を超え、ジェンダーの社会的構築と深く関連しているということである。

Tannen (1990) の理論と West & Zimmerman (1987) の理論は相互補完的なものであり、本研究では、若者が日常の相互作用の中でどのようにジェンダーを表現し、言語使用に影響を与えているかを明らかにする助けとなる。性別による言語使用の違いを解析することで、コミュニケーションスタイルが社会的期待とどう連動しているかを探ることができる。

2.1.3 社会的性役割期待

社会的性役割期待とは、社会が各性別に求める行動、役割、責任を指す概念である。この期待には、家庭、職場、言語の表出、公共生活での行動規範が含まれ、社会的・文化的背景や歴史的進化に深く根ざしている (Eagly & Wood、1999; Bem、1984) 。

Eagly & Wood (1999) によれば、「社会的役割理論」 (Social Role Theory) は、性別による行動差が生物学的要因だけでなく、社会的役割と期待によって形成されると主張している。この理論では、男性と女性が異なる社会的役割を担うことで、それぞれが望ましい特性や行動を発達させるとしている。たとえば、リーダーシップや競争的行動は男性に、協調性や感情表現は女性に奨励される傾向がある。

日本の社会的性役割期待に関する研究において、性別に基づく行動や役割の期待が文化的・歴史的な背景と密接に関連していることが強調されている。これらの期待は、家庭、職場、教育、言語、公共生活など、各領域での行動に影響を与えている。

上野 (1994) の研究は、日本における性別役割と家族政策についての深い洞察を提供している。上野は、日本の家族制度が家父長制の特徴を長く保持し、これが男性と女性の役割期待に深く根ざしていると指摘している。男性には経済的責任、女性には家庭内での育児や家

事の役割が伝統的に期待されており、これが女性の社会進出やキャリア構築を制限する文化的障壁となっている。この研究は教育や法制度を通じた性役割の固定観念の解体を提案し、より平等な社会の実現に向けた具体的な方策を提示している。

以上の理論的枠組みは、現代の若者の自然会話におけるジェンダー表現を理解するために不可欠であり、ジェンダーに基づくコミュニケーションスタイルや言語行動の特徴を分析する上で重要な視点を提供している。

2.1.4 基本概念のまとめと本研究の位置付け

2.1 節では、本研究の理論的基盤となるジェンダー、コミュニケーションスタイル、社会的性役割期待の3つの中心的概念を検討した。これらの概念は、現代若者の自然会話における性差の理論的分析に必要な枠組みを提供し、本研究の理解を深める上で不可欠である。

West & Zimmerman (1987) の理論によれば、ジェンダーは単なる生物学的属性ではなく、社会的状況に応じて「行われる」ものである。Tannen (1990) の研究を参照し、性別に基づくコミュニケーションスタイルの違いが文化的・社会的な学習プロセスで形成されることを示した。また、Eagly & Wood (1999) の社会的役割理論に基づき、性別による期待される社会的行動が文化的・歴史的背景に深く根ざしていることを説明した。

本研究では、これらの理論的枠組みに基づき、フィラー、応答詞、接続詞、ぼかし表現といった言語現象を通して性別によるコミュニケーションスタイルの違いを明らかにし、社会的性役割期待との関連を検証する。このアプローチにより、言語表現とジェンダーの相互関係を探り、性別に基づく社会文化的背景とのつながりを深く探求する。

2.2 先行研究

本節では、言語とジェンダー、コミュニケーションスタイル、社会的性役割期待に関する既存の研究を概観し、本研究の理論的基盤を構築する。本節を通じて、先行研究の限界を探り、本研究の新規性と具体的な方向性を明確にする。フィラー、応答詞、接続詞、ぼかし表現などの具体的な言語現象に焦点を当てた研究は、各章で詳述する。

2.2.1 言語とジェンダー研究

中村 (1995) によると、言語学における言語とジェンダーの研究は2つの流れに分類される (図 2-1 参照)。1つはジェンダー表現研究であり、もう1つは言語使用とジェンダ

一の研究である。

ジェンダー表現研究は、ある言語でジェンダーがどのように表現されているかを研究する分野である(中村、1995)。たとえば、女性や男性を表現する言葉に焦点を当てた研究では、英語圏の Lakoff (1975)、Cameron (1990)、日本語圏の寿岳 (1979)、遠藤 (1983)、田中 (1984)、中村 (1995) などが挙げられる。

一方、言語使用とジェンダーの研究は、ジェンダーによって言葉の使い方がどのように変わるかを研究する分野である。本研究で取り扱う「言語とジェンダーの研究」は、この分野に焦点を当てている。したがって、この節以降では、言語使用とジェンダーの研究を中心に論述する。

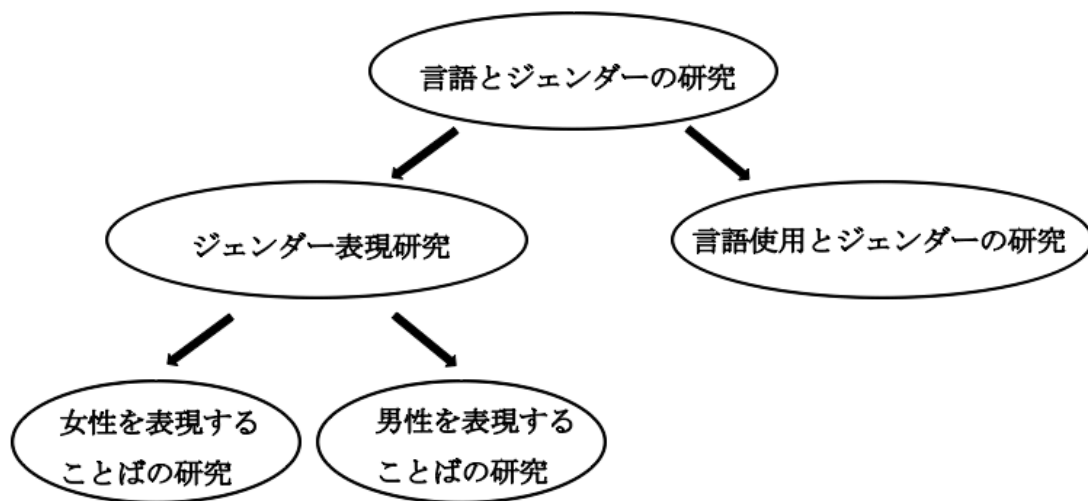


図 2-1 言語とジェンダーの研究のアプローチ

2.2.1.1 文末表現

これまで文末表現（終助詞）、人称詞、敬語を含む、さまざまな言語要素における性差について多くの実証的研究が行われている。

まず、文末形式に焦点を当てた研究として、小川 (1997、2006)、尾崎 (1997)、遠藤 (2002)、水本 (2006)、増田 (2016) などが挙げられる。これらの研究はいずれも、文末表現における性差が縮小傾向にあることを報告している。

小川 (1997) は、日本語の終助詞におけるジェンダー差に焦点を当て、男性と女性の話し方に現れる違いを調査した。その結果、女性がよく使うのは「のよ、の（疑問文以外）」で

あり、男性は「よな、ぜ、ぞ、な」を多用し、男女共通でよく使用されるのは「よ、の（疑問文）」だと報告している。

小川（2006）では、辞書記述において男女差があるとされる終助詞が実際の生活でどのように使われているかを、首都圏の大学生 129 人を対象に調査した。その結果、辞書で女性がよく使うと記述されている「わ、かしら、てよ、て、こと」が、20 歳前後の大学生にはほとんど使用されていないことが分かった。

尾崎（1997）は、職場での女性の文末表現の使用実態を調査した。この研究では、終助詞「わ」は男性による使用が皆無で、女性でも使用率が低く、減少傾向にあると述べている。また、助動詞「だ」の不使用は、女性の間ではまだ普通に見られるが、30 代以下の世代では減少傾向にあると指摘している。助動詞「だ」＋終助詞「わ」の組み合わせは男女ともほぼ使われていないことから、文末表現全体が脱性差化していると結論付けた。

遠藤（2002）では、職場での男性の文末表現の使用実態を調査した。その結果、男性は女性よりも敬体を多用する傾向があると述べている。また、女性専用とされていた「あら（感動詞）」、「のよ」、「わ」が男性によっても使用されている一方で、男性専用とされていた「な」「かな」は女性にも使われていると報告している。また、「ぞ」、「ぜ」など従来は男性専用と言われた語の使用が減ってきていることも観察される。これにより、文末表現における性差が縮小しつつあることが示されました。

水本（2006）は、20 代から 30 代の女性の言葉とテレビドラマの中での女性の言葉を比較し、現実の女性が「女性文末詞」をほとんど使用しない一方で、テレビドラマでは頻繁に使用されていると報告した。脚本家の年代よりも、性別に根ざしたジェンダー・フィルターが影響している可能性を指摘している。

増田（2016）は、尾崎（1997）の研究を踏まえ、20 年後の女性の文末表現の変化を考察した。その結果、女性専用とされる文末表現は依然として使われているが、若年層を中心にその使用が衰退しており、尾崎（1997）が指摘した傾向がさらに進んでいると述べている。

これらの研究から、日本語の文末表現における性差は全体的に縮小していることが明らかである。

2.2.1.2 人称詞

本節では人称詞に関する先行研究を概観する。鈴木（1982：19）によると、「発話の中で話者が自分自身を指示したり、自分自身に言及するために用いる語を『自称詞』、話者が発

話に際して、発話の相手を指示したり、あるいは言及したりする語を『対称詞』と定義している。

まず、男女間での自称詞の使用に関する研究を紹介する。

小林(1999)は、自然談話データを用いて職場での「自称代名詞」「対称代名詞」が男女それぞれでどう使われているかを調査した。その結果、女性では「ワタシ」、「アタシ」が広く使われ、上下関係などに拘らない使い分けも見られる。男性では「オレ」、「ボク」、「ワタシ」が使われ、フォーマルとインフォーマルで使い分けがなされる。特に「ワタシ」は、女性よりも男性でフォーマルな意識が強く、男女で自称詞の使い方に顕著な違いがあると指摘した。

桜井(2002)は、デザイン事務所、美容院、研究機関などの職場で男性の自称詞「おれ」と「ぼく」の使用実態を分析した。その結果、職種によって「私」や「俺」は使われず、「僕」が多用されるケースが報告された。一方で、デザイン事務所やミュージシャンの職場では「俺」がよく使われ、研究機関では「俺」の使用が全く見られなかったことが報告されている。

大和田(2010)は、大学生に対するアンケートと面接調査を通じて、自称詞の使用実態を考察した。その結果、男性は「オレ単一使用型」、「オレ・ジブン併用型」、「オレ多用型」と「ボク多用型」、女性は「ワタシ単一使用型」、「アタシ単一使用型」、「ワタシ・アタシ併用型」と「ウチ使用型」の4パターンに分けられる。すなわち、男性は「オレ」「ボク」「ジブン」、女性は「ワタシ」「アタシ」「ウチ」を多用する傾向が確認された。

渡邊(2016)は、1955年から2005年の小説における女性の会話スタイルを分析し、自称詞として「ワタシ」、「アタシ」のみが使用されており、「オレ」など男性専用とされる語の使用が見られないと報告している。

小林(2016)は自然談話をデータとし、日常会話における男女の自称詞の使用実態を考察した。女性では「わたし」「あたし」、男性では「おれ」「ぼく」「わたし」が主に使われる。また、「うち」、「自分」、「こっち」は使用例が少ないが、男女ともに見られるものである。しかし、「名前」、「親族呼称」、「愛称」などを自称詞として使うのは女性に多く、男性では少ないと述べている。

次に、対称詞に関する先行研究を述べる。主要な研究として、金丸(1997)、小林(1999)、黒須(2008)などが挙げられる。

金丸(1997)では、「学校における呼称」と「夫婦間における呼称」についてアンケート調査を行った。「学校における呼称」では、女子生徒や女性教師が男子生徒を「クン」付け

で呼ぶことや、「姓や名の呼び捨て」が一般化しつつあることが確認された。一方、「夫婦間における呼称」では、夫を「お父さん」、妻を「お母さん」と呼ぶのが最も多いとされ、妻は夫に対して「さん」や「あなた」といった丁寧な代名詞を使う傾向があるのに対し、夫は妻に対して呼び捨てやぞんざいな応答詞（「おい」）を用いる傾向が指摘されている。

小林（1999）は、職場における男女の自称詞と対称詞の使用について調査し、女性の対称詞に「姓の呼び捨て」が見られることや、女性の方が男性より自由にインフォーマルな表現を選ぶ傾向があると報告している。

黒須（2008）は、1946年から2005年の小説60作品の会話文を資料として、文末詞、自称詞・対称詞、感動詞の男女差を調査した。対称詞に関しては、「あなた」が女性的対称詞である一方、「姓のみ」、「きみ」、「おまえ」は男性的対称詞であることを指摘している。男女共に現代に近づくにつれて対称詞がより砕けたものになっていると述べている。

これらの先行研究では、対称詞の選択において以下のような性差があることが明らかにされた。自称詞について、男性は「オレ」、「ボク」、「ジブン」、女性は「ワタシ」、「アタシ」、「ウチ」を多用する傾向がある。対称詞について、女性は男性に「クン」や敬称を使い、男性は女性に呼び捨てやぞんざいな表現を用いる傾向が見られる。また、男女ともに対称詞がインフォーマルな方向に変化してきていることが確認された。

2.2.1.3 敬語（丁寧さ）

本節では、敬語（丁寧さ）と性差に関する先行研究を概観する。特に、井出（1982、1997）、小林（1993）、中村（2010）の研究はこの分野で代表的なものである。

井出（1982）は「男は逸脱、女は正統を尊重」という視点から、男性は規範に囚われず、非標準的な表現や俗語、卑語、きたない感嘆詞を多用する傾向があると述べている。一方、女性は標準形を多く使い、上品で格式のある敬語を使う傾向があると報告している。

女性が男性より丁寧な言語表現を使用する理由について、井出（1997）は、地位の差ではなく役割の差によるものだと述べている。つまり主婦という役割を担う多くの女性は仕事のための効率より、付き合いをうまく行うためのやりとりを重んじることが多いので、より丁寧な言語表現を使用している。一方、男性は通常仕事場の人間関係のやりとりが多いので、効率よい話し方が有効な場に身を置くことが多い。そこには、社交の場におけるような高度の丁寧さを持つ言語表現は使われない。

小林 (1993) は、若い男女の敬語使用における変化を、先行研究の指摘を踏まえて分析した。調査は 3 世代・4 世代家族の女性を対象に行われ、20 代の娘たちは公式な場で「します」「いたします」を使用することが多いと回答したが、50 歳から 80 歳の母親や祖母は「さしあげます」「させていただきます」などのより複雑な敬語を使用することが確認された。加えて、高校生を対象としたアンケート調査からは、男女ともに動詞の尊敬語の使用頻度が低いことが明らかになった。特に女性の間で敬語使用への抵抗感が見られ、敬語の「中性化」とその受け入れが進んでいることが示された。

中村 (2010) は、男性が状況や相手、心理状態に応じてさまざまな丁寧度の日本語を自由に使い分けるのに対し、女性は丁寧度の低い表現が許されず、言語使用の選択肢が限定されていると指摘している。

以上みてきた先行研究の調査結果に共通するのは「女性のほうが男性よりも丁寧である」という傾向がみられるものの、この違いは徐々に少なくなっているということである。

2.2.2 男女のコミュニケーションスタイルの研究

男女間のコミュニケーションスタイルの差異に関する研究は、言語使用の性差を明らかにする上で重要な役割を果たしている。1990 年代以降、このテーマは言語学や社会学の研究に統合され、多角的な視点からの分析が進められている。本節では、いくつか代表的な研究の例を挙げる。

Lakoff (1975) は、女性が一般に礼儀正しさや控えめな主張を用いる傾向があると指摘している。これは社会的期待やステレオタイプに基づき、女性が持つべきとされる「優しさ」や「謙虚さ」を反映している。

McConnell-Ginet (1989) によると、男女のコミュニケーションスタイルには明確な違いがあり、男性は自分が導入したトピックに他者の注意を引きつけ、自らの視点や知識を強調し、他者の発言を遮ることで会話の流れをコントロールしようとする傾向がある。女性は聞き手として相手のトピックに適応し、相槌やフィードバックを通して共感や同意を示しながら会話を支援する傾向がある。

Tannen (1990) は、男女間のコミュニケーションスタイルの差が「異文化」として機能していると指摘した。男性は対話を競争の場と捉え、地位の確立を試みるのに対し、女性は協力の場として利用し、相互理解を深める手段としている。

日本における男女間のコミュニケーションスタイルの研究としては、江原ら（1984）や内田（1997）が挙げられる。

江原ら（1984）は、日本人学生男女の会話を観察した。男性は女性とは異なる「質問—応答連鎖」の技能を駆使してより円滑に自己の発話権を誘導し、女性の発言に関心がなければ意識的に「沈黙」し、女性の発話中止の要請をするし、「割り込み」によって発話権を奪ってしまうことも多いという。男性は女性に対して多く割り込みをして、女性はそれに応じていつの間にか聞き手の役割を取らされてしまうということが追認されたと報告している。これを踏まえて、「形式的に男女が平等に話し合いに参加できたとしても、女性の意見が意志決定に反映されにくい構造になっている。しかも、そのことに気づくことすらないと指摘している。つまり、意識レベルでは男女平等な対話が行われていると思われる一方で、実際の行動では性役割に基づく差異が明確に現れているのである。

内田（1997）は、初対面の日本人大学生 40 名を対象に、会話のトピック、表現、行動の男女差と共通点を調査した。その結果、男性は順番取りのルールを破ることで会話権を掌握しようとする傾向が見られ、特に「割り込み」や「沈黙」を多用する。一方で女性は、会話中に相槌を多く打ち、聞き手の役割を担うことが多いと報告されている。

これらの研究から、「男は会話を支配し、女は協調する」（McConnell-Ginet 1989）というステレオタイプがコミュニケーションスタイルに深く根ざしていることが明らかになった。また、性差は単に言葉遣いだけでなく、会話の構造と進行にも影響を及ぼしていることが確認されている。

2.2.3 社会的性役割期待の研究

2.1 節の基本概念の定義を踏まえ、この節では社会的性役割期待に関する先行研究とそれぞれの知見を整理する。

本節では、2.1 節で定義した基本概念に基づき、社会的性役割期待に関する研究を概説する。Eagly & Wood (1999) の社会的役割理論 (Social Role Theory) のほかに、Bem (1981、1984) のジェンダー・スキーマ理論 (Gender Schema Theory) も代表的な研究である。

Bem (1981、1984) は、ジェンダー・スキーマ理論を提唱した。この理論において、社会が男女に異なる役割や期待を課し、それが子どもたちの性別に基づく認知フレーム（スキーマ）を形成すると述べている。また、このスキーマは、男性に力強さや独立性、競争心を、

女性に優しさや協調性、家庭的な役割を求める傾向を生み出し、これが子どもたちの自己概念や行動に影響を与えると論じられている。

日本において、男女に求められる特質を研究したものに、柏木(1967、1972)、伊藤(1978)、湯川ら(2008)がある。

柏木(1967)は、青年期の日本人を対象に、身体的、知的、性格的、社会経済的な34項目を用いて性役割に関する認知を調査した。この研究により、男性に求められる特性として「女性をリードする」、「指導力のある」、「経済力のある」、「意思強固な」、「背が高い」が、女性に求められる特性としては「気持ちが細やかな」、「かわいい」、「家庭的な」、「容貌が美しい」、「従順な」が挙げられた。

続く柏木(1972)の研究では、これらの調査結果を基に青年期の性役割認知の構造を再分析した。その結果、男性の役割は「知性」と「行動力」の二つの因子に、女性の役割は「美しさ」と「従順さ」の因子に集約されることが明らかになった。

伊藤(1978)は成人を対象に、性役割に関連する個人・社会・男性・女性の4つの次元で評価の違いを調査した。この研究で収集されたデータから、男性役割を示す「Masculinity」、女性役割を示す「Femininity」、そして両性に共通して望まれる特性を示す「Humanity」の3つの因子を抽出した。三者の関係を図2-2のように示している。この因子構造を図解し、性別に応じた役割期待の詳細な評価を「M・H・F scale」(表2-1)として整理した。分析結果から、社会的にも個人的にも男性役割が女性役割よりも高く評価されていることが明らかになった。また、男性に対する役割期待は社会的望ましさと一致するが、女性に対する役割期待は社会的望ましさと一致しないことも指摘している。

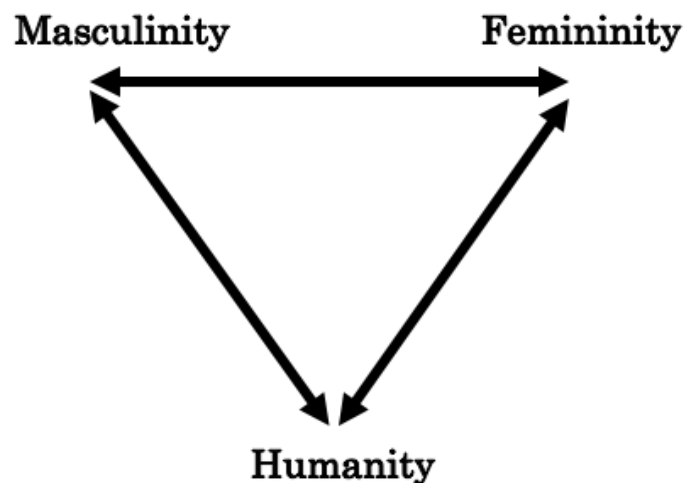


図2-2 Masculinity、Femininity、Humanity の関係(佐藤 1978: 2)

表 2-1 M-H-F scale (佐藤 1978: 2)

Masculinity	Humanity	Femininity
冒険心に富んだ	忍耐強い	かわいい
たくましい	心の広い	優雅な
大胆な	頭のよい	色気のある
指導力のある	明るい	献身的な
信念を持った	暖かい	愛嬌のある
頼りがいのある	誠実な	言葉遣いのていねいな
行動力のある	健康な	繊細な
自己主張のできる	率直な	従順な
意志の強い	自分の生き方のある	静かな
決断力のある	視野の広い	おしやれな

湯川ら（2008）の研究では、1970 年代から 1990 年代にかけての男性と女性の性格特性に関する形容詞を用いてジェンダー特性の変化を分析した。この研究により、1970 年代の男性にはオールマイティな特性が求められていたのに対し、1990 年代には特に「強さ」、「指導力」、「経済力」が重視されるように変化したことが示された。一方で女性に対しては、1970 年代に一般的だった「従順さ」、「依存性」、「弱さ」のイメージが減少し、代わって「美しさ」と「配慮」が現代の女性に求められる典型的な特性として認識されていることが確認された。

これらの研究を通じて、男性は「強さ、自己主張、指導力、行動力、決断力など」があるべきだという役割期待を受けている。一方、女性は「美しさ、優雅さ、配慮、従順さ、丁寧さなど」があるべきだという役割期待を受けていることが明らかになった。

次に、この社会的性役割期待が、より具体的な日常の生活の場である家庭、学校、そしてメディアにおいてどのように体現されるのかに着目した先行研究の主張について検討する。これにより、社会的性役割期待がどのように人々の認識や行動に影響を及ぼしているかの理解を深めることができるであろう。

2.2.3.1 家庭における性役割期待

子供は誕生以来、自分の属する文化が要求する行動様式、価値基準を学習しつつ成人に到る（若松・柏木 1989）。伊藤（1997）、佐々木（2012）、渡邊（2019）などの研究は、親の性役割に関する態度が子どもの性役割意識に与える影響を示している。

伊藤（1997）は高校生を対象に、親の伝統的な性役割期待が子どもの性別役割意識に与える影響を分析した。その結果、親の伝統的な性役割態度や期待を認知しているほど、子供たちの伝統的な性役割意識が高まり、特に、女子は男子に比べて家族環境の影響をより強く受けていることが明らかになった。

佐々木（2012）は、2000 年から 2010 年にかけて行われた日本版総合社会調査（JGSS）を用い、日本人の性別役割分業意識の変化を追跡した。近年の調査年ほど、より柔軟な性別役割分業意識をもつようになった傾向が見られるが、直近の 3 回の調査では、男女ともあまり大きな変化がなかったと述べている。

渡邊（2019）は男子大学生を対象に、親の性役割に関する期待がどのように男性役割態度に影響を与えるかを検討した。その結果、男子大学生は、父親からの伝統的な男性役割期待を感じる事が少なく、父母の新しい男性役割期待を強く感じていた。また、父母の属性（学歴と就労状況）が役割期待に与える影響も確認され、特に父親の働き方や生き方が、男子大学生に強い影響を与えていることが示された。

これらの研究は、家庭内での性役割期待が子どもたちの性役割認識と行動に深く関わっていることを示しており、性別に応じた社会的期待が如何にして次世代に伝えられ、形成されるかの理解を深めるものである。

2.2.3.2 学校における性役割期待

本節では、学校環境が学生の性役割意識に与える影響に焦点を当て、先行研究の主張を検討する。

教師の言動、校則、教科書など、教育現場のさまざまな要素が、伝統的な「男らしさ」と「女らしさ」を反映し、性別役割意識の形成と維持に影響を及ぼしている。なかでも、特に教科書における言語使用に性差が反映されているという問題は現在に至るまで多くの研究者によって繰り返し指摘されている（松元、2005；牛山、2005；橋本、2019；上森・栖原、2020 など）。

松元（2005）は、1959 年から 2002 年にかけての中学校国語教科書に描かれた男女像を調査し、教材に性別ステレオタイプが色濃く反映されていると指摘している。特に、固定観念に基づいた性格や能力の描写が顕著であると述べている。

牛山（2005）は、平成 16 年度使用の小学校国語科教科書に収採された物語や童話における登場人物の性別分布を調査した。その結果、文学教材の中で男性主要人物が多数を占める一方で、女性や性別が不鮮明なキャラクターの割合が少ないと指摘し、この不均衡が問題であると強調した。

橋本（2019）は「特別の教科 道徳」の教科書を分析し、性別役割分業の問題について考察した。この調査から、性別役割分業が根強く残り、性別を超えた職業選択などに関して子どもたちのロールモデルになるような教材は少ないということが明らかになった。

上森・栖原（2020）は、2018 年から導入された小学校の道徳教科書をジェンダーの観点から詳細に分析した。その結果、主人公の男女の数、写真・挿絵に描かれる男女の数などから、男性中心主義が見られること、また、呼称、衣服及びランドセルには男女二元論、両親の登場数、働く大人の数では性別役割分業を表象していることが明らかになった。

これらの研究は、学校教育が如何にして性別に基づく役割期待を形成し、維持しているかを示しており、教育現場における性別平等の重要性を浮き彫りにしている。

2.2.3.3 メディアにおける性役割期待

本節では、メディアにおける性役割期待とその子供への影響を検討する研究を紹介する。テレビ番組、絵本、新聞など、さまざまなメディア形式が性別役割をどのように形成し、維持しているかについて、武田（1999）、石倉（2021）、青木・大竹・小笠原（2022）が詳細に分析している。

武田（1999）は、月刊物語絵本『こどものとも』の創刊号から 504 号までをデータとして、ジェンダー表現の変遷を研究した。武田（1999）は、創刊時の圧倒的男性優位の描写が徐々に軽減していく過程を追跡し、メディアにおけるジェンダー表現の変化を示した。

石倉（2021）は、大学生を対象に、彼らがどのようにジェンダー規範を内面化しているかを調査した。調査結果から、学生たちは無意識のうちにジェンダーに基づいた行動規範や価値観を受け入れていることが明らかになった。この現象は、児童期に形成されたジェンダーイメージが、大学生になっても無意識に社会文化・メディアの影響を通じて引き続き強化されていることを示している。また、自己の意識的な選択や批判的思考が存在するものの、日

常的な行動は依然としてこれらの主流のジェンダー規範に影響されていることが確認された。

青木ら（2022）の研究では、テレビの登場人物の性別バランスがどのように偏っているかを分析した。この調査から、テレビ番組における若い女性と中高年の男性の出現頻度が高いことが明らかになった。具体的には、テレビ番組全体で女性の割合は 40%未満、ニュース番組では 30%未満であり、男性の出演者が女性のほぼ 3 倍に達している。特にニュース番組での職業や肩書きに関して、医師として出演した者の性別における比率は男性が 60 人に対し女性が 1 人のみであり、政治や科学・医療、スポーツの分野では男性が女性の 3 倍以上の出演比率を示している。この結果から、メディアにおける性別の表象に顕著な偏りが存在することが確認された。

これらの研究は、メディアが子供たちのジェンダー認識と行動に強い影響を与えており、性別に基づく役割期待を形成し維持していることを示している。

2.3 まとめ

第 2 章では、言語とジェンダーの研究に必要な基本概念と、これまでの先行研究を概説した。これらの研究は多くの洞察を提供しているが、解決されていない課題も残されている。

多くの研究では書き言葉、例えば作文や小説、テレビドラマの台詞などを分析の主対象としているが、これにより自然会話での言語使用と性差の実態を完全には捉えきれていない可能性がある。終助詞や人称詞などの形式的な側面が研究の焦点となる一方で、フィラーやぼかし表現のような、自然会話における重要な要素に対する注目がまだ十分ではない。

また、過去の多くの研究が 1990 年代や 2000 年代のデータを基にしているため、テクノロジーやソーシャルメディアの普及がもたらす最新のコミュニケーションスタイルの変化が十分に考慮されていないことが考えられる。

さらに、最近の社会言語学的視点では、会話は単なる言語行為の集合体ではなく、参加者間の心理的・社会的相互作用の場として理解されるべきであるとされる。しかしながら、多くの先行研究が話し手の社会的背景や心理状態に焦点を当てており、聞き手が会話に与える影響を十分に考慮していないのが実情である。

これらの問題に対処するため、本研究では自然会話におけるフィラー、応答詞、接続詞、ぼかし表現といった言語現象を取り上げ、現代の若者のコミュニケーションにおける性差を調査する。会話の性差が社会的性役割期待や文化的要因にどのように影響されているかを明

らかにすることで、先行研究の視野を広げ、若者のコミュニケーションの新しい実態を解明することを目指す。

以上の概念と先行研究を踏まえ、次章では具体的な調査データと研究方法について詳述する。

第3章 調査データと研究方法

本章では、本研究で使用する調査データの概要および研究方法を述べる。

3.1 分析対象とするデータ

本研究は、現代若者の自然会話を通じて、フィラー、応答詞、接続詞、ぼかし表現などの微細な言語現象に見られる性差を明らかにすることを目指している。ここで言う「自然会話」とは「日常生活で実際に行われているやりとり」であり、つまり話題が規定されていないものを指す。また、分析の精度を高めるために、性別以外の要因をコントロールし、会話参加者間の関係を「同等」、面識の度合いを「既知（友人）」に限定する。さらに、聞き手の性別の影響を検証するため、「男性同士ペアの会話」と「女性同士ペアの会話」の他に、「男女ペアの会話」も比較対象とする。

これらの条件を満たすデータソースとして『BTSJ 日本語自然会話コーパス』を選定した。このコーパスは、言語社会心理学や総合的会話分析のアプローチを基に、会話の自然性と参加者の社会的属性を厳密に管理しつつ収集されたデータを含んでいる¹。特に以下の3つの特徴が本研究の目的に適合している。

(1) 「言語社会心理学的アプローチ」（宇佐美、1999）、「総合的会話分析」（宇佐美、2008）の方法論に基づき、会話参加者の年齢、性別などの社会的属性、および、話者同士の関係等が統制されたデータ群を収録する。

(2) 「発話の重なり」や「沈黙」など、他のコーパスにはほとんど付与されていない語用論的分析に不可欠な情報を付与した『基本的な文字化の原則（BTSJ: Basic

¹ 詳細は BTSJ コーパスのホームページ<<https://ninjal-usamilab.info>>を参照のこと。

Transcription System for Japanese) 2019 年改訂版』(宇佐美、2019)によって文字化したトランスクリプトを収録する。

(3) 「総合的会話分析」では、「会話自体」の分析だけではなく、「録音された会話以外の社会的要因」の分析も重視する。そのため、各会話グループのデータ収集条件や話者同士の関係、話者の年齢・性別・職業、その他の社会的属性の情報も、「本コーパスに収録されている会話データの情報一覧」(excel ファイル)の形で提供する。

- (「『BTS 日本語自然会話コーパス』について」https://isplad.jp/btsj_corpus/)

このコーパスの使用により、会話データの条件を厳密に統制することが可能となり、研究者は目的に応じた詳細な分析を行うことができる。それによって、本研究の調査目的に最適なデータセットを使用している。各章で使われる具体的なデータの種別を表 3-1 に示す。このような方針で収集されたデータを収録するコーパスを用いることで、研究の精度と信頼性を高め、ジェンダーに関する微細な言語的差異を正確に把握することが可能となる。

表 3-1 各章で使われる具体的なデータの種別

章	コーパス	選定基準	会話数
第 4 章	『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声) 2020 年版』	話者の社会的属性が「大学(院)生」、話者同士の関係が「同等」、会話のジャンルが「雑談」、話者同士の面識の度合いが「既知(友人)」、会話者の性別の組み合わせが「男性同士ペア」、「女性同士ペア」、「男女ペア」という条件である。	男性同士ペア : 20 女性同士ペア : 38 男女ペア : 12 男性 : 52 人、女性 : 88 人
第 5 章	『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声) 2022 年 3 月 NCRB 連動版』		男性同士ペア : 18
第 6 章			女性同士ペア : 23
第 7 章			男女ペア : 22
第 8 章			男性 : 58 人、女性 : 68 人

この二つのコーパスは、研究期間中に更新が行われたため、異なるバージョンを採用しているが、本研究では会話参加者間の関係(「同等」)および面識の度合い(「既知」)が同じデータを一貫して調査対象としており、その点で研究の整合性を保持している。これによ

り、自然会話の実態をより深く理解し、言語とジェンダーの関連についての詳細な知見を提供することが期待される。

3.2 基本的な文字化の原則

本節では『BTSJ 日本語自然会話コーパス』における基本的な文字化の原則について説明する。ここでは、第4章以降の各章に出現する発話文の認定方法や表記法について、『基本的な文字化の原則（BTSJ）2019年版』をもとに簡潔に解説する。

3.2.1 発話文の認定

BTSJ では、実際の会話の中で発話された文という意味で「発話文」という用語を用い、基本的な分析の単位とする。「発話文」の定義について、「基本的な文字化の原則（BTSJ）2019年版」²は以下のように述べている。

「発話文」の定義は、会話という相互作用の中における「文」とする。基本的に、ひとりの話者による「文」を成していると捉えられるものを「1 発話文」とする。しかし自然会話では、いわゆる「1 語文」や、述部が省略されているもの、最後まで言い切られない「中途終了型発話」など、構造的に「文」が完結していない発話もある。そのような場合は、話者交替や間などを考慮した上で「1 発話文」であるか否かを判断する。

（『基本的な文字化の原則（BTSJ）2019年版』：2）

続いて、『基本的な文字化の原則（BTSJ）2019年版』から取られた具体的な例を挙げながら、説明していく。各例において、見出しの説明が指す発話文を下線で示す。話者のアルファベットは「A」、「B」で示す。具体的な記号の説明は、3.2.2 節の表 3-2 を参照されたい。

例 3-1：1 語の発話文

A あのー、わたしんとき、あのちょうど丙午‘ひのえうま’の世代なんですよ。

² 詳細情報については、「BTSJ 日本語自然会話コーパス」の公式ホームページに掲載されているドキュメント<<https://isplad.jp/lab/wp-content/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf>>を参照してください。

B 丙午‘ひのえうま’?。

A ええ。

B 丙午‘ひのえうま’って、結構 20、20、あ 30 ぐらいの方でしたっけ。

例 3-2：文末が省略された形で言い切られた発話文

A えっ、タイはどうしてそういうふうに。

B あのね、もともと日本語学科の卒業生なんですよ、（あっ）私。

A え、こちらの学校?。

B ええ、[大学名称]なんですけど、でー、もう社会人を何年かしてるんですけど。

例 3-3：話者が自分で発話の最後まで言い切らず言い淀んだ発話文

A あの一なんも面白いことがない（<笑い>）っていう…。

B どのあた、どのあたりですか?。

**例 3-4：第 1 話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第 2 話者の発話が
始まり、結果的に第 1 話者の発話が終了した発話文**

A 彼女…今度ね、紹介してもらうんだよね。

B あ、まじで、何人目?、紹介してもらうの。

A 高校入ってから（<笑い>）3 人目ほど。

B <笑い>いい人は見つからない?。

A 見つからないね低い声で]。

B おれねー、中学んとき、<恋の>{<}【【。

A 】】<早く>{<}付き合いたいねー。

B あ、まじで。

例 3-5：前後に間があり、1 発話文と見なされるあいづちや笑い

A まー、まー自分自身がもう、学校でたら、ねー、こういう学問の世界とは（<笑い>）
<笑いながら>ちょっと関係ない身分にあります（えーえー）ので、実用の世界にいる
関係もありまして（あー）、なんかそういう研究をされ続けてるというのは。

B ははは<笑い>。

B 研究してるのかな<笑い>という、ちょっとなんかのほほ一んとやっておりますが。

A いえいえいえ。

（「基本的な文字化の原則（BTSJ）2019年版」：2-3）

3.2.2 表記方法と記号

この節では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』における表記方法の原則と記号について説明する。

まず、『BTSJ』の表記は、読者の理解を助けるために、通常の漢字仮名交じり文を基本としている。発話の音声情報を正確に反映させるため、複数の読み方が可能な語（例：「なんか」、「なにか」）、特に発音が強調されている語（例：「おっきな」、「ぜーんぜん」）、また音が省略されたり通常の発音と異なる語（例：「せんせ（先生）」、「ふいぎ（雰囲気）」）は、平仮名で表記する。これにより、聞き手が正確な発音を理解できるようにする。

また、複数の読み方がある語や、漢字で表記した方が視覚的に理解しやすい語は、漢字表記の後に読み方を平仮名で「^レ」に入れて示す。また、固有名詞や漢字の読み方を説明する場合など、視覚的に区別が必要な情報は『^レ』で示す。

数字については、数量や順序を表す場合に算用数字を、概数や漢字熟語の構成要素としては漢数字を使用する。読点「、」と句点「。」は、通常の文法規則に従い、発話の構造に基づいて適切に配置する。倒置疑問文には「?、」の形式を用いることで、文の区切りを明確にする。

『BTSJ 日本語自然会話コーパス』で用いられる記号を以下にまとめられる（表 3-2）。表 3-2 は、『基本的な文字化の原則（BTSJ）2019 年版』を基にして、一部調整および要約を行ったものである。

表 3-2 BTSJ コーパスにおける記号

。	1 発話文の終わりにつける。
„	発話文の途中で相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。
、	1、日本語表記の慣例に従って読点をつける。2、慣例として表記する以外に、語句の途中、語句と語句のあいだに短い間があった場合にも「、」をつけて、語句の発音がスムーズでなかったことを記す。

‘ ’	1、複数読み方があるものを漢字で表す場合、最も一般的な読み方ではなく、特別な読み方で発せられたことを示すために、その読み方を平仮名で「 ’ 」に入れて示す。2、通常とは異なる発音がなされた場合など、音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は、「 ’ 」の中に正式な表記をする。
『 』	視覚上、区別した方がわかりやすいと思われるもの、例えば、本や映画の題名のような固有名詞や、発話者がその発話の中で漢字の読み方を説明したような部分等は、『 』でくくる。
“ ”	発話中に、話者及び話者以外の者の発話、思考、判断、知覚などの内容が引用された場合、その部分を“ ”でくくる。
？	疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式になっていなくても、語尾を上げるなどして、疑問の機能を持つ発話には、その部分が文末（発話文末）なら「?。」をつける。倒置疑問の機能を持つものには、発話中に「?。」をつける。
??	確認などのために語尾を上げる、いわゆる「半疑問文」につける
[↑][→][↓]	イントネーションは、特記する必要があるものを、上昇、平板、下降の略号として、[↑][→][↓]を用いて表す。
《少し間》	話のテンポの流れの中で、少し「間」が感じられた際につける。
《沈黙数》	1 秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を左記のように記す。
= =	改行される発話と発話の間（ま）が、当該の会話の平均的な間（ま）の長さより相対的に短いか、まったくないことを示すためにつける。
…	文中、文末に関係なく、音声的に言いよんだように聞こえるものにつける。
< > { < }	同時発話されたものは、重なった部分双方を< >でくくり、重ねられた発話には、< >の後に、{ < }をつけ、そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ 2 つ「,,」をつける。また重ねた方の発話には、< >の後に、{ > }をつける
【 【 】 】	第 1 話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第 2 話者の発話が始まり、結果的に第 1 話者の発話が終了した場合は、【 【 】 】をつける。
[]	文脈情報。
()	短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、()にくくって入れる。
< >	笑いながら発話したものや笑い等は、< >の中に、<笑いながら>、<2 人で笑い>などのように説明を記す。
(< >)	相手の発話の途中で、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、(<笑い>)とする。
#	聞き取り不能であった部分につける。

「 」	トランスクリプトを公開する際、固有名詞等、被験者のプライバシーの保護のために明記できない単語を表すときに用いる。
-----	--

3.3 研究方法

本節では、使用した研究方法を説明する。本研究では、量的分析と質的分析の両方を採用している。量的分析では、まず各変数の平均値³を算出し、その後、負の二項回帰分析⁴を用いてデータの統計的解析を行う。この手法は、分析対象の出現回数などのカウントデータに適している。一方、質的分析では、特定の言語表現を含む代表的な発話例を抽出し、参加者の性別や言語表現が会話中に果たす機能、コミュニケーションスタイル、社会的性役割期待などの要素を総合的に考慮しながら詳細な分析を行う。各章で採用される具体的な分析手法は、それぞれの章で詳細に説明される。

第4章 フィラーにおける性差の実態

第3章では、具体的な調査データ収集と研究方法の詳細を述べ、分析の基盤を確立した。本章では、フィラーの使用における性別間の差異に注目し、それがコミュニケーションスタイルにどのように反映されているかを詳細に分析する。この分析を通じて、言語使用における微妙な性差が社会的な性役割期待にどのように影響されるかを明らかにすることを目指す。4.1 節では、研究の目的と重要性を概説する。4.2 節ではフィラーと性差の関係を扱った先行研究を概観し、これまで明らかになっていることや問題点を確認する。4.3 節では、先行研究の問題点を解決するため、性差とフィラーの関係を明らかにする新たな調査を紹介する。4.4 節では調査結果の要因について考察を行う。最後の4.5 節はまとめである。

4.1 はじめに

³ 発話者ごとに分析対象の総数を発話文数で割り、群ごとに平均値を取れば、男性と女性それぞれの分析対象の平均使用回数（1 発話文あたり）がわかる。本章における「平均値」は全て同じ方法で割り出されたものである。

⁴ 分析対象の出現回数というカウントデータに対して、基本的な分析モデルはポアソン回帰モデルである。本研究における調査は全て先にポアソン回帰分析を用いて計算したが、過分散問題（分散が平均よりも大きな値をとる）が生じた。ポアソン回帰モデルの適用には、平均と分散が一致しなければならないという制約がある。そのため、最終的に、過分散問題に対処できる負の二項回帰分析を用いることとした。

性差とフィラーの関係を論述した先行研究において、フィラーの使用には男女差があることが明らかになっているが（渡辺・外山、2017）、どのような男女差があるのかについては統一的理解がない。また、多くの研究は話し手の性別に注目し、フィラーとの関連を検討しているが、聞き手の性別が話し手のフィラーの使用に影響を与えるかどうかについては、まだ解明されていない。

そこで、本章は『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2020 年版』（以下、BTSJ コーパスと呼ぶ）の中の会話を利用し、フィラーと性差の関係を明らかにする。そして、これらの男女差が生じる要因について考察する。

4.2 先行研究

本節では、性差とフィラーの関係を検討した先行研究を概観し、これまでに明らかになっていることを確認したうえで、未解決の問題を指摘し、本章の目的を述べる。

れいのるず秋葉（2001）は、一対一の自然会話におけるフィラーと性差との関連を論じた。「なんか」、「ま」、「あの一」、「やっぱり」の四種類の語彙フィラー⁵の全体を見ると、女性は男性より多くフィラーを使っており、さらに、女性は「なんか」と「あの一」をよく使う傾向、男性は「ま」と「やっぱり」を多く使う傾向があるという。

渡辺・外山（2017）では、『英語話し言葉コーパス（COPE）』と『日本語話し言葉コーパス（CSJ）』の中の模擬講演データを使用し、英語と日本語のフィラー全体の使用頻度を比較した。その結果、フィラーの語あたりの頻度を男女別に比較すると、英語では男女間で有意差がなかったのに対し、日本語では、男性の方が有意に高いということが明らかになった。

両研究において、フィラーの使用には男女差があることが指摘されたものの、調査方法が異なっているために、どのような男女差があるかに対する両研究の結論の差異については、不明な点も多い。また、渡辺・外山（2017）の研究は模擬講演（独話）におけるフィラーの分布を示したが、日常会話中のフィラーの使用の特徴に対する考察は課題として残されている。れいのるず秋葉（2001）の研究は自然会話を分析対象としたが、使用されたデータは30年以上前のものである。本研究では、比較的新しい資料に基づいて、現代の若者の自然

⁵ れいのるず秋葉（2001）は、「あの一、なんか」などのある程度語彙的な意味を持っているものを「語彙フィラー」、「えー、ー」などの意味のない音で空白を埋めているものを「音韻フィラー」と呼んでいる。

会話におけるフィラーの使用実態を調査する必要があると考える。そこで、本章では、条件を統一して調査を行い、4.3 節において、フィラー全体および各種類のフィラーにおける男女差を再検討する。

また、両研究はともに話し手の性別に注目し、男女それぞれのフィラーの使用の特徴を検討したものである。話し手の性別はもちろんのこと、それ以外に聞き手の性別も話し手のフィラーの使用に関与していると考えられる。この点について、聞き手の性別も考慮する必要があるだろう。

以上を踏まえ、本章では、『BTSJ コーパス』の自然会話を利用し、年齢や上下関係などの条件を統一したうえで、男性同士ペア、女性同士ペア、男女ペアの具体的な自然会話状況でのフィラーの使用実態と特徴を明らかにし、話し手と聞き手の性別がフィラーの使用にどのような影響を与えるかについて検討する。最後に、得られた男女差について要因の分析を行う。

4.3 調査概要

4.3.1 調査目的

本調査では、現代の若者を対象とし、以下の三つの課題を明らかにする。

- (1) 男女ではどちらがフィラーを多く使うか
- (2) それぞれの性別でよく使用するフィラーの種類は何か
- (3) 聞き手が同性・異性の場合に話し手（男性／女性）のフィラーの使用にどのような変化があるか

4.3.2 調査データ

『BTSJ コーパス』において、話者の社会的属性が「大学（院）生」、話者同士の関係が「同等」、会話のジャンルが「雑談」、話者同士の面識の度合いが「既知（友人）」、会話者の性別の組み合わせが「男性同士ペア」、「女性同士ペア」、「男女ペア」という条件で検索した結果、70 会話を抽出することができた。男性同士ペアは 20 会話、女性同士ペアは 38 会話、男女ペアは 12 会話である。男女別に人数でみると、男性は 52 人、女性は 88 人、全体として 140 人の会話データである。

4.3.3 調査対象

山根（2002：49）はフィラーを「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にない、発話の一部分を埋める音声現象」と定義づける。本研究では、山根（2002）の定義と分類に従って、70 会話に現れたフィラーの種類を表 4-1 のようにまとめた。本章の調査では、調査対象 140 人が使用したフィラーの回数を話者ごとに、種類別に分けて記録した。

表 4-1 フィラーの種類とそこに含まれる書字形

種類	含まれる書字形
ア類	ア、アー
エ類	エ、エー
コノ類	コノ、コノー
ソノ類	ソノ、ソノー
アノ類	アノ、アノー
マー類	マ、マー
ナンカ類	ナンカ
モー類	モ、モー
コー類	コ、コー
ソー類	ソ、ソー
エット類	エツと
ン類	ン、シー、シートネ、ウーン、ウーント

4.3.4 調査結果と分析

4.3.4.1 男女どちらがフィラーを多く使うか

本節では、調査目的（1）について結果を分析する。まず、男性と女性それぞれのフィラーの平均使用回数を計算した。その結果、男性（0.28）のほうが女性（0.19）よりフィラーの平均使用回数が多いことが分かった。次に、性別と話し手のフィラーの使用回数の関連を明らかにするために、本調査は負の二項回帰分析を行った。なお、本研究の分析には全て SPSSAU⁶を使用した。

話者ごとの発話文数をオフセット項、話者ごとのフィラーの使用回数を従属変数とし、性別⁷を独立変数とした。表 4-2 は負の二項回帰分析の結果を示す。

⁶ SPSSAU は統計解析のオンラインソフトウェアである。詳細は<<https://www.spssau.com>>を参照のこと。

⁷ 性別はカテゴリカルデータであり、ダミー変数に変える必要がある。本研究では女性を 0、男性を 1 で置き換えた。

表 4-2 性別とフィラーの使用回数の関連を検証した負の二項回帰分析結果

	係数	標準誤差	P 値
切片	-1.64	0.11	0.00
性別	0.35	0.18	0.05
従属変数: 話者ごとのフィラーの使用回数 n=140 AIC : 1392.78			

表 4-2 を見ると、性別の係数⁸は正値 (0.35) で、有意である ($p < .05$)。女性と比較すると、男性のフィラーの平均使用回数が 1.42 倍 ($=\exp(0.35)$) ほど多い。この結果から、女性より男性のフィラーの使用回数が多いことが分かる。

4.3.4.2 それぞれの性別でよく使用するフィラーの種類は何か

まず、男女全体のフィラーの使用状況を考察する。表 4-3 には、使用されたフィラーの総数と各種類のフィラーの回数を男女別に示す。図 4-1 には、フィラー総数におけるナンカ類とマー類が占める割合を円グラフで示す。図 4-1 をみると、男女ともに、ナンカ類とマー類の使用数がフィラー全体の使用数の三分の二ほどを占めていることが分かる。れいのるず秋葉 (2001) によると、ナンカ類は女性的で、マー類は男性的である。本節では、ナンカ類とマー類の使用状況を、男女差に注目しながら分析していく。

表 4-3 男女別にみたフィラーの総数と各種類のフィラーの回数

	ア類	エ類	コノ類	ソノ類	アノ類	マー類	ナンカ類	モー類	コー類	ソー類	エツと類	ン類	総数
男性	93	35	15	182	318	577	1236	347	167	62	37	103	3172
女性	52	15	8	136	391	323	2478	231	246	42	61	77	4060

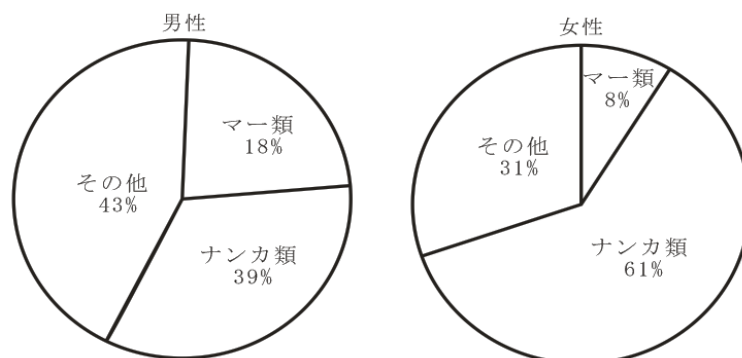


図 4-1 男性・女性が使用したフィラー全体におけるナンカ類とマー類が占める割合

⁸ この「性別」変数は、性別における女性に対する男性の効果（正の係数であれば、男性のほうが多い）を表す。4.3.4.1 と 4.3.4.2 における性別変数はすべてこの方法で処理されたものである。

まず、ナンカ類について考察する。フィラー全体の平均使用回数と同様の方法で、男性と女性それぞれのナンカ類の平均使用回数を計算した。その結果、男性（0.11）に比べ、女性（0.12）の方がよりナンカ類の平均使用回数が多いことが分かった。

性別とナンカ類の使用回数の関連を明らかにするために、4.3.4.1 と同様の方法で、負の二項回帰分析を行った。話者ごとの発話文数をオフセット項、話者ごとのナンカ類の使用回数を従属変数とし、ダミー変数化された性別を独立変数とした。表 4-4 にはその結果を示す。

表 4-4 性別とナンカ類の使用回数の関連を検証した負の二項回帰分析結果

	係数	標準誤差	P 値
切片	-2.14	0.11	0.00
性別	-0.08	0.18	0.66
従属変数: 話者ごとの「ナンカ類」の使用回数 n=140 AIC : 1209.73			

表 4-4 を見ると、性別の係数は負値（-0.08）だが、有意ではない（ $p > .05$ ）。表 4-4 の結果からは、現代の若者において、男性と女性のナンカ類の平均使用回数に差がないことが分かる。

次に、マー類の使用状況を考察する。ナンカ類の平均使用回数と同様の方法で、男性と女性それぞれのマー類の平均使用回数を計算した。その結果、男性（0.05）のほうが女性（0.02）よりマー類の平均使用回数が多いことが分かった。そして、性別とマー類の使用回数の関連を明らかにするために、負の二項回帰分析を行った。話者ごとの発話文数をオフセット項、話者ごとのマー類の使用回数を従属変数とし、ダミー変数化された性別を独立変数とした。表 4-5 にはその結果を示す。

表 4-5 性別とマー類の使用回数の関連を検証した負の二項回帰分析結果

	係数	標準誤差	P 値
切片	-4.13	0.12	0.00
性別	1.11	0.19	0.00
従属変数: 話者ごとの「マー類」の使用回数 n=140 AIC : 802.46			

表 4-5 を見ると、性別の係数は正値（1.11）で、有意である（ $p < .01$ ）。これは、女性に比べ、男性のマー類の平均使用回数が 3.03 倍（ $= \exp(1.11)$ ）ほど多いことを示す。このことから、女性より男性のマー類の平均使用回数が多いと言える。

以上の結果を総合すると、先行研究で女性的だと指摘されているナンカ類は、実際には男女差にかかわらず、ほぼ同じ頻度で用いられる。一方、マー類は女性に比べ男性によってより多く用いられると言える。

4.3.4.3 聞き手の性別が話し手のフィラーの使用に影響を与えるか

4.3.4.3.1 聞き手が同性・異性の場合の男性のフィラーの使用状況

この節では男性のフィラーの平均使用回数が聞き手の性別によって変化するかどうかにについて検討する。

まず、聞き手が同性の場合と聞き手が異性の場合それぞれについて、男性のフィラーの平均使用回数を計算した。その結果、聞き手が異性の場合（0.24）より、聞き手が同性の場合（0.29）における男性のフィラーの平均使用回数が多いことが分かった。

聞き手の性別と男性のフィラーの使用回数の関連を明らかにするために、負の二項回帰分析を行った。男性話者ごとの発話文数をオフセット項、男性話者ごとのフィラーの使用回数を従属変数とし、聞き手の性別⁹独立変数とした。表 4-6 にはその結果を示す。

表 4-6 聞き手の性別と男性のフィラーの使用回数の関連を検証した結果

	係数	標準誤差	P 値
切片	-1.25	0.16	0.00
聞き手の性別	-0.18	0.33	0.59
従属変数: 男性話者ごとのフィラーの使用回数 n= 52 AIC : 539.67			

表 4-6 を見ると、聞き手の性別の係数¹⁰は負値（-0.18）だが、有意ではない（ $p > .05$ ）。この結果からは、男性のフィラーの平均使用回数に聞き手の性別が関わらないことが分かる。

4.3.4.3.2 聞き手が同性・異性の場合の女性のフィラーの使用状況

この節では女性のフィラーの平均使用回数が聞き手の性別によって変化するかどうかにについて検討する。

⁹ 聞き手の性別はカテゴリカルデータであり、ダミー変数に変える必要がある。本研究では、聞き手の性別が同性である場合を 0、異性である場合を 1 で置き換えた。

¹⁰ この「聞き手の性別」変数は、「聞き手が同性」に対する「聞き手が異性」の効果(正の係数であれば、「聞き手が異性」のほうが多い)を表す。4.3.4.3 で出現した「聞き手の性別」変数はすべてこの方法で処理されたものである。

男性話者の場合と同様、まず、聞き手が同性の場合と聞き手が異性の場合それぞれについて、女性のフィラーの平均使用回数を計算した。その結果、聞き手が異性の場合（0.12）より、聞き手が同性の場合（0.21）における女性のフィラーの平均使用回数が多いことが分かった。

聞き手の性別と女性のフィラーの使用回数の関連を明らかにするために、負の二項回帰分析を行った。女性話者ごとの発話文数をオフセット項、女性話者ごとのフィラーの使用回数を従属変数とし、ダミー変数化された聞き手の性別を独立変数とした。表 4-7 には負の二項回帰分析の結果を示す。

表 4-7 聞き手の性別と女性のフィラーの使用回数の関連を検証した結果

	係数	標準誤差	P 値
切片	-1.58	0.12	0.00
聞き手の性別	-0.54	0.32	0.09
従属変数: 女性話者ごとのフィラーの使用回数 n= 88 AIC : 854.26			

表 4-7 を見ると、聞き手の性別の係数は負値（-0.54）だが、有意ではない（ $p>.05$ ）。この結果からは、女性のフィラーの平均使用回数に聞き手の性別が関わらないことが分かる。

4.3.4.3 における調査結果を総合すると、聞き手が同性である場合にも異性である場合にも、男性話者、女性話者におけるフィラーの使用回数には変化がみられないと言える。

4.4 男女差の要因についての考察

ここまで、現代の若者の自然会話におけるフィラーの使用特徴と性差の関係を明らかにしてきた。これを受けて本節では、先行研究に基づいて、日本の社会的性役割期待と会話におけるフィラーの役割の二つの観点から、フィラーの使用において男女差が生じる要因について考察し、『BTSJ コーパス』中の実際の発話例を典型例として例示する。

4.4.1 男性が女性より多くフィラーを使用する要因

四本（2021）によると、欧米の文化圏を中心に「女性がよくしゃべる」という言説が広く信じられているが、実際には、脳に関する医学的研究において、性差を裏づける特定の脳領域は存在しないと言われている。すなわち、発話数に性差があるというのは根拠のない誤情報である。

医学上の性差がみられないのであれば、なぜフィラーにおいて性差が見られるのか。その一つの要因として、現在の日本の社会に潜在的に組み込まれている性役割期待が考えられる。

四本（2021: 63）は「脳の機能や構造が、経験、学習、加齢などで柔軟に変わる。つまり、行動や思考が原因で、脳が結果であるという関係も成立する。そして、社会や教育は、行動や思考、脳の機能や構造に影響を与える」と指摘している。この社会や教育、行動や思考、脳の機能や構造という三つの要素の関係を考えるうえで、社会に存在する性差や暗黙のうちに伝えられる性役割期待が男性にも女性にも及ぼす影響は無視することができない。

三浦他（2019）によると、「男尊女卑」という言葉は死語になったかもしれないが、若年層においても、男性が主導的な役割を担い、女性が支える役割を担うといった性別役割分担意識はまだ根強く残っているという。この意識は家庭、学校、メディアを通じて、子供の時から潜在的に学ばれ、内面化される（牛山、2005；上森・栖原、2020；佐々木、2012；渡邊、2019；石川・山名、2021）。

このような研究から、子供が周囲からの性役割期待を認知し、その期待に沿った言動をとるようになることは自然なことだと考えられる。男性は「強さ、自己主張、指導力、行動力、決断力など」があるべきだという役割期待を受けている（伊藤、1978；湯川他、2008）。また、会話の中の「割り込み」と「前置き」が女性より多い（内田、1997）。加えて自分のことや自分が導入したトピックに相手の注意や会話の焦点をもっていく支配的な役割を好む傾向がある（McConnell-Ginet、1989）。一方、女性は「美しさ、優雅さ、配慮、従順さ、丁寧さなど」があるべきだという役割期待を受けている（伊藤、1978；湯川他、2008）。加えて会話においては、相手の話に補足したり、うなずいたり、会話の相手がトピックを導入しようとするのに応じたりする聞き手の役割を担う傾向がある（McConnell-Ginet、1989）。

すなわち、表面的には意識されていないかもしれないが、潜在的には会話において「男性が主導的な役割を担い、女性が支える役割を担う」という性役割期待の影響を受けているということである。男性が会話において主導的な役割を担うのであれば、自分に割り当てられたターンに主張や考えをはっきり述べるために、適切な表現を考える時間が必要である。また、発話権を獲得し、自分のターンを保つことなども必要である。山根（2002）によると、フィラーは間つなぎ、時間稼ぎなどの話し手の情報処理能力を表出する機能、境界指示、倒置、助詞の省略などのテキスト構成に関わる機能、心情の高まり、発話の和らげ、注意喚起、沈黙回避などの対人関係に関わる機能があるという。要するに、フィラーそのものは命題内

容がないが、談話進行の管理や対人関係の調整において大きな役割を果たしているのである。そのため、男性が発話する際にフィラーを数多く、種類豊富に使っているのだと考えられる。実際の発話例1を見る。

発話例 4-1: (男性 x 女性)¹¹

JMB013	いろんな人いる。
JF109	いろんなことできる人が多いよねー。
JMB013	でもねー、俺ね、最初ねー大学入ったときね、(うん) ①その、高校の友達にさ、(うん) “お前絶対そんなきもい奴としゃべんなよ” とかさ (<笑い>) 普通に言われてたからさ、(うん) すげーシャッター閉めてたの。
JF109	へー。
JMB013	だから (<笑い>)、だから (うん)、「人名 2」とかー (うん) と、あの辺と仲良くしとかないとー、(うん) ②こう、<笑いながら>ほっとくと③なんか変な人しかおらへん世界に行くんちゃうんとか思ってたんだけどー、(あー) 俺 3 年の時に④その、「人名 9」ゼミとかさー、(うん)「人名 10」ゼミとか入ってね、(うんうん) “あ、けっこうそういう真面目な人たちもおもしろいな” と思ったの。
JF109	めがね系面白い人多いよねー。
	(中略)
JMB013	⑤なんか、やっぱ見た目で判断したらいかんねんなっていうふうには思ったけど。
JF109	そうだねー、それ大事だね。

発話例 4-1 においては、JMB013 (男性) と JF109 (女性) が、学校では色んな人がいることについて話している。ここでは「その、こう、なんか」が複数回使用されている。岩田 (2014) によると、「その」は言い淀みと言葉探しの用法があるという。小出 (2010) によれば、「こう」は心的に思い浮かべられた対象が言語化しにくいことを示す機能があるという。「なんか」は「不確定さ」を表し (鈴木、2000)、「会話を和らげる」、「話題の獲得」、「つなぎ語」の機能がある (飯尾、2006) と言われる。

「その、こう、なんか」に関する先行研究の見解をもとに、発話例 4-1 におけるこれらの使用を、さらに具体的にみていく。JMB013 は積極的に発話権を取って、自分が大学に入っただけの頃のことを小出しにしながら、「①その」を用いて、時間を稼ぎ、当時の記憶を探す。人名 2 と仲良くしないと、自分はどのような世界へ落ちるのかという考えをどのように言葉で表すか分からない時に、「②こう」を用いて、心に思い浮かべられた対象が言語化

¹¹ 本研究における実際の発話例中に出現した記号については、具体的な記号の説明は、3.2.2 節の表 3-2 を参照する。

しにくいことを相手に示す。その後、話の内容に対する不確定さを表す「③なんか」を用いて、その後に提出した「変な人しかいない世界へ行ってしまう」という主張を和らげる。続いて、JMB013は3年生の頃のことを話す時、再び「④その」を用いて、人名の検索の時間を稼ぐ。JF109は「めがね系面白い人多いよねー」とまとめて、JMB013の話を補足する。その次に、JMB013は発話権を取って、「⑤なんか」を用いて、「やっぱ見た目で判断してはいけない」という主張を和らげる。

発話例 4-1 全体を見ると、JMB013（男性）はこの会話の主導者として、自分のことや主張を述べる際、「その、こう、なんか」を使って主張を和らげ、検索の時間を稼ぐ。JF109（女性）は相槌をしたり、相手の話を補足したりするなど積極的に聞き手としての役割を担う。

4.4.2 男女がよく使用するフィラーの種類が異なっている要因

4.4.2.1 女性より男性がマー類を頻繁に使う要因

ここでは会話におけるマー類の役割について検討する。

マー類¹²の基本的な機能についての代表的な研究としては川上（1993、1994）がある。川上（1993、1994）は、マー類の持つ基本的な機能を「概言」として、いろいろ問題はあるにしても、ここではひとまず大まかにひきくくって述べようとするという姿勢・態度にかかわると述べている。

こうした概言の機能に言及する研究としては、山田（2013）と落合（2018）もある。山田（2013）は心的処理過程の視点からマー類を二つのタイプに分けた。一つは大きく話題を更に広げていく「展開タイプ」、もう一つはまとめに入る・暫定的判断を示す「概括タイプ」であるという。落合（2018）は、LINE やブログに出現するマー類を分析し、マー類は話題をまとめる性質を持って、話を総括する際に出現すると指摘している。

また、マー類が評価、主張、判断などの表現の前にもよく出現すると指摘している研究もある。魏（2015）は、フィラーとしてのマー類は必ず何らかの文脈、背景を前提として、そこから一定の評価、主張、見解、判断、説明などを引き出すものであるという。

¹² 先行研究では、フィラーのマー類、ナンカ類に対する呼び方は異なっている。理解のために本稿ではすべてマー類、ナンカ類のように統一した。

上記の先行研究から、マー類の基本的な機能は概言であり、まとめるようなマーカ―として、評価、主張、判断などを引き出す前に使用されやすいことが言える。実際の発話例をいくつか見ていく。

発話例 4-2: (男性 x 男性)

JM066 <1 週間前>{>}に教えてくれればいいのに。

JM095 あー、けどなんか、①まー大体いいんだけどね。

JM095 かこ、なんかー、いつも TOEIC の過去問みたいのやってんの (あー)。

JM095 それ、の一、今までやったやつから出しますって言ってるからー、《少し間》②まー、ある意味答えは全部知ってるみたいな<もんだからさ>{<}。

発話例 4-2 においては、JM066 (男性) と JM095 (男性) が英語のテストについて話している。JM066 の「(英語のテストがあることを) 一週間前に教えてくれればいいのに」という文句に対して、JM095 は否定的な意見を小出しにしながら、「①まー」を用いて、主張や評価となる「大体いいんだけどね」を引き出す。そして、テスト内容について説明した後、「②まー」を用いて、「ある意味答えは全部知っているから、心配しなくてもいいのだ」のように自分の話をまとめる。

発話例 4-3: (女性 x 男性)

JFB027 でもさ、その人がさ、(うん) 自分にとってさ、ほんとにさ、(うん) ほんとにもうさー、あ、もう、もう、ほんとと素敵っていう (うん) 人と、そう、うまくいったのにさー (うん) そんなそんな、ようなことでだめになっちゃってさー、そういうさ、偉大な人をさ、失ったリスクってすごい大きくない?。

JM028 あーそれは、それは、そうだけど (<笑い>) あの一、①ま、こう、客観的に言わせてもらえば、(うん) 《少し間》次一見つけた人も、たぶん、偉大な人だよ<最後軽く笑いながら>。

発話例 4-3 では、JF027 (女性) と JM028 (男性) は恋人と別れることについて話している。失恋した JF027 の質問に対して、JM028 は「①ま」を用いて、自分の主張「次に見つけた人も偉大な人だよ」を引き出し、JF027 を慰める。

以上の先行研究と実例を見ると、男性がまとめるマーカ―であるマー類を多用するのは、男性が、談話をまとめる役割を担うことが多いことの反映であると考えられる。ではなぜ男性がそのような役割を担うのかについては、現段階では筆者は議論する用意を持たない。今後の課題としておく。

4.4.2.2 ナンカ類が男女ともにほぼ同じ頻度で用いられる傾向がある要因

この節では会話におけるナンカ類の役割について検討する。

田窪・金水（1997）は、ナンカ類は「だいたいこんな感じ」という心的状態を表すフィラーであると指摘している。鈴木（2000）は、ナンカ類の本質的な機能は「不確実性・不特定性」を表すという。これらの先行研究に共通するのは、ナンカ類が「不確定さ」を表すということである。

しかし、実際の会話で発話されるナンカ類は必ずしも常に「不確定さ」を表すわけではないと指摘する研究も少なくない。鈴木（2000）は、ナンカ類は「不確実性・不特定性」を表す本質的な機能のほかに、語用論的機能と談話調整機能もあると主張している。例えば、否定的な意見を暗示したり、時間的余裕を作り出したり、新しい話題の導入を示したりするなどの場合にナンカ類が出現しやすいという。飯尾（2006）は、ナンカ類の主な機能は「会話を和らげる」、「話題の獲得」、「つなぎ語」であると主張している。

上述した先行研究の見解を総合すると、ナンカ類には「不確定さ」を表し、「発話を和らげる」、「発話をつなぐ」、「発話権を獲得する」など多くの機能があると言える。さらに、鈴木（2000：76）によれば、「これらの諸機能は、それぞれ単独で働くこともあれば、複数が同時に働くこともある」という。

今回の調査データ（友人関係の大学生の会話）において、男女はいずれもコミュニケーションを順調に進めるために、ナンカ類を使って、表現を少し和らげる傾向がみられた。この結果は米川（1996）が提出した、現代の若者ことばの特徴の一つとして、「緩衝機能」（相手の感情を害したり傷つけたりするのを避けて、相手への印象を和らげ、言葉の暴力性を緩和する）があることと合致している。「発話をつなぐ」、「発話権を獲得する」など会話を促進させる機能を併せて考えると、ナンカ類の使用においては、社会一般で求められる男性像（自己主張のできる、行動力や指導力などがある）、あるいは女性像（美しさ、優雅さ、配慮などがある）との厳密な関連は見られない。すなわち、ナンカ類の使用において、社会的性役割期待がないため、現代の若者によって、男女区別なしに使われているのであると考える。実際の発話例を見る。

発話例 4-4: (男性 x 男性)

JMB012 TOEIC、TOEFL ってあれだよ、点数低いほうだよ。

JM036 TOEIC のほうが①なんかよく使われてるほうだよ。

(中略)

JMB012	大変だよー、どっちにしる進路は、ね、へこむよねー、(そうだよ) ②なんか3年になってへこむことが多いんだけど。
JM036	③なんか、現実をー、<笑いながら>見なきゃいけないのかって感じだよ(そうそう) (<笑い>)。

発話例 4-4 では、JM036 (男性) と JMB012 (男性) は大学院に入るために TOEFL か TOEIC のどちらを受けるべきかについて話している。JM036 は「①なんか」を用いて、「TOEIC のほうがよく使われている」という見解を小出しに提出し、相手の同意を求める。また、二人は進路のことについて話しているが、JMB012 は「②なんか」を使って時間を稼ぎ、「進路はへこむ」という発話に「三年生になると」という情報を補足する。JM036 は「③なんか」を使って、「現実を見なきゃいけない」という自分の主張を和らげる。

発話例 4-5: (男性 x 女性)

JM028	楽なポジションていう、①なんかポジションは別にないけど。
JFB027	そう、だってさ、誰よ、「人名 2」ちゃんでしょー。
JM028	うん、「人名 3」さん、「人名 4」君、俺。
JM028	】】そう、そうなんだけど、あのね(うん)「人名 4」君と、「人名 2 姓」さんだったらいいんだけど、(うん)「人名 3」さんちょっと怖いんだよね。
JFB027	ほらー②なんか 1 番③なんかさ、がりがりやりそうな 2 人がさ【【。
JM028	】】そう、そうなんだけど、(後略)

発話例 4-5 では、JM028 (男性) と JFB027 (女性) は JM028 のゼミにおけるポジションについて話している。JM028 は、JFB027 が提出する自分 (JM028) がゼミで一番楽なポジションにいるという指摘に対して、「①なんか」を用いて、表現を和らげ、否定的な意見を述べる。その後、JFB027 は「JM028 の隣に座る人はがりがりやりそうな人だ」を述べているが、そこでは「②と③なんか」を使い、表現の不確定さを表しながら、時間を稼ぐ。

4.5 まとめ

本章では、フィラーと性差の関係を検討するために、『BTSJ コーパス』を利用し、男性同士ペア、女性同士ペア、男女ペアの自然会話状況におけるフィラーの使用実態を明らかにした。その結果は以下になる。

- (1) フィラー全体を見ると、男性は女性より多くフィラーを使用する。

(2) ナンカ類は男女差にかかわらずほぼ同じ頻度で用いられる。マー類は男性によって多く用いられる。

(3) 男女のフィラー全体の使用頻度に、聞き手が同性か異性という違いは関わらない。

上記の結果では、フィラーの使用に見られる男女の差は、単に言語的な現象に留まらず、それぞれの社会的役割や期待が影響していることが示唆された。これにより、ジェンダーに基づくコミュニケーションスタイルの特性が明らかになり、言語使用における深い社会文化的背景が浮かび上がる。

ただし、今回の調査は年齢や上下関係などの条件を統一し、友人関係の大学生の雑談を調査データとしたが、会話場面が限られている。初対面の場合、フォーマルな場面など、より広い場面におけるフィラー使用の実態について全面的な考察を行えば、新たな差異が発見されうると考える。

第5章 応答詞における性差の実態

第5章では、同様の分析フレームワークを応答詞の使用に適用し、性差がどのように現れるかを検証する。このように、各章で扱う言語要素は異なるものの、ジェンダーが言語行動に及ぼす影響を多角的に解析するという本研究の基本的な目的は一貫している。5.1節では、応答詞とその分析の重要性及び本章の目的について導入する。5.2節では応答詞と性差の関係を扱った先行研究を概観し、既に明らかにされている知見と解決されていない課題を確認する。5.3では調査概要を述べる。5.4節では調査結果の要因について考察を行う。最後の5.5節はまとめである。

5.1 はじめに

日本語教育学会（1990）によると、応答詞は感動詞の下位類に分類され、応答機能を持つものと定義されている。応答詞には、「はい、うん、ええ、はあー」の肯定系応答詞、「いや、いえ、いいえ、ううん」の否定系応答詞がある（奥津、1988）。否定系応答詞と性差の関係を検討した研究はあるが、肯定系応答詞に焦点を当てたものはまだない。また、話し手の性別に限らず、聞き手の性別が応答詞の使用に及ぼす影響についても解明されていない。

そこで、本章は『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2022 年 3 月 NCRB 連動版』の中の会話を利用し、応答詞と性差の関係を明らかにする。そして、これらの男女差が生じる要因について考察する。

5.2 先行研究

本節では、応答詞に関する先行研究を概観し、それらによって明らかにされた知見と残された課題を明確化し、それに基づいて本章の目的を述べる。

応答詞に関する研究は、その使用例や機能を詳述するアプローチが主流であり（奥津、1988；中島、2011；小出、2011；金田・二宮、2020 など）、性差をはじめ社会言語学の視点からの研究は、これまでのところ比較的少ない。その中で野口（2018）の研究は、否定系応答詞の使用実態に焦点を当て、性別の影響について有益な洞察を提供する。野口（2018）の研究では、『合本女性のことば・男性のことば（職場編）』を使用し、20～50 代の有職者の男女を対象とし、否定系応答詞の使用実態を調査した。その結果、男性が「いや」を、女性が「いえ」、「いいえ」、「ううん」を多用するという傾向がみられた。

また、話者の性別と対話者の性別を見た結果、否定系応答詞は男女ともに同性に対して使用される傾向が強いことがわかった。一方、対話者の性別から否定系応答詞の使用を見ると、女性は男性に対してあまり否定応答表現を使用しない一方で、女性に対して否定応答表現を使用するのは女性よりも男性の方が多いという偏った言語使用が見られた。

野口（2018）の研究から、否定系応答詞の使用において男女差が存在することが分かった。また、聞き手の性別に基づく偏った言語使用は、性別特有の特徴を浮き彫りにしている。しかし、なぜこのような性差が生じるのかについては議論されていない。さらに、肯定系応答詞の使用に関する性差は、明確ではない。野口（2018）の研究に使用されたデータは1993年から2000年にかけて収集されたもので、調査対象者の年齢、経験、職業上の立場、社会的地位など多様な背景が研究結果に影響を与えている可能性がある。時代の変化とともに、応答詞の使用における性差の動向も変化する可能性があるため、最新のデータに基づいて、現代の日本人若者の日常会話における応答詞の使用実態を再調査する必要がある。

以上を踏まえ、本章では、話者の社会的属性を考慮に入れた『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の自然会話を利用し、男性同士ペア、女性同士ペア、男女ペアの自然会話における応答詞の使用実態と特徴を明らかにし、話し手と聞き手の性別が応答詞の使用にどのような影響を与えるかについて検討する。最後に、得られた男女差について要因の分析を行う。

5.3 調査概要

5.3.1 調査目的

本章では、現代の若者を対象とし、以下の二つの課題を明らかにすることを目的とする。

- (1) 話し手の性別は応答詞の使用に影響を与えるか
- (2) 聞き手の性別は応答詞の使用に影響を与えるか

5.3.2 調査データ

『BTSJコーパス』において、話者の社会的属性が「大学（院）生」、話者同士の関係が「同等」、会話のジャンルが「雑談」、話者同士の面識の度合いが「既知（友人）」、会話者の性別の組み合わせが「男性同士ペア」（18会話）、「女性同士ペア」（23会話）、「男女ペア」（22会話）という条件で検索を行った結果、63会話を抽出することができた。

5.3.3 調査対象

野口（2020：15）によると、「真偽疑問文は日常生活でも場面や相手との関係に関わらず高頻度で出現するため、その応答表現に着目するのは日本語教育面からみても意味深い」という。そこで本章では、真偽疑問文及びそれに対する応答詞に焦点を当て、性差との関連性を明らかにすることを目的とした。

真偽疑問文の定義については、野口（2020）の定義を基に、終助詞「か」を伴うものに限らず、広い意味で「聞き手に命題の真偽判定を求める」と言える文すべてを含めた。具体的には国立国語研究所（1960）の分類、「判断への疑念の表現」、「確認要求の表現」、「判定要求の表現」と呼ぶものを参照した。本調査では、これらの定義と分類に従い、63 件の会話に現れた真偽疑問文に対する応答詞を話者ごとに、種類別に記録した。

5.3.4 調査結果と分析

5.3.4.1 話し手の性別は応答詞の使用に影響を与えるか

本節では、話し手の性別が真偽疑問文に対する応答詞の使用において、影響があるかどうかについて考察する。表 5-1 は会話における各種の応答詞の使用回数を示す。表 5-1 に示すように、否定系応答詞より、肯定系応答詞の使用回数が圧倒的に多い。

表 5-1 会話における応答詞の使用回数

肯定系応答詞					否定系応答詞				
はい	はあ	ええ	うん	平均回数	いいえ	いえ	いや	ううん	平均回数
131	0	2	1200	10.58	0	3	180	33	1.71

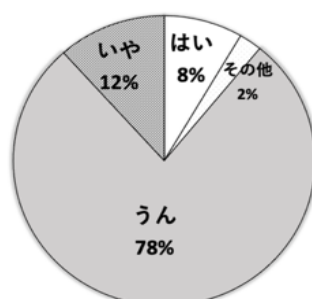


図 5-1 各種応答詞が会話の応答詞の総数に占める割合

各種の応答詞が全体の応答詞の出現数に占める割合を比較するために、図 5-1 を見てみよう。「うん」の出現数が最も多く、その次は「いや」と「はい」である。「はい」、「うん」と「いや」の出現数が応答詞全体の出現数の 95%以上を占めている。そのため、本研究では肯定系応答詞の「はい」と「うん」、否定系応答詞の「いや」の使用状況に焦点を当て、男女差に注目しながら分析していく。

まず、話し手の男性と女性がそれぞれ使用した「肯定系／否定系応答詞」、「はい」、「うん」、「いや」の平均使用回数を計算した。その結果は表 5-2 にまとめられている。話し手の性別と上記の五つの種類の応答詞の使用回数の関連を明らかにするために、負の二項回帰分析を行った。表 5-3 は結果のまとめである。

表 5-2 話し手の男性と女性の各応答詞の平均使用回数

性別	肯定系応答詞	否定系応答詞	はい	うん	いや
男性	7.33	1.98	1.57	5.76	1.84
女性	13.35	1.49	0.59	12.74	1.07

表 5-3 話し手の性別と各応答詞の使用回数の関連を検証した負の二項回帰分析結果

	肯定系応答詞	否定系応答詞	はい	うん	いや
性別係数	0.59	-0.31	-0.99	0.77	-0.56
P 値	$p<.05$	$p>.05$	$p<.05$	$p<.05$	$p<.05$

表 5-2 を見ると、会話の中の肯定系応答詞の平均使用回数は、女性の方 (13.35) が多く、否定系応答詞の平均使用回数では、男性の方 (1.98) がより多い。各応答詞の平均使用回数を見ると、「はい」と「いや」は男性 (それぞれ 1.57 と 1.84) に、「うん」は女性 (12.74) により多く使われることが分かる。

しかし、話し手の性別と各応答詞の関連を検証した負の二項回帰分析の結果 (表 5-3) を見ると、性別の係数¹³はそれぞれ正値と負値があるが、有意差が出る ($p < .05$) のは「肯定系応答詞」、「はい」、「うん」、「いや」である。男性と比較すると、女性の肯定系応答詞の平均使用回数が 1.80 倍 ($=\exp(0.59)$)、「うん」が 2.16 倍 ($=\exp(0.77)$) 多い。

「はい」の平均使用回数が 0.37 倍 ($=\exp(-0.99)$)、「いや」が 0.57 倍 ($=\exp(-0.56)$) である。「否定系応答詞」と性別の間には有意差があるとは言えない ($p > .05$) ため、男女が同じ頻度で「否定系応答詞」を使っていると言える。

上記の調査結果を総合すると、表 5-4 のようになる。表 5-4 において、負の二項回帰分析結果に有意な差が見られた場合には、男女間の差を比較するために、それぞれの応答詞の平均使用回数を数字で示した。一方で、有意な差が見られない場合には、「差がない」と表記した¹⁴。

表 5-4 話し手の性別から見た応答詞の平均使用回数の実態

話し手の性別	男性	女性
肯定系応答詞	7.33	13.35
否定系応答詞	差がない	
はい	1.57	0.59
うん	5.76	12.74
いや	1.84	1.07

表 5-4 を見ると、「はい」と「いや」が男性に、「うん」が女性により多く使用されることがわかる。

¹³ この「性別」変数は、性別における男性に対する女性の効果 (正の係数であれば、女性のほうが多い) を表す。5.3.4.1 における性別変数はすべてこの方法で処理されたものである。

¹⁴ 5.3.4.2 における表 5-9 もこの方法で表記している。

5.3.4.2 聞き手の性別が話し手の応答詞の使用に影響を与えるか

5.3.4.2.1 聞き手が同性・異性の場合の男性の応答詞の使用状況

本節では、男性の応答詞の使用回数が聞き手の性別によって変化するかどうかについて検討する。まず、聞き手が同性・異性の場合に男性が使用した「肯定系／否定系応答詞」、「はい」、「うん」、「いや」の平均使用回数を計算した。その結果が表 5-5 である。そして、聞き手の性別と男性の各応答詞の使用回数の関連を明らかにするために、負の二項回帰分析を行った。表 5-6 はその結果のまとめである。

表 5-5 聞き手が同性・異性の場合の男性の各応答詞の平均使用回数

聞き手の性別	肯定系応答詞	否定系応答詞	はい	うん	いや
同性	6.50	1.86	1.22	5.28	1.69
異性	8.68	2.18	2.14	6.55	2.09

表 5-6 聞き手の性別と男性の応答詞の使用回数の関連を検証した結果

	肯定系応答詞	否定系応答詞	はい	うん	いや
聞き手の性別係数	0.37	0.12	0.65	0.29	0.15
P 値	$p>.05$				

表 5-5 を見ると、聞き手が同性の場合より、聞き手が異性の方が、男性の各応答詞の平均使用回数が全て多いことがわかる。しかし、表 5-6 の負の二項回帰分析の結果を見ると、聞き手の性別係数¹⁵は正值と負値があるが、有意差があるとは言えない ($p>.05$)。この結果から、男性の応答詞の使用回数は、聞き手の性別と関わらないと言える。

5.3.4.2.2 聞き手が同性・異性の場合の女性の応答詞の使用状況

本節では、女性の応答詞の使用回数が聞き手の性別によって変化するかどうかについて検討する。男性話者の場合と同様、聞き手が同性・異性の場合に女性が使用した各種類の応答詞の平均使用回数を計算した。その結果が表 5-7 である。そして、聞き手の性別と女性の各

¹⁵ この「聞き手の性別」変数は、「聞き手が同性」に対する「聞き手が異性」の効果(正の係数であれば、「聞き手が異性」のほうが多い)を表す。5.3.4.2 で出現した「聞き手の性別」変数はすべてこの方法で処理されたものである。

応答詞の使用回数の関連を明らかにするために、負の二項回帰分析を行った。表 5-8 はその結果のまとめである。

表 5-7 聞き手が同性・異性の場合の女性の各応答詞の平均使用回数

聞き手の性別	肯定系応答詞	否定系応答詞	はい	うん	いや
同性	16.30	1.15	0.30	15.96	0.76
異性	7.18	2.18	1.18	6.00	1.73

表 5-8 聞き手の性別と女性の応答詞の使用回数の関連を検証した結果

	肯定系応答詞	否定系応答詞	はい	うん	いや
聞き手の性別係数	-0.85	0.63	1.36	-1.01	0.80
P 値	$p<.05$	$p>.05$	$p<.05$		

表 5-7 を見ると、聞き手が同性の場合より、聞き手が異性の場合における女性の「否定系応答詞」、「はい」「いや」の平均使用回数が多く、「肯定系応答詞」と「うん」の平均使用回数が少ない。表 5-8 を見ると、聞き手が同性の場合より、聞き手が異性の場合における女性の「肯定系応答詞」の平均使用回数が 0.43 倍 ($=\exp(-0.85)$)、「うん」が 0.36 倍 ($=\exp(-1.01)$) であり、「はい」が 3.90 倍 ($=\exp(1.36)$)、「いや」が 2.23 倍 ($=\exp(0.80)$) であることがわかる。聞き手の性別と「否定系応答詞」の使用回数の関連を検証した結果は、有意差があるとは言えない ($p>.05$)。この結果から、女性の否定系応答詞の使用回数は、聞き手の性別と関わらないと言える。

上記の調査結果を全て総合すると、以下の表 5-9 になる。

表 5-9 聞き手の性別から見た男性と女性の各応答詞の平均使用回数

話し手の性別	男性	女性	男性		女性	
聞き手の性別			同性	異性	同性	異性
肯定系応答詞	7.33	13.35	差がない		16.30	7.18
否定系応答詞	差がない				差がない	
はい	1.57	0.59			0.30	1.18
うん	5.76	2.74			15.96	6.00
いや	1.84	1.07			0.76	1.73

表 5-9 より、本調査の結果は以下のようにまとめることができる。

- (1) 「はい」と「いや」が男性に、「うん」が女性により多く使用される。
- (2) 女性の話し手が同性の聞き手に「うん」を、異性の聞き手に「はい」と「いや」を多用する傾向があるのに対して、男性の話し手は聞き手の性別による応答詞の使用の変化がほとんど見られない。

5.4 男女差の要因についての考察

本節では、『BTSJ コーパス』中の実際の発話例を典型例として例示し、性差が生じる要因について分析を進める。

5.4.1 男女がよく使用する応答詞の種類が異なる要因

本節では、話し手の性別から見た結果、「はい」と「いや」が男性に、そして「うん」が女性により多く使用される原因を考察する。この結果は、性役割期待と、会話における各応答詞の文法的な機能の二つの観点から理解できる。

まず、応答詞の文法的な側面から分析する。富樫（2002：149）は、「はい」と「うん」の違いは、提示された情報と（回答者に）呼び出された情報の一致性の強弱に依ると指摘している。質問に対して、正確さに確信を持っていれば、「はい」が用いられる。「はい」という断定的な応答は、質問者が提示した情報に対して回答者が計算や思考を行っているという態度を表す。一方、「うん」にはこのような効果がない。また、小出（2011：153）によれば、「いや」は直接的な応答ではなく、相手から投げかけられた話題に関連性の高い内容を持ち、自身の持っている内容の方向へ話線を導く機能を持つ。

これらの機能を踏まえると、「はい」と「いや」は明確な意見の表明や会話の流れを導く役割があり、これは男性が競争的で断定的なコミュニケーションスタイルを持つべきだという性役割期待と合致している。一方、「うん」は非断定的な応答を示し、より柔軟で共感的なニュアンスを持ち、話の流れをスムーズにし、相手との関係性を維持する機能を果たす。これは女性が間接的で柔らかいコミュニケーションスタイルを取るべきだという性役割期待に合致している。その結果、社会的性役割期待に応じた無意識の選択として、男性は「はい」や「いや」を、女性は「うん」をより多く使用する傾向があると考えられる。これらの観察はすべての状況や個人に当てはまるわけではないが、一般的な傾向を示している。実際の発話例をいくつか見ていく。

発話例 5-1: (女性×女性)

JF053 すごい、かわいいんだよ、あの人も。

JF054 ちょっとなんか、お父さんみたいな感じの人<だよ>{<}>。

JF053 <うん>{>}。

JF053 笑顔=。

発話例 5-1 においては、JF053 (女性) と JF054 (女性) が、第三者の人格について話している。JF054 は「(あの人は) お父さんみたいな感じの人だよ」と述べ、自分の判断について JF053 の意見を求めている。JF053 は「うん」と応答し、JF054 の発言に対する共感や同意を示している。この応答は、女性の強い断定を避け、相手の意見をより柔らかく肯定し、協調的なコミュニケーションスタイルを示している。

発話例 5-2: (男性×男性)

JM078 マリオカートまだあるんだね。

JM079 はい。

JM078 あ、もう<俺>{<}>。

JM079 <それ>{>}イニシャル D とマリオカートどっちがいいつつたら (うん)、みんなでまん、マリオカートだ<もん>{<}>。

発話例 5-2 においては、JM078 (男性) と JM079 (男性) が、パーティーでのゲームについて話している。JM078 が「マリオカートまだあるんだね」と言って、相手の確認を求めている。これに対して、JM079 は直接的に断定的な「はい」と応答した。その後、彼はなぜ肯定的な回答をしたのか (マリオカートがある) 理由について説明している。この応答は、JM078 の質問に対する直接かつ明確な同意を示し、男性の簡明で効率的なコミュニケーションスタイルを反映しているのではないだろうか。

発話例 5-3: (男性×男性)

JM095 はっ<笑い>、《少し間》 (うーん) 成人式行ってないんだっけ? [↓]。

JM095 あーあーあーあー。

JM095 クラス会みたいなやつね。

JM066 いや、行かなかった。

JM066 クラス会 (あー) には行かなかったんだ (あー) どー、そのー、じ、《少し間》「地名 1」に住んでー、(あーあーあー) 「名前 9」のー、(あー) 同期が 1 人 (へー) いてー。

で、そいつと一、成人式どーお[↑]みたいなことを（あー）ちょうど LINE して
て一、で、そのときに来ないの？、って、（あー）なぜ来ないの？、って言われて
JM066 一、えー、い、あんま行く気（＜笑い＞）ないけどって言ったときに一、ちょっと
ぐらい来なよって言われたから一（あー）、あー、じゃー顔だけ見に行くわー（あ
ーあーあー）って言って。

発話例 5-3 において、JM095（男性）と JM066（男性）はクラス会について話している。
JM095 の「成人式（クラス会）行っていないんだっけ?」と質問した際、JM066 は直接的に
「いや」と答え否定した。その後、JM066 は「名前 9」という同期生と成人式について LINE
で話していたことに話題の方向を変えた。この応答は、男性の会話をコントロールし、競争
的なコミュニケーションスタイルを反映している。

5.4.2 聞き手の性別によって男女の応答詞の使用変化が異なる要因

本節では、聞き手が同性か異性かによって、女性の話し手の応答詞の使用に変化が見られ
るのに対し、男性の話し手では変化が見られない原因について考察する。この結果は、男女
間でのコミュニケーションスタイルに違いが存在することを示唆しており、この違いもまた
社会的性役割期待を反映していると言える。

女性の話し手は、同性の聞き手に対して、共感的なニュアンスを持つ「うん」を多く使用
し、異性の聞き手に対してより正式な「はい」と「いや」を多く使用する傾向がある。これ
は、男性に比べ、女性がより社会的で協調的な性役割を期待され、他者との関係を重視し、
つながりを築こうとするコミュニケーションスタイルを無意識に採用しているためだと考
えられる。女性の話し手は、同性の聞き手に対して、より柔軟で共感的なニュアンスを持つ
「うん」を多用するのに対して、異性の聞き手に対して、相互の関係と距離を考慮し、より
慎重かつ丁寧な言葉遣いを選ぶ傾向がある。そのため、「はい」と「いや」を多く使用する
のであろう。

対照的に、男性の話し手が聞き手の性別に応じて自らのコミュニケーションスタイルを調
整することが、必ずしも社会的には期待されていないと言えるであろう。異性との対話にお
いても、女性のように相手との関係を細かく配慮し、言葉遣いを調整する必要をさして感じ
ない可能性があると考えられる。この振る舞いも、個人の意識的な選択というよりは、社会
的性役割期待に基づく無意識の影響を受けている可能性があるのではないだろうか。実際の
発話例をいくつか見ていく。

発話例 5-4: (女性×女性)

JF097 <もう全然>{>}私立よりきれいですよ。

JF096 なんかさ、近未来って感じじゃない?<笑い>。

JF097 うん<笑い>、なんか全部が新しいのがいい<ですよね>{<}>。

JF096 <なんか>{>}ねなんかね、アメリカの、あの建築家で、に依頼して作ってもらった、デザイン建築一になってん<のね、一応>{<}>。

発話例 5-4 において、JF097 (女性) と JF096 (女性) が大学の建物について話している。同性相手の JF096 が「近未来って感じじゃない?」という質問をした際、JF097 は「うん」と応答し、親密さや理解を示しながら、相手の意見に同意していることを表している。この応答は、女性同士の間の共感や協調的なコミュニケーションスタイルを反映している。

発話例 5-5: (男性×女性)

JM117 《少し間》ん[↑]、こないださー、##土曜日、サークルなくなったじゃーん?

JF217 はい。

JF217 <行け>{>}た?。

JM117 いや、もうねー、会場が一、あの一、金曜日ぐらいに(うん)もう、臨時休館(うーん)、なったからー、休みで、そう。

発話例 5-6: (女性×男性)

JF212 っで一、なったっからー、すごいきれいになった、って言って<た>{<}>。

JM115 <あっ>{>}そうなんだ。

JF212 お客さ、ああ、お店の人が。

JM115 お店の人が?。

JF212 お店[小声で]=。

JM115 =フランス語で?。

JF212 いや、英語だと思う。

JM115 ああ。

発話例 5-5 では、JM117 (男性) と JF217 (女性) がサークル活動について話している。異性の相手である JM117 が「土曜日、サークルなくなったじゃーん?」と質問した際、JF217

は共感的なニュアンスを持つ「うん」ではなく、簡潔で断定的な「はい」と応答し、正式かつ明確に同意していることを示した。

発話例 5-6 において、JF212（女性）と JM115（男性）がパリの市長交代後に街がきれいになったということについて話している。JF212 はお店の人から聞いた話（市長が変わった後、街がきれいになった）を伝えた後、JM115 はその人がどの言語を話していたかを尋ねた。異性の相手である JM115 の「フランス語で?」という質問に対して、JF212 は簡潔で「いや」と応答し、続けて「英語だと思う」と情報を補足した。

これらの応答詞の使用は、女性が会話の聞き手の性別と関係を考慮し、会話の環境に応じて自分の言葉遣いを調整する傾向があることを反映している。

発話例 5-7: (男性×男性)

JM131 ってことは一、まあ一応、もう来年修士?[↓]。

JM099 はい。

JM131 決まってるんだよね、修士一。

JM099 なんか、こないだ B 日程受けて一。

JM131 あーあー。

JM099 なんか 15 日に一、結果出るとか言われたんですけどー。

発話例 5-8: (女性×男性)

JF203 えっ[↑]、今夏休み?[→]、<だっけ>{<}。

JM065 <今もう>{>}終わっちゃいました夏休み。

JF203 終わっちゃったの?。

JM065 はい。

JM065 今授業あります。

JF203 あー、そー (<笑い>) んな。

発話例 5-7 において、JM131（男性）と JM099（男性）が修士課程への進学について話している。同性の相手である JM131 が「もう来年修士?」と質問した際、JM099 は断定的な「はい」と簡潔に応答し、明確な肯定や前向きな態度を示している。

発話例 5-8 において、JF203（女性）と JM065（男性）が夏休みと授業について話している。異性の相手である JF203 が「（夏休みは）終わっちゃったの?」と JM065 に確認を求めている際、JM065 は直接かつ断定的に「はい」と応答し、明確な肯定を示している。

これらの応答詞の使用は、男性が簡潔で直接的なコミュニケーションスタイルを好み、聞き手の性別に関わらず一貫した言葉遣いを維持する傾向があることを反映している。

以上、本節では実際の発話例を例示し、性差が生じる要因について考察した。応答詞の使用における性差は、男女が無意識のうちに異なる性役割期待を受けて、異なるコミュニケーションスタイルを持つことを反映している。そして性役割期待はそれぞれの応答詞が持つ文法的な側面を通じて談話に反映されるのである。

5.5 まとめ

本章では、『BTSJ コーパス』を利用し、話し手と聞き手の性別が応答詞の使用に与える影響を検討した。その結果は以下ようになる。

- (1) 「はい」と「いや」が男性に、「うん」が女性により多く使用される。
- (2) 女性の話し手が同性の聞き手に「うん」を、異性の聞き手に「はい」と「いや」を多用する傾向があるのに対して、男性の話し手は聞き手の性別による応答詞の使用の変化がほとんど見られない。

上記の結果は、男女が異なる性役割期待を受けていること、それが応答詞の文法的機能を通じて談話のスタイルに影響を及ぼすことを示している。

第 6 章 接続詞における性差の実態

第 5 章で応答詞の使用における性差について詳細に分析を行ったが、第 6 章では接続詞における性差を掘り下げ、ジェンダーによる言語行動の違いがいかに社会的性役割期待に根ざしているかを探求する。本章では、以下のように各節を構成している。6.1 節では、本章の目的と研究の重要性を導入する。6.2 節では、接続詞と性差の関係に焦点を当てた先行研究を概観し、これまでに明らかにされている知見と未解決の問題点を確認する。6.3 節では、実施した調査を述べる。6.4 節では、調査結果に基づいた性差の原因と影響を深く考察する。最後の 6.5 節では、本章の要点をまとめる。

6.1 はじめに

市川（1978）は接続詞を「二つの表現の中間に位置して、両者を対立させ、その関係を示すことによって、二つの表現を接続する働きを持っている」と定義している。従来、接続詞に関する研究は主に品詞分類や機能と用法に焦点を当ててきた。しかし、日常会話における接続詞の使用実態を社会言語学的な観点から分析した研究は十分ではない。

本章では『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2022 年 3 月 NCRB 運動版』を使用し、自然会話における接続詞の使用と性差の関係、及び性差が生じる要因について検討する。

6.2 先行研究

本節では、接続詞の使用と性差の関連に焦点を当てた先行研究を概観し、これまでに明らかにされた知見と未解決の問題点を明確にし、これに基づき本章の目的を述べる。

井出（1979）によれば、学生の作文を分析した結果、「男性は『ソシテ』『ダカラ』などの順接の接続詞をより多く使い、女性は『デモ』などの逆接の接続詞をより多く使う」と指摘されている。

佐久間（1979）は、月刊誌の随筆と入社試験の小作文を分析し、男女間で接続語句の使用に差があることを発見した。具体的には、男性が女性よりも接続語句を多用しており、「添加」「異種の複合」という連接類型に関しては女性がより多く使用している。

中田（1989）は、小学校の教科書と児童の作文における接続詞を分析し、「順接・添加」などのプラスの連関は男性に、「逆接・対比・転換」などのマイナスの連関は女性に多いことを指摘した。

小川（1996）の分析では、小中学生の作文における接続詞の使用率に顕著な男女差は認められないものの、男性が順接、女性が逆接の接続詞をより頻繁に使用する傾向があることを指摘している。

陳（2005）は、男性誌と女性誌の文体を分析し、接続詞の使用が男性誌において多いことを指摘している。これらの先行研究をまとめると、表 6-1 になる。

表 6-1 先行研究のまとめ

先行研究	調査データ	調査結果
井出 (1979)	書き言葉	男性は順接の接続詞を、女性は逆接の接続詞をより多く使う。
中田 (1989)		
小川 (1996)		平均接続詞数に顕著な男女差は見られない。
佐久間 (1979)		男性の方が接続詞を多く用いる。
陳 (2005)		

表 6-1 を見ると、先行研究における接続詞の使用に関する男女差の分析は、様々な結果を示している。小川 (1996) の研究では、男女間での平均接続詞数に顕著な差は見られないとされているが、佐久間 (1979) と陳 (2005) の研究では、男女間で使用頻度に差があると指摘されている。接続詞の種類に関しても異なる結果が示されている。これらの研究結果の相違点は、使用された調査データや方法の違いに起因する可能性があると考えられる。

多くの研究が書き言葉に基づいており、話し言葉に焦点を当てた調査が必要である。また、これまでの研究は話し手の性別に注目しているが、聞き手の性別が接続詞の使用にどのような影響を及ぼすのかについては明らかにされていない。

以上を踏まえ、本章では、『BTSJ コーパス』を利用し、年齢や上下関係などの条件を統一したうえで、男性同士ペア、女性同士ペア、男女ペアの自然会話状況における接続詞の使用実態と特徴を明らかにし、話し手と聞き手の性別が接続詞の使用にどのような影響を与えるのかについて検討する。最後に、得られた男女差について要因の分析を行う。

6.3 調査概要

6.3.1 調査目的

本研究では、現代の若者を対象とし、自然会話のデータを用いて、以下の三つの課題を明らかにする。

- (1) 男女では、話し言葉においてどちらが接続詞を多く使うか。
- (2) それぞれの性別で頻繁に使用される接続詞の種類は何か。
- (3) 聞き手の性別が、話し手の接続詞の使用に影響を与えるか。

6.3.2 調査データ

『BTSJ コーパス』において、話者の社会的属性が「大学（院）生」、話者同士の関係が「同等」、会話のジャンルが「雑談」、話者同士の面識の度合いが「既知（友人）」、会話者の性別の組み合わせが「男性同士ペア」、「女性同士ペア」、「男女ペア」という条件で検索し、63 会話を抽出した。男性同士ペアは 18 会話、女性同士ペアは 23 会話、男女ペアは 22 会話である。

6.3.3 調査対象

本研究では、市川（1978）の定義と分類に従い、63 件の会話に現れた接続詞を、表 6-2 に示すような種類別に分類し、話者ごとに記録した。

表 6-2 接続詞の分類

類型	定義	例
順接	前の内容を条件とするその帰結を導く	だから、それで
逆接	前の内容に反する内容を導く	でも、けれども
添加	前の内容に付け加わる内容を導く	次に、そのうえ
対比	前の内容に対して対比的な内容を導く	というより、あるいは
転換	前文の内容から転じて、別個の内容を導く	ところで、では
同列	前文の内容と同等にみなされる内容を導く	要するに、例えば
補足	前文の内容を補足する内容を導く	なぜなら、ただ

6.3.4 調査結果と分析

6.3.4.1 男女では、話し言葉においてどちらが接続詞を多く使うか

この節では、調査目的（1）について結果を分析する。表 6-3 は男性と女性それぞれの各種類の接続詞の平均使用回数を示している。女性（29.75）のほうが男性（24.19）よりも接続詞の平均使用回数が多いことが分かる。そして、性別と話し手の接続詞の使用回数の関連を明らかにするために、本調査は負の二項回帰分析を行った。表 6-4 はその結果を示している。

表 6-3 男性と女性の各種類の接続詞の平均使用回数

性別	順接	逆接	添加	対比	転換	同列	補足	総数
男性	8.17	8.05	1.91	0.28	2.24	1.26	2.28	24.19
女性	8.26	13.10	2.49	0.10	2.75	0.44	2.60	29.75

表 6-4 性別と接続詞の使用回数の関連を検証した結果

	係数	標準誤差	P 値
切片	-2.35	0.13	0.00
性別	0.20	0.18	0.27
従属変数: 話者ごとの接続詞の使用回数 n=126 AIC : 1093.00			

表 6-4 を見ると、性別の係数¹⁶⁾は正值 (0.20) だが、有意とは言えない ($p > .05$)。この結果から、現代の若者において、男性と女性の接続詞の平均使用回数に差がないことが分かる。

6.3.4.2 それぞれの性別で頻繁に使用される接続詞の種類は何か

この節では、調査目的 (2) について結果を分析する。男女それぞれ使用した各種類の接続詞が全体の接続詞の出現数に占める割合を図 6-1 に示す。図 6-1 から、逆接の接続詞は女性に、順接の接続詞は男性により多く使われていることが分かる。性別と各種類の接続詞の使用回数の関連を明らかにするために、6.3.4.1 と同様の方法で、負の二項回帰分析を行った。表 6-5 はその結果のまとめである。

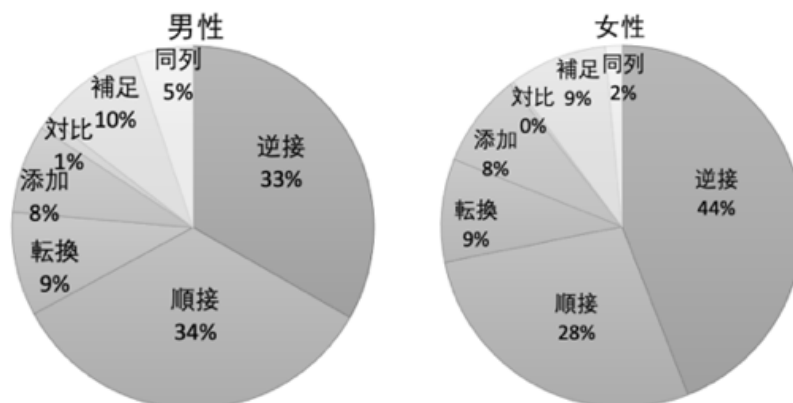


図 6-1 各種類の接続詞が接続詞総数に占める割合

¹⁶⁾ この「性別」変数は、性別における男性に対する女性の効果(正の係数であれば、女性のほうが多い)を表す。6.3.4.1 と 6.3.4.2 における性別変数はすべてこの方法で処理されたものである。

表 6-5 性別と各種の接続詞の使用回数の関連を検証した結果

	順接	逆接	添加	対比	転換	同列	補足
性別係数	0.02	0.49	0.25	-1.01	0.21	-1.05	0.02
P 値	$p>.05$	$p<.05$	$p>.05$	$p<.05$	$p>.05$	$p<.05$	$p>.05$

表 6-5 を見ると、性別の係数はそれぞれ正值と負値があるが、有意差が出る ($p<.05$) のは「逆接」、「対比」、「同列」である。男性と比較すると、女性の逆接の接続詞の平均使用回数が 1.63 倍 ($=\exp(0.49)$) 多い。対比の接続詞の平均使用回数が 0.36 倍 ($=\exp(-1.01)$)、同列の接続詞の平均使用回数が 0.35 倍 ($=\exp(-1.05)$) である。そのほかの種類の接続詞と性別の間には有意差があるとは言えない ($p>.05$) ため、男女とも同程度の頻度で使われると言える。

6.3.4.3 聞き手の性別が、話し手の接続詞の使用に影響を与えるか

6.3.4.3.1 聞き手が同性・異性の場合の男性の接続詞の使用状況

本節では、男性の接続詞の使用回数が聞き手の性別によって変化するかどうかについて検討する。まず、聞き手が同性・異性の場合に男性の話し手が使用した各種の接続詞の平均使用回数を計算した。その結果は表 6-6 に示される。聞き手の性別と男性の接続詞の使用回数の関連を明らかにするために、負の二項回帰分析を行った。表 6-7 はその結果のまとめである。

表 6-6 聞き手が同性・異性の場合に男性の各接続詞の平均使用回数

聞き手	順接	逆接	添加	対比	転換	同列	補足	総数
同性	8.58	6.66	2.29	0.34	2.31	1.60	2.12	23.91
異性	6.81	9.86	1.38	0.14	2.28	0.71	2.33	23.52

表 6-7 聞き手の性別と男性の各接続詞の使用回数の関連を検証した結果

聞き手の性別係数	順接	逆接	添加	対比	転換	同列	補足	総数
	-0.27	0.43	-0.49	-0.93	0.04	-0.75	0.03	-0.02
P 値	$p>.05$							

表 6-7 の結果を見ると、聞き手の性別係数¹⁷は正值と負値があるが、有意な差は見られない ($p>.05$)。この結果から、男性の各種類の接続詞の使用回数は、聞き手の性別と関わらないと言える。

6.3.4.3.2 聞き手が同性・異性の場合の女性の接続詞の使用状況

この節では、女性の接続詞の使用回数が聞き手の性別によって変化するかどうかについて検討する。男性話者の場合と同様、聞き手が同性・異性の場合に女性の話し手が使用した各種類の接続詞の平均使用回数を計算した。その結果は表 5-8 に示される。聞き手の性別と女性の各種類の接続詞の使用回数の関連を明らかにするために、負の二項回帰分析を行った。表 6-9 はその結果のまとめである。

表 6-8 聞き手が同性・異性の場合に女性の各接続詞の平均使用回数

聞き手	順接	逆接	添加	対比	転換	同列	補足	総数
同性	7.76	13.87	2.59	0.07	2.59	0.41	2.57	29.85
異性	9.32	11.50	2.27	0.18	3.09	0.50	2.68	29.55

表 6-9 聞き手の性別と女性の各接続詞の使用回数の関連を検証した結果

聞き手の性別係数	順接	逆接	添加	対比	転換	同列	補足	総数
	0.06	-0.23	-0.18	0.98	0.10	0.09	0.02	-0.10
P 値	$p > .05$							

表 6-9 の結果を見ると、聞き手の性別係数は正值と負値があるが、有意な差は見られない ($p>.05$)。この結果から、男性の場合と同様に、女性の各種類の接続詞の使用回数も、聞き手の性別と関わらないと言える。

上記の調査結果を総合すると、以下のようになる。

- (1) 話し言葉における接続詞の平均使用回数では男女差はない。
- (2) 男性は同列と対比の接続詞を、女性は逆接の接続詞を多用する傾向がある。
- (3) 男女ともに、接続詞の使用は聞き手の性別と関わらない。

¹⁷ この「聞き手の性別」変数は、「聞き手が同性」に対する「聞き手が異性」の効果(正の係数であれば、「聞き手が異性」のほうが多い)を表す。6.3.4.3 で出現した「聞き手の性別」変数はすべてこの方法で処理されたものである。

6.4 男女差の要因についての考察

ここまで、現代の若者が自然会話で使用する接続詞の特徴と性差の関係について明らかにした。調査データや方法、さらには調査対象の社会属性の違いが、先行研究と本論の結果に差異を生じさせているが、この差異は研究の正確性に問題を投げかけるものではなく、言語使用の多面的な理解を促すものと考えられる。これを受けて、本節では、既に議論された社会的性役割期待と、それに基づくコミュニケーションスタイルの違いが、男女の接続詞の使用にどのように影響を与えているかを明らかにする。具体的には、男性と女性で期待されるコミュニケーションスタイルが接続詞の選択にどのように反映されているのか、本章で収集したデータを用いて新たな視点から分析する。

6.4.1 男性が同列と対比の接続詞をより多く使う原因

この節では、男性が同列と対比の接続詞をより多く使うことについて分析する。

市川（1978）によると、同列の接続詞は、前述した内容と同等の内容を導くものとされている。例えば、「要するに」、「言い換えれば」、「例えば」などが典型的な例である。同列の接続詞は、話の流れの中で同じレベルの情報を並列させ、話の要点や結論をまとめ、または一連の論点を強調するために使われる。これは論理的で結論を明確にするスタイルを好む男性の社会的性役割と一致しており、自身の主張や意見を明確かつ断定的に示すことで直接的なコミュニケーションスタイルを反映する。男性が同列の接続詞を多用することは、情報を整理、要約することを通じて、自分の発言を強化し、会話内での自己の位置を明確にすることを可能にしていると考えられる。

一方、市川（1978）によれば、対比の接続詞は、前述の内容に対して対照的な内容を導くものとされている。例えば、「逆に」、「というより」、「一方」、「あるいは」などが対比の接続詞の典型例である。これらの接続詞は、異なる視点や意見を比較し、対立や違いを明らかにする際に用いられることが多い。これは対話内での立場を確固たるものにし、相手や聞き手に対する競争的な姿勢をとるコミュニケーションスタイルと結びついている。男性は社会的性役割期待の影響を受けて、対立する意見や事実を明確に提示し、自己の立場や優位性を強化する傾向がある。対比の接続詞を多用することによって、男性は議論を明確化し、自らの意見や立場の独自性と優位性を強調することができると考えられる。

以上の点から、社会的性役割期待に応じた無意識の選択として、男性は自信を持って自己の意見を表現し、議論をリードするために同列や対比の接続詞を多用するのだろう。

具体的なデータを見ると、3.4.1 節において、「要は」などの同列の接続詞の平均使用回数に関する調査（表 6-3）で、男性の平均使用は 1.26 回であり、女性は 0.44 回という結果であった。負の二項回帰分析の結果（表 6-5）も、男性と比較すると、女性の同列の接続詞の平均使用回数が 0.35 倍であることを示している。これらのデータは、男性が同列の接続詞を多用する傾向にあることを実証的に支持している。以下で、実際の発話例を見てみよう。

発話例 6-1：（男性×男性）

JM054	それを買って（うんうん）、紹介するっていうのが（うんうんうん）始まって一、で、最初はそういう、なんかその一、《少し間》機材系から（うんうん）始まって、なんかそのパソコンとかそういうちょっと大衆は、のほうに、Mac ‘マック’ 買いました、iPad 買いましたとかなって（はいはいはい）、そっからその、HIKAKIN とかが登場してきて（うんうん）、なんかお菓子買いました<っていうやつを>{<、
JM060	<うんうん、①要は>{>}なんか別に（そうです）、他の人も別に<全然買えるようなものを>{<。
JM054	<全然買えるけど>{>}、で、なんかその一、新しくっていうのはみんな知らないとか（分かる分かる）、そういったものを（うんうん）買って（うん）、でかつ、なんか過激なリアクションをして<笑い>（うんうん）、エンターテインメントだっていうのがあって（うんうん）、で、こ、でそれがしばらく続いて（うん）、なんかおも、なんか面白系の人が増えて（うんうん）、
JM054	で、最近だとあれですよ、金額ですよ<軽い笑い>。
JM060	はいはいはいはい、確かに確かに確かに。
JM054	どんどんなんかもう、一千万の（うんうんうん）、《少し間》車買ってみたとか（うんうん）、そんな感じなんかどんどんそのレビューの対象が変わっていつてる<なあって思う>{<。
JM060	<ある意味>{>}それで最初に戻りつつあるのかな。
JM060	②要はニッチなというか他の人が③要は=、
JM054	=買えない<一、そうですね<軽い笑い>>{<。
JM060	<そう、買えない>{>}ところに一、なんか、よ、そのカメラとかも最初はさあ、④要はさあ、なんか多分、買いたいと思った人もなかなかこっちが出ないわけじゃないですか。

発話例 6-1 では、JM054（男性）と JM060（男性）が YouTube でのレビュー対象の変遷について話している。JM054 は、レビュー対象が機材系から一般的な製品に移行していることについて自分の考えを述べている。この過程で、JM060 は「うんうん」という相槌を使いながら会話に割り込み、発話権を獲得した。その後、「①要は」という接続詞を使って、JM054 の発言の要点を「他の人も別に全然買えるようなもの」としてまとめた。

続いて、JM054 は最近のレビュー対象が高額な車などに変わっていることを述べた。これに対し、JM060 は「ある意味それで最初に戻りつつあるのかな」と自分の見解を述べた後、「②要は」と「③要は」を用いて、JM054 の主張と自分の意見を「ニッチなというか

他の人が（買えないもの）」としてまとめた。さらに、「④要は」を用いて、聞き手の注意を自分の言っていることの最も重要な部分に集中させた。

発話例 6-1 を見ると、JM060 は「要は」を頻繁に使用して、話の中心となる主張や見解を明確にし、聞き手の注意をそのまとめられた焦点に向けさせている。これらの接続詞の使用は、男性が会話をコントロールし、直接的で競争的なコミュニケーションスタイルを好むことを反映していると考えられる。

次に、男性が「逆に」などの対比の接続詞をより多く使う点について考察する。6.3.4.1 節において、「逆に」などの対比の接続詞の平均使用回数に関する調査（表 3）で、男性の平均使用は 0.28 回であり、女性は 0.10 回という結果であった。6.3.4.2 節における負の二項回帰分析の結果も、男性と比較すると、女性の対比の接続詞の平均使用回数が 0.36 倍であることを示している。このデータを踏まえ、男性が対比の接続詞を多用する実際の発話例を見てみよう。

発話例 6-2: (男性×男性)

JM119	そういうね、あの一、なんだろうな一、先生から見たときの一、いい子っていうのは、まあ、ある種、危険な部分をはらんでる（そうそうそうそう）、だよ（そうそうそうそう）。
JM119	だから、その一、先生の言うことを聞くからいい子（うーん）、《少し間》っていう判断は果たして本当にいいのだろうかってゆう（そ一）ね、そうゆうのはあるかもしれないし（そうそうそうそう）。
...	中略
JM103	うーん、[小声で]そうだね一（うーん）。
JM103	[小声で]なんとも言えないな一、あは<軽い笑い>。
JM119	その問題、の、ある一子??、①要するに、ちょっとやんちゃな子??（うん）、先生にとっては手一をつけるのが、ちょっと手のかかる子??（うん）、そっちのほうが一、②逆に一、いろいろ一、《沈黙 1 秒》考えて（そうそうそうそう）、やったりするから（そうそうそうそう）。
JM119	それなりに一、やんちゃする一、には、理由が、《少し間》<ある>{<}、
JM103	<ね一>{>}、あるか<ら一>{<}。

発話例 6-2 では、JM119（男性）と JM103（男性）が「いい子」と「やんちゃな子」と見なされる生徒の特性について話している。JM119 は、先生から見た「いい子」という判断基準が実際には一部の危険を含む可能性について自分の見解を述べている。その後、「①要するに」という接続詞を使い、複雑な議論の要点を簡潔にまとめ、自分の言っていることに聞き手の注意を向けさせている。続いて、「②逆に」を用い、一般的な見方とは異なる視点を提示し、「やんちゃな子」の行動には正当な理由があるという新たな主張を明確に強調している。

発話例 6-2 を見ると、JM119 の男性は「要するに」と「逆に」を使用し、議論の要点を簡潔にまとめ、対立する意見を明確に提示し、聞き手の注意を自分の主張に向けさせている。これらの接続詞の使用は、男性が直接的、断定的、簡潔で競争的なコミュニケーションスタイルを好むことを反映していると考えられる。

6.4.2 女性が逆接の接続詞をより多く使う原因

ここでは、女性が逆接の接続詞を多く使う理由について分析する。

市川 (1978) では、逆接の接続詞は、前述した内容に反する内容を導くものであり、例えば、「でも」、「けど」、「けど」、「それでも」などがその典型的なものとされている。逆接の接続詞を用いることで、話し手は自分の意見を述べつつも、他人の意見を尊重する姿勢を保つことができる。これにより、聞き手に肯定的な反応を促し、よりスムーズに会話を続けることが可能になる。さらに、逆接の接続詞は、柔軟性を持ちながらも、自分のスタンスを保つことが可能である。これは、協調的でありながら、自己の立場を維持するというバランスを取るコミュニケーションスキルとして重要である。逆接の接続詞を多用することによって、女性は相手に対する配慮を示すとともに、意見の不一致があっても円滑なコミュニケーションを図ることができる。

以上の点から、女性が逆接の接続詞を多用することは、協調性を重んじ、コンフリクトを避けつつも、自分の意見を適切に表現することを可能にしていると考えられる。これは社会的性役割期待とコミュニケーションスタイルの相互作用による結果として現れていると考えられる。

6.3.4.1 節において、「でも」などの逆接の接続詞の平均使用回数に関する調査 (表 6-3) で、男性の平均使用は 8.05 回であり、女性は 13.10 回という結果であった。6.3.4.2 節における負の二項回帰分析の結果も、男性と比較すると、女性の逆接の接続詞の平均使用回数が 1.63 倍多いことを示している。これらのデータから、女性が逆接の接続詞を多用する傾向にあることが実証的に示されている。実際の発話例を見てみよう。

発話例 6-3: (女性×女性)

JF045 今日あれ、説明会行きたかったよ。

JF046 行きたかったね。

JF046 4 時<半か>{<}>。

JF045	<①でも>{>}まさか教職の先生にさ(<笑い>)、“就職の説明会、行って来ます”とかって<笑いながら>=。
JF046	=②でも言語教育法で、ふつうの専修専門にも入ってるから、大丈夫なんだよ。
JF046	“教職じゃないです”ってことにしとけばいいんだよ<笑い>。
JF045	えー、③でも登録が、うふ<笑い>。
JF046	いっしょでしょ?。
JF045	そう<なの?>{<}>。
JF046	<それ>{>}専修専門だもん。
JF045	あ、マジ<でー?>{<}>。
JF046	<自由>{>}科目になってるもん。
JF045	あー、そうなんだ。
JF045	じゃあいいんだよ=。
JF045	=④でも、よけい印象が(うん)悪くなりそうで<怖い>{<}>。
JF046	<あいつ>{>}嫌いだし。

発話例 6-3 では、JF045 (女性) と JF046 (女性) が就職説明会に関する話題のなかで、教職の先生に対してどのように説明するか、またそれに伴ういくつかの問題について話している。JF045 は、就職説明会に参加することに対して強い関心を持っているが、それを教職の先生にどのように伝えるかについて不安を抱いている。JF045 が使用した「①でも」は就職説明会に行きたいという気持ちと、それを教職の先生に報告することへの躊躇や心配を表している。つまり、希望と現実の間の逆接を示している。JF046 は「②でも」を使って、前述の問題に対する「しかし、(言語教育法で、ふつうの専修専門にも入っているから) 実は大丈夫だ」ということを表している。さらに、JF045 を安心させるため、「“教職じゃないです”ってことにしとけばいいんだよ」と冗談を交えて状況を軽減する方法を提案している。JF045 は「③でも」を使って、JF046 の安心させる発言に対して、さらに「登録の問題」という懸念を提示している。ここでも逆接の意味で用いられ、議論を深める役割を果たしている。最後に、JF045 は「④でも」を使用し、解決策を見つけた後の新たな心配を導入している。この用法も逆接を示しており、話し手の懸念が完全には解消されていないことを表している。

発話例 6-3 を見ると、JF045 と JF046 は「でも」という逆接の接続詞を頻繁に用いて、これにより異なる意見や視点を柔軟に統合し、対立を緩和しながら会話を進めている。その結果、最終的には双方が調和する結論に達している。これらの接続詞の使用は、女性が他者との関係を重視して、自己主張を控えめにし、断定的な結論を避ける協調的なコミュニケーションスタイルをとるということを反映している。

6.5 まとめ

本論では、『BTSJ コーパス』を利用し、現代の若者の自然会話において、話し手と聞き手の性別と接続詞の使用の関係を検討した。その結果は以下のようになる。

- (1) 話し言葉における接続詞の平均使用回数における男女差はない。
- (2) 男性は同列と対比の接続詞を、女性は逆接の接続詞を多用する傾向がある。
- (3) 男女の接続詞の使用はともに聞き手の性別と関わらない。

上記の結果は、男女が異なる性役割期待を受けていること、それが接続詞の文法的機能を通じて談話のスタイルに影響を及ぼすことを示している。

第7章 ぼかし表現における性差の実態

本章では、ぼかし表現における性差について考察する。7.1 節では、本研究の重要性と目的を述べる。7.2 節では、ぼかし表現と性差に関する先行研究を概観し、既に明らかにされた知見と未解決の課題を確認する。7.3 節では、これらの課題に対応するために実施した調査の概要を述べる。7.4 節では、調査結果を分析し、その影響要因を考察する。最後の 7.5 節では、本章のまとめについて述べる。

7.1 はじめに

村田（1994：119）は、ぼかし表現を「言わずにぼかす方法ではなく、言う態度を言葉でぼかす方法である。言うことで、限定や断定や個別性を回避するのである」と定義している。ぼかし表現に関する既存の研究は、主にその機能や用法に焦点を当ててきたが、社会言語学的な視点からぼかし表現の使用と性別との関係については、まだ十分に探究されていない。

本章では『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2022 年 3 月 NCRB 連動版』を使用し、自然会話におけるぼかし表現の使用と性差の関係、及び性差が生じる要因について検討する。

7.2 先行研究

本節では、ぼかし表現に関する先行研究を概観し、これまでに明らかにされた知見と未解決の問題点を整理したうえで、それに基づき本章の目的を明確にする。

ぼかし表現に関する先行研究は、その分類や意味機能を詳述するものが多い（村田、1994；

辻、1996；奥秋、1999 など）。一方、性差との関連を検討する研究はまだ少ない。ぼかし表現と性差との関連を検討した研究に陳（2013）が挙げられる。

陳（2013）は、2007 年から 2011 年にかけて福岡県の国立大学の学生寮で収集されたデータを基にしており、45 人（男性 27 人、女性 18 人）の自然会話におけるぼかし表現の使用において、性別とフォーマル度の影響を検討した。その結果、フォーマルな場面では女性が、非フォーマルな場面では男性がぼかし表現を多用する傾向があることを示している。また、ぼかし表現は対人関係を円滑にするため、特に若者において広く使われていると指摘している。

陳（2013）の研究はぼかし表現の使用に関して多くの洞察を提供しているが、いくつかの未解決の課題も指摘することができる。ぼかし表現の使用は性別とフォーマル度の影響を受けていることが明らかにされたが、なぜこのような性差が生じるのかについては議論されていない。また、話し手の性別に限らず、聞き手の性別がぼかし表現の使用に及ぼす影響についても解明されていない。さらに、ぼかし表現が対人関係やコミュニケーションに与える具体的な影響についても、さらなる分析が必要である。

以上を踏まえ、本章では、話者の社会的属性を考慮に入れた『BTSJ コーパス』の自然会話を利用した調査を踏まえ、男性同士ペア、女性同士ペア、男女ペアの自然会話におけるぼかし表現の使用実態と特徴を明らかにし、話し手と聞き手の性別がぼかし表現の使用にどのような影響を与えるかについて検討する。最後に、得られた男女差について要因の分析を行う。

7.3 調査概要

7.3.1 調査目的

本章では、現代の若者を対象とし、自然会話のデータを用いて、以下の三つの課題を解明することを目的としている。

- (1) 男女のどちらがぼかし表現をより多く使用するか。
- (2) 各性別で頻繁に用いられるぼかし表現の種類は何か。
- (3) 聞き手の性別は話し手のぼかし表現の使用に影響を与えるか。

7.3.2 調査データ

本研究の調査データは、『BTSJ コーパス』から抽出されたものである。選定基準として、会話者の社会的属性は「大学（院）生」、話者間の関係は「同等」に限定し、会話のジャンルは「雑談」、話者同士の面識は「既知（友人間）」とした。性別の組み合わせは「男性同士ペア」（18 件）、「女性同士ペア」（23 件）、「男女ペア」（22 件）の三つに分類した。これらの条件に合致する会話データを検索した結果、合計 63 件のデータが選出された。

7.3.3 調査対象

本章では、村田（1994）、辻（1996）、奥秋（1999）、陳（2013）などの先行研究の分類を参考して、以下のぼかし表現を調査対象とした。

とか、たり、みたいな、っぽい、かな、のほう、的、系、という感じ（って感じ、っていう感じ）、というか（っていうか、ていうか、とゆうか、てゆうか、てゆっか、てか、つうか、つか）

7.3.4 調査結果と分析

7.3.4.1 男女のどちらがぼかし表現を多く使用するか

調査目的（1）を明らかにするために、男性と女性それぞれの各種類のぼかし表現の平均使用回数を計算し、表 7-1 に示している。計算の結果、女性（32.25）の平均使用回数が男性（21.86）よりも多いことが明らかになった。さらに、性別と話し手のぼかし表現の平均使用回数の関連を明らかにするために、本調査は負の二項回帰分析を行った。表 7-2 はその結果を示している。

表 7-1 男性と女性の各種類のぼかし表現の平均使用回数

性別	とか	たり	かな	的	系	っぽい	のほう	みたいな	という感じ	というか	総数
男性	9.98	0.38	4.28	0.43	0.16	0.02	0.07	4.17	0.71	1.67	21.86
女性	16.0	0.4	5.26	0.28	0.18	0.01	0.09	7.34	1.07	1.57	32.25

表 7-2 性別とぼかし表現の使用回数の関連を検証した統計の結果

	係数	標準誤差	P 値
切片	-2.44	0.13	0.00
性別	0.36	0.18	0.05
従属変数: 話者ごとのぼかし表現の使用回数 n=126 AIC : 1092.71			

表 7-2 から、性別の係数¹⁸が正值 (0.36) で、有意差がある ($p < .05$) が示される。この結果から、現代の若者において、女性は男性よりぼかし表現をより多く使うと言える。具体的な数値を見れば、男性と比較すると、女性のぼかし表現の平均使用回数が 1.43 倍 ($=\exp(0.36)$) 多い。

7.3.4.2 各性別で頻繁に用いられるぼかし表現の種類は何か

調査目的 (2) を明らかにするために、男女別に使用された各種類のぼかし表現が全体のぼかし表現の出現数に占める割合を計算し、図 7-1 に示している。図 7-1 から、男女ともに「とか」を最も頻繁に使用している。男性は「かな」、次いで「みたいな」を、女性は「みたいな」、次いで「かな」を多用している。

そして、性別と各種類のぼかし表現の使用回数の関連を明らかにするために、7.3.4.1 と同様の方法で、負の二項回帰分析を行った。表 7-3 はその結果のまとめである。

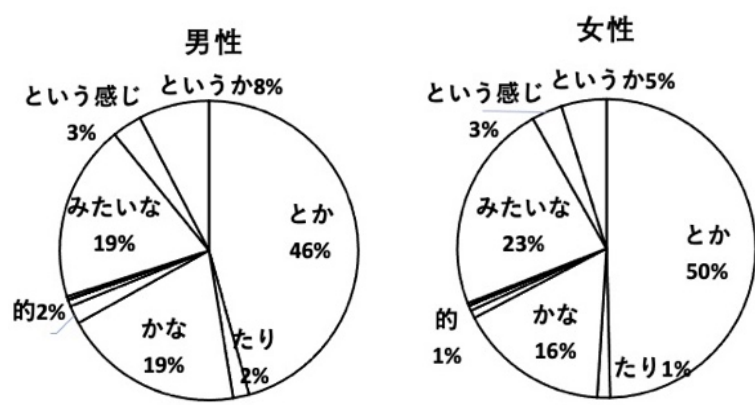


図 7-1 各種類のぼかし表現がぼかし表現の総数に占める割合

表 7-3 性別と各種のぼかし表現の使用回数の関連を検証した統計の結果

	とか	みたいな	かな	という感じ	というか
性別係数	0.44	0.54	0.22	0.19	-0.53
P 値	$p < .05$		$p > .05$		

表 7-3 を見ると、性別の係数はそれぞれ正值と負値があるが、有意差が見られた ($p < .05$) のは「とか」と「みたいな」のみである。男性と比較すると、女性の「とか」の平均使用回

¹⁸ この「性別」変数は、性別における男性に対する女性の効果(正の係数であれば、女性のほうが多い)を表す。7.3.4.1 と 7.3.4.2 における性別変数はすべてこの方法で処理されたものである。

数が 1.55 倍 ($=\exp(0.44)$)、「みたいな」の平均使用回数が 1.72 倍 ($=\exp(0.54)$) 多い。そのほかの種類のぼかし表現と性別の間には有意差があるとは言えない ($p>.05$) ため、男女は同程度の頻度で使われると言える。

7.3.4.3 聞き手の性別が話し手のぼかし表現の使用にどのような影響を与えるか

7.3.4.3.1 聞き手が同性・異性の場合の男性のぼかし表現の使用状況

本節では、聞き手の性別が、男性の話し手のぼかし表現の使用回数に影響を与えるかどうかについて検討する。まず、聞き手が同性・異性の場合に、男性のぼかし表現の平均使用回数を計算し、聞き手が異性の場合の平均使用回数 (25.68) が、同性の場合 (19.53) よりも多いことを確認した。そして、聞き手の性別と男性のぼかし表現の使用回数の関連を明らかにするために、負の二項回帰分析を行った。表 7-4 はその結果のまとめである。

表 7-4 聞き手の性別と男性のぼかし表現の使用回数の関連を検証した結果

	係数	標準誤差	P 値
切片	-2.56	0.17	0.00
性別	0.30	0.28	0.28
従属変数: 話者ごとのぼかし表現の使用回数 n=58 AIC : 480.61			

表 7-4 の結果を見ると、聞き手の性別係数¹⁹は正值だが、有意な差は認められない ($p>.05$)。この結果から、男性のぼかし表現の平均使用回数は、聞き手の性別と関わらないことが言える。

7.3.4.3.2 聞き手が同性・異性の場合の女性の応答詞の使用状況

この節では、聞き手の性別が、女性の話し手のぼかし表現の使用回数に影響を与えるかどうかについても同様に検討する。聞き手が同性の場合の女性のぼかし表現の平均使用回数 (32.85) と異性の場合 (31.00) を比較した結果、異性の場合の方がわずかに低いことがわかった。その後、聞き手の性別と女性のぼかし表現の使用回数の関連を明らかにするために、負の二項回帰分析を行った。表 7-5 はその結果のまとめである。

¹⁹ この「聞き手の性別」変数は、「聞き手が同性」に対する「聞き手が異性」の効果(正の係数であれば、「聞き手が異性」のほうが多い)を表す。7.3.4.3 で出現した「聞き手の性別」変数はすべてこの方法で処理されたものである。

表 7-5 聞き手の性別と女性のぼかし表現の使用回数の関連を検証した結果

	係数	標準誤差	P 値
切片	-2.03	0.15	0.00
性別	-1.14	0.26	0.61
従属変数: 話者ごとのぼかし表現の使用回数 n=68 AIC : 614.66			

表 7-5 の結果を見ると、聞き手の性別係数は負値 (-1.14) だが、有意な差は認められない ($p>.05$)。この結果から、男性の場合と同様に、女性のぼかし表現の平均使用回数も、聞き手の性別と関わらないことが言える。

上記の調査結果を総合すると、以下ようになる。

- (1) 女性は男性よりもぼかし表現を頻繁に使用する。
- (2) 特に「とか」と「みたいな」の使用において女性が男性よりも多い傾向がある。
- (3) 男女ともに、ぼかし表現の使用は聞き手の性別と関わらない。

7.4 男女差の要因についての考察

先行研究と本研究の結果にはいくつかの違いが見られるが、これらの差異は様々な要因によるものと考えられる。特に、データの選定、調査期間、社会文化的背景の違い、調査と統計の方法の差異などが結果に影響を与えている可能性がある。研究の背景やアプローチが異なっていれば、同一の現象に対しても異なる解釈や結論が導かれるということは考えられないことではない。これらの点を踏まえつつ、先行研究の成果と本研究の結果との間に存在する相違を理解し、その原因を探究することが、今後の課題である。

続いて、本節では、女性は男性よりもぼかし表現を頻繁に使用すること、特に女性が男性よりも「とか」、「みたいな」を多く使用する傾向があるということについて、会話におけるぼかし表現の機能と社会的性役割期待の二つの観点から分析を深めていく。

まず、会話におけるぼかし表現の機能について検討する。

日本語のあいまいさについては、言語学の研究分野で広く認識され、多くの研究が行われている (松田、1999)。このあいまいさは、日本語特有の社会的文化と密接に関連しており、対人関係の調和を保つために意図的に用いられることが多い。近年の若者のことばはその傾向が顕著である (辻、1996 等)。特に、若者の会話を聞いていると、断定を避けて、ぼかし表現を使うことが目立つ (奥秋、1999)。

村田（1994）は、ぼかし表現の使用について、「こうすることで精神的な『省エネ』が行われているのだ。こうすることで安心し、精神的に楽になる」と指摘している。辻（1996、1999）によると、「とか」「っていうか」、「って感じ」「みたいな」などの若者語は、対人関係のもつ拘束力を緩衝するための語用論的方略とみなしうる。ぼかし表現の使用は、米川（1996）が提出した、現代の若者ことばの特徴の一つである「緩衝機能」（相手の感情を害したり傷つけたりするのを避けて、相手への印象を和らげ、言葉の暴力性を緩和する）と合致している。

先行研究によるぼかし表現の機能の理解と、本研究で明らかにされた日本の社会的性役割期待とを組み合わせると、性別によるぼかし表現の使用頻度の違いがより明確に理解できる。特に、女性が男性よりもぼかし表現を頻繁に使用する傾向について、考慮されるべきは以下の点である。

言語使用において、男性は一般に、より直接的または断定的なコミュニケーションが期待されることが多く、このようなスタイルは、自信と権威を示すことが男性に期待される社会的性役割に対応している。男性は、自己主張が強く、競争的であることを示すことで、地位を確立しようとする傾向がある。このため、男性はコミュニケーションにおいても、確信を持って意見を述べ、女性よりぼかし表現を避けることが多いのであろう。

対照的に、女性は一般に、柔軟性と適応性を重視し、相手の感情や反応に配慮することが期待されている。この背景には、女性が他者との調和を重んじ、対立を避け、より協調的なコミュニケーションを構築するために、直接的な表現を避け、曖昧性を含む言語表現を選択する傾向があるとされている。その結果、女性は確定的な主張を避けながらも意見や感想を柔らかく伝えるための手段として、「とか」、「みたいな」などのぼかし表現を多用するのであろう。

具体的なデータを見ると、7.3.4.1 節の表 2 で示したように、男性の「とか」と「みたいな」の平均使用回数がそれぞれ 9.98 回と 4.17 回であるのに対し、女性は 16.00 回と 7.34 回という結果であった。7.3.4.2 節の負の二項回帰分析の結果（表 7-4）も、男性に比べ、女性の「とか」の平均使用回数が 1.55 倍、「みたいな」が 1.72 倍多いであることを示している。これらのデータは、女性がぼかし表現を多用する傾向にあることを実証的に支持している。次には、実際の発話例を見てみよう。

発話例 7-1: (女性 x 女性)

<ていうか>{>}, 化粧品①とか、何がきついかってさ、うわさによると、あの、女の
JF041 関係②とかじゃん。

JF042 うん、人間関係っていうよ。

しかもさーあ、なんか、総合職③とかで入ったら、なんか、その一、何て言うんだ
JF042 ろ、あの、メイクするお姉さん④とかは(うん)、一般の人じゃん。

JF042 一般…、別採用⑤とかで、

JF041 うん。

JF042 なんか、すごい、自分、総合職で入る人のほうが(うん)、上司なわけじゃん。

JF041 あー。

それを、なんかこう、やってかなきゃいけないから(うん)、後々‘あとあと’は、
JF042 営業⑥とかで入っちゃうと。

略...

JF042 なんか、それがきつい⑦とか言ってたよ<軽く笑う>。

JF041 マジで?。

JF042 それを、やんなきゃいけないって考えると、今から憂鬱⑧とか言ってた。

JF041 えー。

まず、「とか」の使用例を検討する。村田(1994)によれば、ぼかし表現の「とか」は精神的「省エネ」効果があり、「限定を避ける」と「不確実な感じや伝聞の意味あいが強まる」という二つの用法がある。劉(2011)は、「とか」の機能を「例示暗示」、「断定回避」、「直示軽減」に分類している。いずれも内容を具体的に限定させず、広範囲の可能性や選択肢を示唆する。これにより、話し手は話題に対する責任を減らし、聞き手に解釈の余地を与える。

先行研究を踏まえ、発話例に対する具体的な分析を進めていく。発話例 7-1 では、JF041 と JF042 の二人の女性が職場での役割、特に女性が直面する化粧品会社での人間関係や職種の違いについて話している。この会話の中で、「とか」というぼかし表現が複数回使われている。

JF041 が話題を切り出し、化粧品業界における仕事の厳しさ、特に女性関係の難しさについて述べている。この過程で「①とか」を使用し、化粧品業界における仕事の難しさを示しながら、化粧品に限定せずに広げ、他の様々な業界や職種でも同様の状況があることを示唆している。その後、「②とか」を使用し、女性同士の関係が一例であることを示し、より広い範囲の人間関係の複雑さを包含していると言える。

続いて、JF042 が JF041 の発言を受けて、総合職と化粧品販売を行う女性(メイクするお姉さん)の違いを説明し、一般職との採用方法の違いについて話している。この過程で「③とか」を使用し、総合職を一例として挙げつつ、類似する他の職種も含んでいることを示し

ている。そして、「④とか」を使用し、「メイクするお姉さん」だけでなく、関連する職種を含む可能性があることを暗示している。「⑤とか」は、特定のものに言及せず、異なる採用方法があることを含んでいると言える。

その後、JF042 は総合職で入社すると上司になること、およびそれに伴う責任と将来の職務について述べている。「⑥とか」を使用し、営業に類似した他の仕事内容にも言及している。そして、日常の業務内容が原因で感じるストレスについて話している。「⑦とか」を使用し、話し手が「きつい」という感情を抱いていることを示しながらも、それが唯一の感情ではないことを暗示している。「⑧とか」も同じ用法であり、話し手が直接的に「憂鬱である」と断言することを避け、その他の感情も同時に感じている可能性を示唆している。

発話例 7-1 を見ると、JF041 と JF042 の二人の女性は「とか」を頻繁に使用し、会話を柔らかくし、直接的な表現を避けることで、話し手と聞き手の間の関係を傷つけることなく情報を伝えることを可能にする。これは、日本の社会文化的背景において、女性が無意識的に社会的に期待される協調的なコミュニケーションを取り、対立を避け、曖昧性を含む言語表現を選択する傾向があることを反映している。

発話例 7-2: (女性 x 男性)

JM119 《沈黙 1 秒》ね、あれ、す、さっき言った (はい)、その、なんだっけ、まく、幕張、メッセ?。

JF222 あー、幕張メッセで。

JM119 幕張メッセで=。

JF222 =はい、やってたんですよ。

JM119 うん。

JF222 で、物販がー (うん)、あの、普通だったらー、あたしが今まで参加していたイベントだったら (うん)、まー、昼、午前の部、午後の部 (うん) っていうふうに、まー (うん)、開演 (うん) があるとして (うんうん)、あの、物販もそれに合わせて、前後 1 時間、①みたいなふうにやってるはずーなんですね (うん、うん)。

JF222 かいじょー‘開場’から、1 時間前から物販やって (うん)、②みたいな感じで、ぜん、あの一、午前午後で分けてるのが多いんですよ (うん)。

JF222 そうじゃないと、すぐ売り切れるから。

JM119 うんうんうん。

JF222 でも、昨日‘きのう’のやつは、あの、朝 8 時から、ふふつ<笑い>、夜のじゅーしちじ‘17 時’ぐらいまでの (うん)、物販で。

JM119 なに、ぶっ通しの?。

JF222 ぶっ通し。

JF222 だからもう、は、もう 10 時ぐらいには売り切れ、で一す。

JF222 売り切れ、売り切れです③みたい (うん) な。

JF222 どうして、こんな<軽く笑いながら>ことに④みたいな<2 人で笑い>。

JM119 え、何時に行っただっけ?。

JF222 あたしは、そもそも夜の部だったんですよ。

JM119	あー。
JF222	なので(うん)、《少し間》なんか、めっちゃ早い時間に行かないといけない、⑥ みたいな。
JM119	うんうんうん。

次に、「みたいな」の使用例を検討する。佐竹(1995)によると、「みたいな」を文末に加えることで、発言の内容に対する不確実性を示し、聞き手に対する配慮を示すことができる。さらに、佐竹(1997)によれば、「みたいな」は、自分の意見を第三者の意見のように客観的に見せる役割を果たし、断定を避けながら話を進めることができるとされている。これらの研究から、「みたいな」というぼかし表現は、自分の意見や感情を直接的に表現するのではなく、ある種の客観性や第三者的な視点を加えることで、発言の厳しさを軽減し、対話の柔軟性を保持する機能がある。

続いて、発話例 7-2 を具体的な分析していく。JM119(男性)と JF222(女性)は幕張メッセで開催されたイベントの物販について話している。まず、JM119が「幕張、メッセ？」と言って場所を確認し、会話を開始している。その後、JF222は普通のイベントの物販は午前と午後の部に分けて、開演前後 1 時間で行われるが、昨日のイベントはそれとは異なり、朝から夜までぶっ通しで物販が行われたと説明している。この過程で、JF222は「①みたいな」と「②みたいな」を使用し、自身の発言が絶対的な事実ではなく、一つの一般的なパターンを示していることを示している。

そして、JF222は、実際に昨日のイベントでは 10 時頃には売り切れたことについて述べている。この過程で、「③みたいな」を使用し、物販が早く売り切れた状況を詳細に語ることなく、一般的な印象を伝える。これにより、JF222は自分の経験を柔らかく表現し、JM119との共感を求めつつ、絶対的な断定を避けている。そして、物販が予想外に早く終了したことに対する驚きや戸惑いなどの反応を話す際に、「④みたいな」を使用し、具体的な描写を避けつつ感情的な反応を示している。最後に、JF222は夜の部に参加していたため、非常に早い時間に行かなければならないという個人的な経験を JM119に共有している。また、「⑤みたいな」を使用し、自身の意見や経験を客観的かつ柔軟に提示し、異なる視点をもつ聞き手の理解や同意を得やすくしている。

発話例 7-2 を見ると、JM119と話す際に、JF222は「みたいな」を頻繁に使用し、断定を避け、発言の不確実性を示しつつ、情報を柔軟に提供し、会話の流れをスムーズにし、聞き手の共感や理解を促進する。社会的性役割期待に適応するために、女性はコミュニケーション

ョンにおいて直接的な断定を避け、発言の内容を和らげ、会話者の間の調和を促進する傾向があるということを反映している。

以上、本節ではぼかし表現の会話中における機能、社会的性役割期待という視点から、発話例を例示しつつ、性差が生じる要因について考察した。ぼかし表現の使用における性差は、男女が無意識のうちに異なる性役割期待を受けて、異なるコミュニケーションスタイルを持つことを反映している。

7.5 まとめ

本章では、現代の若者を対象とし、『BTSJ コーパス』を利用し、話し手と聞き手の性別がぼかし表現の使用に与える影響を検討した。その結果は以下のようになる。

- (1) 女性は男性よりもぼかし表現を頻繁に使用する。
- (2) 特に「とか」と「みたいな」の使用において女性が男性よりも多い傾向にある。
- (3) 男女ともに、ぼかし表現の使用は聞き手の性別と関わらない。

上記の結果から、男女が無意識のうちに異なる性役割期待を受けて、異なるコミュニケーションスタイルを持つことを示唆している。

第8章 コミュニケーションスタイルにおける性差

本章では、自然会話における発話の長さ、話題転換と割り込みの頻度を分析することで、現代若者の男女のコミュニケーションスタイルの傾向と違いを考察する。まず、8.1 節では、本章の目的について述べる。8.2 節では、本章における用語の定義を明確にする。8.3 節では、関連する先行研究を概観し、既に明らかにされた知見と未解決の課題を確認する。8.4 節では、コーパスのデータを基に実施した調査の概要を述べる。8.5 節では、調査結果を分析し、その影響要因を考察する。最後の 8.6 節では、本章のまとめである。

8.1 はじめに

男女間のコミュニケーションスタイルの違いについて、女性は他者との良好な関係を重視し、協調的なスタイルを取る一方で、男性は自らの発言権と支配を求め、競争的スタイルを取る傾向があると指摘されている（鈴木・柏木、2006）。

本研究では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2022 年 3 月 NCRB 連動版』を使用し、自然会話における発話の長さ、話題転換と割り込みの頻度などを分析することで、現代若者の男女のコミュニケーションスタイルの傾向と違いを考察する。また、日本の社会的性役割期待がこれらの違いにどのように影響しているかも考察の対象とする。

8.2 用語の定義

談話分析の分野では「話題」、「話題転換」、そして「割り込み」といった用語が異なる文脈で使用されている。本節ではこれらの用語に対する先行研究を参考にしながら、本研究での定義を明確にする。

日本語の「話題」に関する研究には、「話題」、「テーマ」、「トピック」という 3 つの用語が用いられている（南、1981；メイナード、1993；村上・熊取谷、1995）。本章では、これらの用語を「話題」として統一して使用する。また、南（1981）と村上・熊取谷（1995）の研究に基づいて、「話題」を「ある会話の中で取り上げられる内容」と定義する。会話の中での「話題」は、文章の「段落」に相当するものとする。

「話題転換」については、英語圏では「topic change」と「topic shift」があり、前者は会話中の焦点が完全に変わる場合、後者は焦点が部分的に移る場合を指す（Gardner、1987；Maynard、1980；Crow、1983）。日本語では、「転換」、「移行」、「推移」と表現されることがあるが、本研究では「話題転換」という用語を用い、先行研究（楊、2008）を参照し、これを「それまでの会話内容の焦点から外れた発話をした場合またはそのような発話行為」と定義する。また、その範囲は、先行研究と全く関連のないものから、ある程度関連を持つものまで含む。

「割り込み」については、Sacks 他（1974）が定義する会話の原則「一人ずつ話す」というシステムに反し、相手の発話中に他の参加者が発話を始める現象である（単に聞いていることを示す短いあいづちを除く）。藤井（1995）は割り込み発話を「調和系」「調整系」「独立系」の 3 つに分類している。「調和系」は相手の発話権を脅かさずにトピックが完全に保持される状況、「調整系」は相手の発話権を脅かさないもののトピックが完全には保持されない状況、「独立系」は相手の発話権が維持されない状況を指す。本研究では、特に発話権が侵害される「独立系」の割り込みに焦点を当て、調査対象とする。混乱を避けるため、本章では「独立系の割り込み」を単に「割り込み」と呼んで統一する。

本章では以上の用語定義を踏まえ、分析を行う。

8.3 先行研究

この節では、話題転換や割り込みと性差の関連について検討された先行研究を概観し、明らかになった知見と解決されていない問題点を整理する。これに基づき、本章の目的を明確化する。

多くの研究が話題転換や割り込みの分類、特徴、そしてその働きを分析している（藤井、1995；村上・熊取谷、1995；楊、2005）。しかし、社会言語学の視点から性差との関連を詳細に検討する研究はまだ十分ではない。

小田切（1997）は、日本人、アメリカ人、中国人の大学生および大学院生の日本語会話データを使用し、男女の会話開始における話題転換上の特徴について調査した。研究によると、同じ言語文化のグループ内での会話では、男性が話題転換を行うことが多く、女性はそれを維持する役割を果たしていることがわかった。さらに、話題転換における言語機能の使用にも性差が明らかになり、日本人女性は共有可能な情報を提示し共感を求めることが多いのに対し、日本人男性は相手の話を促す質問を多用し、時には冗談を交えて緊張した雰囲気を和らげる傾向があることが示された。

江原ら（1984）および山崎・江原（1993）は、男女間の会話において以下の特徴を指摘した。（1）男性同士の会話では沈黙が多い。（2）女性同士の会話では沈黙が少ない。（3）にもかかわらず、男性と女性の間の会話では、男性が女性の話に割り込みやすく、女性が聞き役になる。この現象から、性による権力の存在が示唆されている。

藤井（1995）は、男性同士、女性同士の会話に生じる「割り込み」の現象の分析から、男女のインターアクションのスタイルの違いの分析を試みた。割り込みの頻度全体を比較した結果、ほとんど性差が見られなかった。しかし、「調和系」の割り込みは男女共に半数以上を占め、「調整系」は女性に、「独立系」は男性に多く見られるという違いがあるという。これにより、女性は協調と連帯感に基づくインターアクションを、男性は競争と独立に基づくインターアクションを好む傾向があると分析されている。

上記の研究では、話題転換と割り込みの使用に関して多くの洞察を提供しているが、いくつかの未解決の課題も指摘される。話題転換と割り込みの使用は性別の影響を受けていることが明らかにされたが、なぜこのような性差が生じるのかについては議論されていない。また、時代の変化とともに、言語の使用における性差の動向も変化する可能性があるため、最

新のデータに基づいて、現代の日本人若者の日常会話における話題転換と割り込みの実態を再調査する必要がある。さらに、この二つの言語現象が反映されている男女のコミュニケーションスタイル及び会話における戦略の違いについても、さらなる分析が必要である。

以上を踏まえ、本章では、話者の社会的属性を考慮に入れた『BTSJ コーパス』の自然会話を利用し、年齢や上下関係などの条件を統一したうえで、男性同士ペア、女性同士ペア、男女ペアの自然会話における発話の長さ、話題転換と割り込みの実態と特徴を明らかにし、性別がどのような影響を与えるかについて検討する。最後に、得られた男女差に日本の社会的性役割期待がどのように関わっているかを解明することを目指す。

8.4 調査概要

8.4.1 調査目的

本章では、現代の若者を対象とし、自然会話のデータを用いて、以下の三つの課題を解明することを目的としている。

- (1) 発話の長さにおいて、性差があるか
- (2) 話題転換において、性差があるか
- (3) 割り込みにおいて、性差があるか

8.4.2 調査データ

本章の調査データは、『BTSJ コーパス』から抽出されたものである。選定基準として、会話者の社会的属性は「大学（院）生」、話者間の関係は「同等」に限定し、会話のジャンルは「雑談」、話者同士の面識は「既知（友人間）」とした。性別の組み合わせは「男性同士ペア」、「女性同士ペア」、「男女ペア」の三つに分類した。これらの条件に合致する会話データを検索した結果、合計 63 件のデータが選出された。具体的には「男性同士ペア」18 件、「女性同士ペア」23 件、「男女ペア」22 件が含まれている。

8.4.3 調査結果と分析

8.4.3.1 発話の長さにおいて、性差があるか

調査目的 (1) を明らかにするために、男性と女性それぞれの発話の平均字数を計算した。その結果、男性 (22.98) の平均字数が女性 (20.30) よりも多いことが明らかになった。さ

らに、この結果に対して、対応のある t 検定を行った結果、有意な差が得られた ($t(124) = 2.25$ 、 $p = 0.03$)。すなわち、男性の発話の長さが女性より多いことが示された。

8.4.3.2 話題転換において、性差があるか

この節では、調査目的 (2) について結果を分析する。男性と女性それぞれの話題転換の平均回数を計算した。男性 (8.28) のほうが女性 (5.47) よりも話題転換の平均回数が多いことが分かる。そして、性別と話し手の話題転換の回数の関連を明らかにするために、本調査は負の二項回帰分析を行った。表 8-1 はその結果を示している。

表 8-1 性別と話題転換の回数の関連を検証した統計の結果

	係数	標準誤差	P 値
切片	-3.45	0.14	0.00
性別	-0.42	0.19	0.03
従属変数: 話者ごとのぼかし表現の使用回数 $n=126$ AIC : 746.98			

表 8-1 から、性別の係数が負値 (-0.42) で、有意差がある ($p < .05$) ことが示される。この結果から、現代の若者において、男性は女性より話題転換をより多く使うと言える。具体的な数値に関して言えば、男性と比較した女性の話題転換の平均回数が 0.66 倍 ($= \exp(-0.42)$) となっている。

8.4.3.3 割り込みにおいて、性差があるか

この節では、調査目的 (3) について結果を分析する。前節と同じ方法で、男性と女性それぞれの割り込みの平均回数を計算した。女性 (3.69) のほうが男性 (2.53) よりも割り込みの平均回数が多いことが分かる。そして、性別と話し手の割り込みの回数の関連を明らかにするために、本調査は負の二項回帰分析を行った。表 8-2 はその結果を示している。

表 8-2 性別と割り込みの回数の関連を検証した統計の結果

	係数	標準誤差	P 値
切片	-4.62	0.16	0.00
性別	0.34	0.21	0.10
従属変数: 話者ごとのぼかし表現の使用回数 $n=126$ AIC : 573.88			

表 8-2 を見ると、性別の係数は正值 (0.34) であるが、有意差があるとは言えない ($p > .05$)。そのため、この結果から、男女は同程度の頻度で割り込みを使っていると言える。

上記の調査結果を総合すると、以下のようになる。

- (1) 男性は女性よりも発話の長さが長い。
- (2) 男性の話題転換は女性よりも多い傾向にある。
- (3) 男女はともに同程度の頻度で割り込みを使う。

8.5 男女差の要因についての考察

8.5.1 男性が女性よりも発話の長さが長い理由

上記の調査結果により、現代若者の男女間のコミュニケーションスタイルに関して明確な傾向と違いが示されている。本節では、日本の社会的性役割期待がこの違いにどのように影響しているかを考察する。

先行研究において議論された通り、男女のコミュニケーションスタイルの違いは、単なる個人の選択だけではなく、社会的性役割期待に根ざして形成されている。Tannen (1990) によれば、男性はより権力を重視し、「report-talk」を用いるのに対し、女性は「rapport-talk」で連帯感を重視する。本研究のデータからも、男性が競争的で、会話中に自己の地位を確立しようとする傾向が明らかになった。具体的には、男性は対話において支配的な役割を果たすことが期待されているため、発言機会を制御して主張を強く打ち出すスタイルを好み、「まあ」や「要するに」などの言葉を使用して自己の発言をまとめ、情報を整理することが多いということである。

一方で、女性に対しては、調和を重んじ、協調性を持つべきという社会的性役割期待が存在している。女性は無意識的にこの性役割期待に応じて、あいづちを打ったり、相手の話を補足したりするなど積極的に聞き手としての役割を担って、対話を続けやすい環境を作り出し、円滑なコミュニケーションを図る傾向がある。具体的には、女性は聞き手に対する配慮や理解を重視し、より共感的なニュアンスを持つ応答詞（「うん」）と、柔軟性を持つ逆接の接続詞（「けど」、「でも」など）を多用しているということが指摘できる。

次に、具体的な発話例を通じて、これらのスタイルがどのように実践されているかを詳しく見ていく。

発話例 8-1：（男性 x 男性）

JM067	俺の乗ってるの車検すらねーから、超[→]楽だよ。
JM080	いやー、<まじで?>{<}>。
JM067	<だから>{>}1 年点検、ポンポン出してるだけだよ。
JM067	維持できるから(うーん)、結構安い。
JM067	で、まして 1 年点検なんて、最悪別に自分である程度整備できれば、《少し間》別にやらなくてもいいわけだから。
JM080	うーんうん、そっか。
JM067	ぶっちゃけ、別に義務ではないから。
JM067	①まー、あくまで、やったほうが良いよっていう推奨だから(うーん)。
JM067	②まあ、す[無声]、やったほうがね、車両の持ちもよくはなるけど、最悪やらないって(あー)大丈夫だから、一応。
JM080	《少し間》すー[息の音]、[小声で]まじか。
JM067	《少し間》③まー、でも(うん)、車が好きなら車取ったほうが良い(うん)。
JM067	結局自分の好きなもん乗るのが一番いい。
JM080	そう。

この発話において、JM067(男性)とJM080(男性)が車の点検や整備について話している。この過程において、「まー」が複数回使用されている。第 4 章において議論された通り、マー類の基本的な機能は概言であり、まとめるようなマーカーとして、評価、主張、判断などを引き出す前によく使用されるとされている（川上、1993、1994；山田、2013；落合、2018；魏、2015）。

先行研究を踏まえ、発話例を分析してみよう。まず、JM067 が自身の車の保守方法や点検に対する考えを説明している。「①まー」を使って、考えを整理し、「あくまで、やったほうが良いよっていう推奨だから」という主張や意見を引き出している。その後、「②まー」を使って、車の維持に関する重要な考え方を引き出し、自分の話をまとめている。最後に、「③まー」を使うことによって、意見が押しつけがましくならず、「でも、車が好きなら車取ったほうが良い」という意見が提案として提示されている。。

発話例 8-1 を見ると、JM067 の発言は詳細で、自分の経験や意見を積極的に共有している。自分の経験や意見をはっきり相手に伝えるために、時間稼ぎや話を総括できる「まあ」を複数回使用している。この分析を通じて、日本の社会的性役割期待に基づく男性のコミュニケーションスタイルが如実に表れていることがわかった。男性は自己主張が強く、意見や知識を共有することで自身の立場を強化しようとしている傾向があるから、自分の考えを相手にはっきりと理解させるために、発話の平均的な長さも自然と長くなるのであろう。

発話例 8-2：（男性 x 女性）

JM134	で、東京は、一次試験が 7 月とか<だから>{<}>。
JF209	<ふーん>{>}。
JM134	そうそう、そしたらさ。
JF209	まー、2 個、受<ける>{<}>。
JM134	<[小声で]そうそう>{>}そう。
JM134	でも、ま、私学でー(<軽い笑い>)、うーん、専任で、
JF209	うんうんうん。
JM134	来てくださーいって言われたら、行くかな<ー[長く伸ばす]>{<}>。
JF209	<うんうんうんー、だよー>{>}。
JM134	でも、しが、うーん。
JM134	怖いからね、私学も。
JF209	うん、なんか、もう、
JM134	常<勤とかだとやっぱ>{<}>、
JF209	<経営がね>{>}ピンキリ<だからね、ほんと>{<}>。
JM134	<うーん>{>}、でも、一番あれかもしれない。
JM134	1 年目は、ま、私学の常勤??、
JF209	うんうん。
JM134	かー、公立の臨採‘りんさい’、臨<時採用>{<}>、
JF209	<あーあー>{>}、うんうん。
JM134	とかで、ま、正規雇用と同じ待遇を任期付きで受けながらー、《少し間》ほら、1 年目ってさ、税金が引かれられないじゃないですか。
JF209	《少し間》そうだっけ。
JM134	所得税が。
JF209	あ、そうなんだ、ははっ<はっ<軽い笑い>>{<}>。
JM134	<そうだ>{>}、らしいよ。

発話例 8-2 では、JM134（男性）と JF209（女性）が教育関連のキャリアオプションについて話している。この過程で、JM134 が会話の主導者として、積極的に情報や主張を提供し、可能性を説明している間、JF209 は反応し、確認する役割を果たしている。具体的な分析を見てみよう。

まず、JM134 は新しい話題を導入し（「で、東京は、一次試験が 7 月とか」）、さらに話を展開する（「でも、ま、私学でー」）。このように、対話の流れをコントロールしている。その後、JM134 は対話を一貫してリードし、頻繁にかつ長く発言している。これは彼が会話の中で積極的に自己の意見や情報を表現し、その内容を詳細に説明していることを示している。

JF209 の発言は主に相槌や軽い反応であり、JM134 の話を肯定し、彼の発言に共感を示している（「ふーん」、「うんうんうん」、「そうだっけ」、「あ、そうなんだ」など）。

これにより、彼女が対話の流れをスムーズに進め、快適な会話環境を作り出していることが示されている。

この会話の観察を通じて、男性が対話の主導権を握り、内容を決定している一方で、女性は聞き手として主に反応する役割を果たしていることが明らかになる。これは、性別によるコミュニケーションスタイルの違いと社会的性役割期待に深く根ざしている可能性があると考えられる。

8.5.2 男性の話題転換が女性よりも多い傾向にある原因

本節では、男性が女性よりも話題転換を頻繁に行う理由について考察する。

この現象は、男性が会話の流れや内容をコントロールしようとする傾向に起因していると考えられる。社会的性役割期待により、男性は無意識のうちに対話で支配的な立場を取ることが多い。具体的には、自己の関心事や提案したトピックに他者の注意を引き寄せ、会話を主導する役割を好む（McConnell-Ginet、1989）ということである。

対照的に、女性は社会的性役割期待の影響で、他者との調和や協調を重視し、会話の流れに柔軟に応じることが多い。これには、相手の話を補足することや共感の表現を通じて、積極的に聞き手としての役割を果たすことが含まれる。このような姿勢は、自ら話題を転換することよりも、既に導入されたトピックに対して反応し続ける傾向につながる。次に、具体的な発話例を詳しく見ていく。

発話例 8-3: (男性 x 女性)

JM115	あー、夏休み?。
JM115	=じゃあ夏休<み>{<}
JF212	<夏>{>}休み?。
JF212	《少し間》テーマ、夏休み<笑いながら>。
JM115	テーマ<笑いながら>。
JM115	あっはっはっはっあっはっはっはっはっはっ<2人で笑い>。
JF212	えー、《少し間》あ、なんか、あ、そう、フランス。
JM115	フランス。
JM115	《少し間》<フランス>{<}>、
JF212	<[小声で]フランス?>{>}。
JM115	えっ家族と行ったの?。
JF212	うーん、家族[最後は聞こえないぐらい小声で]。
JM115	家族。
JM115	あれっ[↑]、兄弟いんの?。

JF212	いない、ひー[息の音]。
JM115	ひとりっ子?。
JM115	へー。
JF212	ひとりっ子っぽいでしょ?。
JM115	ひとりっ子(<笑い>)っぽい<2人で笑い>。
JM115	なに、えっ3人?、で行った<の?>{<}>。
JF212	<うん>{>}、3人。
JM115	へー。
JM115	いいね。
JM115	どうでした?。
JF212	楽しかった<2人で笑い>。
JM115	なんかめっちゃさー(うん)、《少し間》カフェ、とか行ってなかった?。
JF212	うん、めっちゃ行ってた。
JM115	そういう感じなんだ[→]。
JF212	えーなんかねー、《少し間》全部おしやれ。
JM115	まじ?[→]。
JF212	カフェもー。
JF212	えっ、でも、まじでパンしかないの、ふ<ふふふふ<笑い>>{<}>。
JM115	<パンしか<軽く笑いながら>ないの?>{>}。
JF212	ちが‘違う’。
JF212	なんでもパンがついてくんの。
JM115	あ<ー>{<}>。
JF212	<ごはん>{>}に。
JM115	確かに、
JF212	そう=。
JF212	=<びっくりした>{<}>。

発話例 8-3 では、JM115（男性）と JF212（女性）が夏休みの話題やフランス旅行について話している。まず、JM115 は会話を始めるための質問や確認を頻繁に行っている（例：「どうだった?」、「あれっ[↑]、兄弟いんの?。」）。これにより、彼は主導者として話題の方向性を指定し、対話の流れを形成している。また、JM115 は話題についての詳細を求めることで、会話に深みを加える（例：「えっ家族と行ったの?」、「ひとりっ子?」）。これにより、JF212 からの情報を引き出し、会話をさらに掘り下げている。

一方で、JF212 は、新しい話題を提起することもあるが、JM115 の質問や話題提案に対して反応し、対話を展開させることで、会話の流れを支えていることが多い（例：「うん、めっちゃ行ってた」、「そう」）、また、自らの体験や感想を共有する発言も見られる。（例：「楽しかった」、「えーなんかねー、全部おしやれ」）。この発話例からも、男性が話題の導入や方向性を決定することが女性より多いことが明らかになった。

上記の発話例から、男性が会話をリードし、話題提供者としての役割を果たしている一方で、女性はより反応的で、相槌や共感を通じて対話を促進する役割を担っているという傾向が確認できる。この違いは、性別に基づく社会的性役割期待の影響に根ざしていることを示唆している。

調査結果(3)に関して、本研究では男女間で割り込みの頻度に差が見られなかった理由を以下の点から検討している。本研究では、藤井(1995)が分析した「独立系」の割り込み、すなわち相手の発話権が維持されないタイプの割り込みを焦点に置いている。選定されたデータは主に友人同士や親しい関係の参加者による対話で、これらの環境では参加者が互いにリラックスしており、自由に話をしている。このため、相手の発話権を侵害する形の「独立系」割り込みが男女ともに少なくなる可能性が考えられる。将来的には調査対象を拡大し、さらに多様なコンテキストや状況下でのデータを集めることで、新たな発見が期待される。

8.6 まとめ

本章では、自然会話における発話の長さ、話題転換と割り込みの頻度などを分析し、現代若者の男女のコミュニケーションスタイルの傾向と違いを考察した。また、これらの違いが日本の社会的性役割期待にどのように影響を受けたものかについても分析した。その結果は以下ようになる。

- (1) 男性は女性よりも発話の長さが長い。
- (2) 男性の話題転換は女性よりも多い傾向にある。
- (3) 男女はともに同程度の頻度で割り込みを使う。

これらの結果から、男性は会話の支配を好み、競争的なコミュニケーションスタイルを示す傾向がある一方、女性は反応的で、相槌を打つことや共感を示すことにより対話を促進するスタイルを好むことが明らかになった。これらの差異は、社会的性役割期待が性別に応じて人々のコミュニケーション行動に影響を及ぼすことを示唆している。

第9章 終章

本章では、本研究で得られた知見を総括し、今後の研究課題について論じる。

9.1 まとめ

本研究は、現代日本の若者の自然な会話における言語現象（フィラー、応答詞、接続詞、ぼかし表現など）を通じて、性差がどのように現れるか、またその現象が社会的性役割期待やコミュニケーションスタイルとどのように関連しているかを明らかにした。本研究では詳細な量的・質的分析を行うことを目標に、日本語自然会話コーパスから得られたデータに基づいて調査を実施した。本節では、考察で明らかにしたことをまとめる。

第1章では、本研究の目的と構成について述べた。

第2章では、ジェンダーによる言語使用の違いや社会的性役割期待に関する理論と既存の研究を概説した。これにより、研究の理論的基盤を固め、分析の方向性を設定した。

第3章では、調査データと研究方法を詳述した。

第4章では、フィラーにおける性差について調査を行った。その結果、フィラー全体を見ると、男性は女性より多くフィラーを使用すること、先行研究で議論のあった女性的フィラー「ナンカ類」は男女差にかかわらずほぼ同じ頻度で用いられること、「マー類」は男性によって多く用いられること、聞き手の性別の影響について、男女のフィラー全体の使用頻度に、聞き手が同性か異性という違いは関わらないことが明らかになった。

第5章では、応答詞における性差について考察した。その結果、「はい」と「いや」が男性に、「うん」が女性により多く使用されること、また女性の話し手が同性の聞き手に「うん」を、異性の聞き手に「はい」と「いや」を多用する傾向があるのに対して、男性の話し手は聞き手の性別による応答詞の使用の変化がほとんど見られないことが分かった。

第6章では接続詞の使用における性差を調査し、話し言葉における接続詞の平均使用回数では男女差がみられないこと、男性が同列と対比の接続詞を、女性が逆接の接続詞を多用する傾向があること、男女の接続詞の使用はともに聞き手の性別と関わらないことが明らかになった。

第7章では、ぼかし表現の使用における性差を調査し、女性が男性よりもぼかし表現を多用することが確認され、これが社会的期待と一致することを示した。特に「とか」と「みたいな」の使用において女性が男性よりも多い傾向にあること、男女ともに、ぼかし表現の使用は聞き手の性別と関わらないことを指摘した。

第8章では、発話の長さ、話題転換および割り込みの頻度の三つの方面から、コミュニケーションスタイルと社会的性役割期待との関連を検討した。その結果、男性は女性よりも発話の長さが長いこと、話題転換では男性が女性よりも多い傾向にあること、男女はともに同

程度の頻度で割り込みを使うことが明らかになった。また、性差がコミュニケーションスタイルに反映される背景には、社会的性役割期待が深く関与していることを明らかにした。

最後の第9章では、本研究のまとめ、問題点および今後の課題について述べた。

9.2 結論

本研究を通じて、現代日本の若者の自然会話におけるフィラー、応答詞、接続詞、ぼかし表現などの使用に性差が存在し、男性と女性が異なるコミュニケーションスタイルを採用していることが確認された。

McConnell-Ginet (1989)、Tannen (1990)、および Eagly & Wood (1999) などの社会的役割理論に基づいて、性別による行動の違いが単に生物学的なものではなく、社会的な役割と期待によって形成されることが指摘されている。本研究の結果も、性差が言語行動に反映されていることを示しており、これは社会的性役割期待が言語使用に深く影響を及ぼしていることを裏付けている。女性は関係構築や共感表現に重点を置くコミュニケーションスタイルを好み、ぼかし表現などを多用して相手との調和を図りながら話を進める傾向があり、これは社会から期待される「協調性」や「配慮深さ」といった女性像と一致している。一方、男性は自己主張や競争の強調に重点を置くコミュニケーションスタイルを使用し、これも「リーダーシップ」や「決断力」といった男性に期待される属性を反映している。これは、社会文化的要因が依然として強い影響を及ぼしており、言語行動の性差が完全には解消されていないことを示している。

先行研究において、性別に基づく言語行動の差が減少しているとの指摘があるものの、本研究では、その減少傾向の中にも、社会文化的影響下で持続する根深い差異が存在していることを確認した。この点において、社会的性役割期待が依然として言語表現に強い影響を与えていることが見て取れる。しかし、その影響は過去に比べて相対的に減少しているという点については、本研究は否定しない。具体的な言語現象に焦点を当てると、本研究の結果において、応答詞を除き、聞き手の性別が話し手の言語行動に大きな影響を与えていないことが明らかになった。この点は、性別役割に対する社会的期待が変化していることを示唆しており、ジェンダーの社会構築性についての理解を深める一助となる。

この研究は、言語学だけでなく、教育学および社会科学の領域においても重要な示唆を提供する。特に、ジェンダーに基づく言語行動の理解を深めることは、教育現場におけるコミュニケーションスキルの教育や、より公平な社会的対話の促進に直接的な影響を与える可能

性がある。また、日本社会全体においてジェンダー平等を推進する議論にも、実証的な基盤を提供することが期待される。これにより、より公正で包括的なコミュニケーション環境の構築への貢献を目指している。

9.3 問題点と今後の展望

本研究の成果は有意義なものではあるものの、いくつかの制約や問題点が存在する。これらの点を以下に詳述する。

本研究は特定の年齢層の日本の若者に焦点を当てている。本研究の方法論を用いて、異なる文化背景や年齢層の集団に対する研究を行うことで、言語現象の普遍性や特異性を探す。これにより、言語使用のジェンダー差が文化や年齢によってどのように異なるかを明らかにすることができる。また、本研究は上下関係などの人間関係の条件を統一し、友人関係の大学生の雑談を調査データとして選定したため、会話場面が限られている。初対面の場合、フォーマルな場面など、より広い場面における言語使用の実態について全面的な考察を行なえば、新たな差異が発見されうると考える。

本研究はフィラーや応答詞、接続詞、ぼかし表現といった特定の言語現象に焦点を当てており、それらの言語要素におけるジェンダー差の分析は妥当であるものの、より広範な言語行動や非言語的要素（ジェスチャー、表情、声のトーンなど）を考慮に入れていない点では、研究の範囲を限定してしまっている。これらの要素も含めた分析が行われれば、より全体的なコミュニケーションスタイルの違いを理解できる可能性がある。また、社会的性役割期待が変遷する中で、若者たちの言語表現にどのような変化が生じているのかを追跡する長期的な研究も求められる。

以上のような問題点の解決に向け、今後の研究では、より広範なデータセットの利用、多様な言語現象や非言語要素の分析などを通じて、これらの制約を克服することが望まれる。これにより、より一般化可能で包括的な研究成果を得ることができるであろう。

本研究によって明らかにされた現代日本の若者の言語使用における性差は、さらなる研究の基盤を形成している。今後の研究においては、以下の三つの方向が考えられる。

(1) 異文化間比較研究への発展

本研究では日本の若者の言語行動に限定して調査を行ったが、本研究の知見を他の文化圏や異なる社会構造を持つ国々と比較することで、性差を反映する言語要素が文化的背景にど

のように影響されるかを探究する。異文化間での比較は、特定の言語現象が普遍的なものなのか、それとも特定の社会文化的条件下でのみ発生するのかを理解するのに役立つ。

(2) デジタルコミュニケーションの影響分析

ソーシャルメディアやデジタル通信ツールが急速に普及する現代において、これらの新しいコミュニケーションの手段が言語使用に与える影響を分析することが重要である。特に、テキストベースのコミュニケーションが社会的性役割期待やジェンダー表現にどのように作用するかを明らかにすることで、デジタル時代の言語行動の変化を捉えることができる。

(3) 教育への応用

この研究から得られた知見を基に、教育現場での実践的な応用を考えることができる。例えば、言語使用の違いを理解し尊重することを教材に取り入れることで、より効果的なコミュニケーション能力について学生に教えることが可能である。また、性差を意識した教育プログラムの開発が、学生間のコミュニケーションの改善に寄与するかもしれない。

これらの展望は、既存の研究で得られた知見を拡張し、より包括的な理解へと導くためのものである。社会言語学の観点から見ると、これらの研究は、言語が単なるコミュニケーションの手段ではなく、文化的、社会的な構造を反映するものとしての役割を更に明らかにすることが期待される。また、言語研究の結果を社会的実践や教育改革に生かすことで、より公平で包括的なコミュニケーションが促進されることを期待している。

参考文献

- 青木紀美子・大竹晶子・小笠原晶子（2022）「メディアは社会の多様性を反映しているか①
調査報告 テレビのジェンダーバランス」『放送研究と調査』72（5）, 2-28.
- 飯尾牧子（2006）「短大生の話し言葉にみる談話標識『なんか』の一考察」『東洋女子短期
大学紀要』38, 67-77.
- 石川聡子・山名幸世（2021）「子ども向け絵本に描かれた登場人物のキャリアとジェンダ
ー——女性の科学技術系人材育成の背景にあるもの——」『大阪教育大学紀要総合教育科
学』69, 21-40.
- 石倉瑞恵（2021）「大学生が受容・内在化するジェンダー——主流イメージの再生産と脱主流
への葛藤——」『石川県立大学研究紀要』4, 107-116.
- 石黒圭（2008）『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房.

- 市川孝（編）（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版.
- 井出祥子（編）（1979）『女のことば、男のことば』日本経済通信社.
- 井出祥子（1982）「第4章 待遇表現と男女差の比較」「日英語比較講座 5 文化と社会」111-148, 大修館書店.
- 伊藤裕子（1978）「性役割の評価に関する研究」『教育心理学研究』26, 1-11.
- 伊藤裕子（1997）「高校生における性差観の形成環境と性役割選択—性差観スケール(SGC)作成の試み—」『教育心理学研究』45（4）, 396-404.
- 岩田一成（2014）「指示詞から感動詞へ：アノ(一)・ソノ(一)について」『山口国文』37 , 26-38.
- 上野千鶴子（編）（1994）『近代家族の成立と終焉』岩波書店.
- 上森さくら・栖原佳乃子（2020）「小学校道徳教科書のジェンダー視点からの分析（1）」『教育実践研究』46, 53-61.
- 宇佐美まゆみ（2019）「基本的な文字化の原則 Basic Transcription System for Japanese: BTSJ 2019 年改訂版」<https://isplad.jp/wordpress/wp-content/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf>（2024 年 5 月 20 日最終アクセス）.
- 牛山恵（2005）「小学校国語科教材とジェンダー」『都留文科大学研究紀要』61, 23-43.
- 内田伸子（1997）「会話行動に見られる性差」井出祥子（編）『女性語の世界』74-93. 明治書院
- 江原由美子・山崎敬一・好井裕明（1984）「性差別のエスノメソドロジ—対面的コミュニケーション状況における権力装置」『現代社会学』18, 143-176.
- 遠藤織枝（1983）「女性を表すことば（2）—明治 20 年代を中心に—」『ことば』4, 1-27.
- 遠藤織枝（2002）「男性のことばの文末」現代日本語研究会（編）『男性のことば・職場編』33-45, ひつじ書房.
- 大和田智文（2010）「若者における一人称の使用の様相とその機能的意味」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』13, 77-86.
- 小川早百合（1997）「現代の若者会話における文末表現の男女差」『日本語教育論文集—小出調子先生退職記念—』『日本語教育論文集-小出詞子先生退職記念-』編集委員会（編）205-219, 凡人社.
- 小川早百合（2006）「話しことばの終助詞の男女差の実際と意識—日本語教育での活用へ向けて—」日本語ジェンダー学会（編）『日本語とジェンダー』39-51, ひつじ書房.

- 小川珠子 (1996) 「日本人児童・生徒・学生及び外国人日本語学習者の作文における接続表現の発達過程」 平成 7 年度お茶の水女子大学大学院修士論文.
- 奥秋義信 (1996) 「そこが知りたい日本語教育何でも相談—増えている“ぼかし表現”」 『月刊日本語』 12 (11) , 40-43.
- 奥津敬一郎 (1988) 「『はい』と『いいえ』の機能」 井上和子 (編) 『日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究：研究報告』 4, 133-182.
- 奥津敬一郎 (1989) 「応答詞『はい』と『いいえ』の機能」 『日本語学』 8 (8) , 4-14.
- 尾崎喜光 (1997) 「女性専用の文末形式のいま」 現代日本語研究会 (編) 『女性のことば・職場編』 33-58, ひつじ書房.
- 小田切由香子 (1997) 「異言語文化間・男女間コミュニケーションにおける性差—会話開始における題転換上の特徴—」 『横浜国立大学留学生センター紀要』 4, 42-53.
- 落合哉人 (2018) 「電子媒体における『フィラー』」 『筑波日本語研究』 22 , 75-104.
- 柏木恵子 (1967) 「青年期における性役割の認知」 『教育心理学研究』 15, 193-202.
- 柏木恵子 (1972) 「青年期における性役割の認知 (Ⅱ)」 『教育心理学研究』 20, 48-58.
- 柏木恵子 (1974) 「青年期における性役割の認知 (Ⅱ)」 『教育心理学研究』 22, 205-215.
- 金丸芙美 (1997) 「人称代名詞・呼称」 井出祥子 (編) 『女性語の世界』 15-32, 明治書院.
- 金山泰子・二宮理佳 (2020) 「大学生の『はい』『ええ』の使い分けに関する意識調査—漫画を使用したアンケートを通して—」 『ICU 日本語教育研究』 16, 23-37.
- 川上恭子 (1993) 「談話における『まあ』の用法と機能 (一)：応答型用法の分類」 『園田国文』 14, 69-78.
- 川上恭子 (1994) 「談話における『まあ』の用法と機能 (二)：展開型用法の分類」 『園田国文』 15, 69-79.
- 魏春娥 (2015) 「談話におけるフィラー『ま (一)』の待遇差に関する予備的考察」 『東アジア研究』 13 , 75-93.
- 黒須理紗子 (2008) 「女ことば・男ことばの研究：差異と変遷」 『日本文学』 104, 187-203.
- 小出慶一 (2011) 「日本語学習者の発話に見られるフィラー『こう』について」 『埼玉大学紀要教養学部』 46 (2) , 99-112.
- 小出慶一 (2012) 「『いや』の否定性と談話での機能」 『埼玉大学紀要 (教養学部)』 47 (2) , 145-156.

- 国立国語研究所（編）（1960）『話しことばの文型 1 対話資料による研究』国立国語研究所.
- 小林美恵子（1993）「世代と女性語—若い世代のことばの『中性化』について—」『日本語学』12（6）, 181-192.
- 小林美恵子（1999）「自称・対称は中性化するか?」現代日本語研究会（編）『女性のことば・職場編』113-137, ひつじ書房.
- 小林美恵子（2016）「『日常生活』における自称詞—特徴と使い分け—」現代日本語研究会（編）『談話資料 日常生活のことば』41-72, ひつじ書房.
- 佐久間まゆみ（1979）「女性の論理と文章—月刊誌巻頭随筆及び入社試験小作文における接続語句使用の男女比較の試み」人間文化研究会（編）『女性と文化—社会・母性・歴史—』55-95, 白馬出版.
- 桜井隆（2002）「『おれ』と『ぼく』」現代日本語研究会（編）『男性のことば・職場編』121-132, ひつじ書房.
- 佐々木尚之（2012）「JGSS 累積データ 2000-2010 にみる日本人の性別役割分業意識の趨勢—Age-Period-Cohort Analysis の適用—」『日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集』12, 69-80.
- 佐竹秀雄（1995）「若者ことばとレトリック」『日本語学』14（11）, 53-60.
- 佐竹秀雄（1997）「若者ことばと学校文法」『日本語学』16（4）, 55-64.
- 定延利之（2000）『認知言語論』大修館書店.
- 寿岳章子（1979）『日本語と女』岩波書店.
- 鈴木淳子・柏木恵子（2006）『心理学の世界専門編 5 ジェンダーの心理学：心と行動への新しい視座』培風館.
- 鈴木佳奈（2000）「会話における『なんか』の機能に関する一考察」『大阪大学言語文化学』9, 63-78.
- 鈴木孝夫（1982）「自称詞と対称詞の比較」國廣哲彌（編）『日英語比較講座 5 文化と社会』17-59, 大修館書店.
- 泉子・K・メイナード（編）（1993）『会話分析』くろしお出版.
- 田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会（編）『文法と音声』257-279, くろしお出版.

- 武田京子（1999）「『こどものとも』に表れた性差」『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』9, 51-61.
- 田中和子（1984）「新聞にみる構造化された性差別表現」磯村英一・福岡安則（編）『マスコミと差別語問題』179-201, 明石書店.
- 陳一吟（編）（2013）『日本語におけるジェンダー表現—大学生の使用実態および意識を中心に—』花書院.
- 陳志文（2005）「男性誌と女性誌に見られる文体特性の相違—『論理的』と『感性的』」『計量国語学』25（1）, 32-45.
- 辻大介（1996）「若者におけるコミュニケーション様式変化—若者語のポストモダニティー」『東京大学社会情報研究所紀要』51, 42-61.
- 辻大介（1999）「若者語と対人関係—大学生調査の結果から」『東京大学社会情報研究所紀要』57, 17-42.
- 富樫純一（2002）「「はい」と「うん」の関係をめぐって」定延利之（編）『「うん」と「そう」の言語学』127-157, ひつじ書房.
- 中島悦子（編）（2011）『自然談話の文法：疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞』おうふう.
- 中田敏夫（1989）「国語教科書接続詞にみる男女差」『金沢大学語学・文学研究』18, 6-17.
- 中村桃子（編）（1995）『ことばとフェミニズム』勁草書房.
- 中村桃子（編）（2010）『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社.
- 日本語教育学会（編）（1990）『日本語教育ハンドブック』大修館書店.
- 野口芙美（2018）「職場における否定応答詞の使用：性差に注目して」『人間文化創成科学論叢』20, 85-93.
- 野口芙美（2020）「真偽疑問文に対する否定応答表現—形式面に着目して—」『東京福祉大学・大学院紀要』10（1-2）, 15-25.
- 橋本紀子（2019）「道徳教育におけるジェンダー・セクシュアリティの問題—中学校『特別の教科道徳』の教科書分析を中心に—」教育科学研究会「道徳と教育」部会（編）『道徳教育の批判と創造—社会転換期を拓く』100-120, エイデル研究所.
- 藤井桂子（1995）「発話の重なりについて—分類の試み—」『言語文化と日本語教育』10, 13-23.

- 増田祥子 (2016) 「女性文末形式の使用の現在—『女性のことば・職場編』調査と比較して—」現代日本語研究会・遠藤他 (編) 『談話資料 日常生活のことば』 131-154, ひつじ書房.
- 松田克進 (2000) 「日本語文化の曖昧さに関する一考察」『広島修大論集 人文編』 40 (2) , 389-411.
- 松元敬子 (2005) 「ジェンダーからみた中学国語教科書—教科書が伝える男女観と未来像—」『日本語とジェンダー』 5, 61-77.
- 三浦まり・高橋恵子・金子雅臣・大塚雄作 (2019) 「ジェンダー・クォータ (性別割り当て) とハラスメント—政治学と心理学の架橋—」『教育心理学年報』 58, 330-350.
- 水本光美 (2006) 「テレビドラマと実社会における女性文末詞使用のずれにみるジェンダーフィルタ」日本語ジェンダー学会 (編) 『日本語とジェンダー』 73-94, ひつじ書房.
- 南不二男 (1981) 「日常会話の話題の推移—松江テキストを資料として—」『藤原与一先生古希記念論集 方言学論叢 1 一方言研究の推進—』 87-112, 三省堂.
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995) 「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』 62, 101-111.
- 村田美穂子 (1994) 「ぼかし表現の新方向」『国文学：解釈と鑑賞』 59 (7) , 119-126.
- 山崎敬一・江原由美子 (1993) 「沈黙と行為」『ソシオロギス』 17, 57-78.
- 山田葵 (2013) 「自然談話における『マア』の使用について：談話上の機能と話し手の情報処理のプロセス」『南山言語科学』 8, 295-312.
- 山根智恵 (編) (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』 くろしお出版.
- 楊虹 (2005) 「話題転換研究の概観—タイプと方略を中心に—」『言語文化と日本語教育 増刊特集号, 第二言語習得・教育の研究最前線—2005 年版』 159-185.
- 湯川隆子・清水裕士・廣岡秀一 (2008) 「大学生のジェンダー特性語認知の経年変化—テキスト・マイニングによる連想反応の探索的分析から—」『奈良大学紀要』 36, 131-150.
- 四本裕子 (2021) 「脳や行動の性差」『認知神経科学』 23 (2) , 62-68.
- 米川明彦 (編) (1996) 『現代若者ことば考』 丸善出版.
- 劉曉傑 (2011) 「ぼかし表現「とか」についての考察」『相愛大学人文学研究所研究年報』 5, 48-35.
- れいのるず秋葉かつえ (2001) 「ポーズ・フィラーから見た女性の話し方の変化と現状」遠藤織枝 (編) 『女とことば』 100-112, 明石書店.

- 若松素子・柏木恵子 (1984) 「女性の性役割認知」 『東京女子大学紀要論集』 34 (2) , 61-81.
- 渡辺美知子・外山翔平 (2017) 「『日本語話し言葉コーパス』と対照可能にデザインされた英語話し言葉コーパスにおけるフィラーの分布の特徴」 『国立国語研究所論集』 12, 181-203.
- 渡邊香 (2016) 「小説に見られる女性キャラクターの会話スタイルの変化—女性表現は今後衰退するのか—」 金水敏 (編) 『役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ 2015 報告論集』 118-128.
- 渡邊寛 (2019) 「男子大学生の男性役割態度と関連する親の要因」 『パーソナリティ研究』 28 (1) , 28-41.
- Bem, S. L. (1981) Gender Schema Theory: A cognitive account of sex-typing. *Psychological Review*. 88 (4) , 354-364.
- Bem, S. L. (1984) Androgyny and gender schema theory: A conceptual and empirical integration. In T. B. Sonderegger (Ed.) , *Nebraska symposium on motivation*. 32, 179-226.
- Butler, J. (1993) *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of "Sex"*, London and New York: Routledge.
- Butler, J. (1999) *Gender Trouble: 10th Anniversary Edition*, London and New York: Routledge.
- Cameron, D. (1990) *The Feminist Critique of Language: A Reader*, New York: Routledge.
- Candace West & Don H. Zimmerman (1987) Doing Gender. *Gender & Society*. 1 (2) , 125-151.
- Crow, B. (1983) Topic shifts in Couples' Conversation, In R. Craig & K. Tracy (Eds.), *Conversational coherence: form, structure, and strategy*, Beverly Hills CA: Sage Publications, 136-156.
- Eagly, A. H. & Wood, W. (1999) The origins of sex differences in human behavior: Evolved dispositions versus social roles. *American Psychologist*, 54 (6) , 408-423.
- Gardner, R. (1987) The identification and role of topic in spoken interaction, *Semiotica*, 65, 129-141.
- Lakoff, R. (1975) *Language and Woman's Place*. New York: Harper & Row.

- Maynard, D.W. (1980) Placement of topic changes in conversation, *Semiotica*, 30 (3-4) , 263-290.
- Sacks, H. , Schegloff, E. & Jefferson, G. (1974) A Simplest Systematics for the Organization of Turn Taking in Conversation, *Language* , 50, 696-735.
- Sally McConnell-Ginet (1989) (著) , れいのるず秋葉かつえ (訳) (2004) 「女たちによる意味の (再) 生産」 れいのるず秋葉かつえ・永原浩行 (編) 『ジェンダーの言語学』 23-48. 明石書店.[Sally McConnell-Ginet. (1989) The Sexual (Re) Production of Meaning : A Discourse-Based Theory.]
- Tannen, D. (1990) *You Just Don't Understand!/: Women and Men in Conversation*. Harper Collins.